

外環状道路関係文化財発掘調査報告書13

高 畑 遺 跡

—第18次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集

2002年

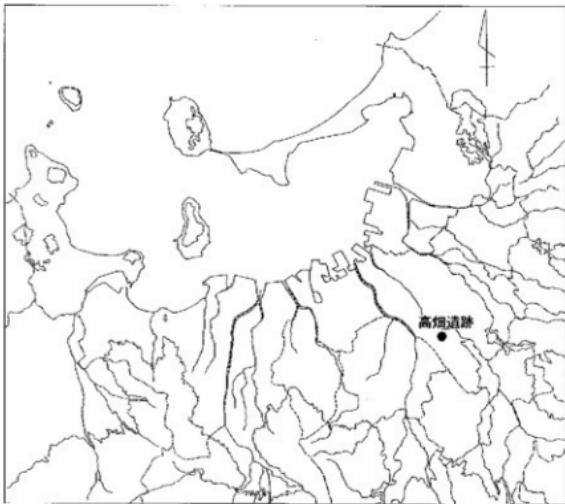
福岡市教育委員会

外環状道路関係文化財発掘調査報告書13

高 畑 遺 跡

—第18次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集



2002年

福岡市教育委員会



卷頭写真 1 SF002 (南から)



卷頭写真 2 SF002内波板状遺構土層



卷頭写真 3 SX015 1 (西から)



卷頭写真 4 SX015 2 (東から)

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えいくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する高畠遺跡第18次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり費用負担等のご協力を賜りました国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所と福岡北九州高速道路公社をはじめとする関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成14年3月5日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成11・12年度に博多区板付6丁目地内において実施した高畠遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、上角智希、坂本真一、坂元雄紀、小田裕樹、木内智康、大島隆之、瀬戸啓治、長野嘉一、中村桂子が行った。
3. 遺物の実測は長家、上角、坂本、小田、米倉秀紀、井上加代子、渡辺誠、西田絵美が行った。
4. 製図は長家、上角、小田、米倉、久家春美、久保恵美が行った。
5. 写真は長家、上角が撮影した。
6. 第二章の道路状遺構集成表は坂本真一（福岡大学大学院生）が作成した。
7. 第三章の旧石器に関しては吉留秀敏氏（福岡市教育委員会）に執筆をお願いした。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。
9. 本書で用いる遺構番号は各調査で通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（S B）、竪穴住居跡（S C）、土坑（S K）、溝（S D）、井戸（S E）、ピット（S P）、道路状遺構（S F）、不明遺構（S X）である。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
11. 本書の執筆は第二章を長家、第一章・三章を上角が担当し、編集は上角が行った。

遺跡名	高畠遺跡第18次調査	遺跡略号	9936
所在地	博多区板付6丁目地内	遺跡略号	TKB-18
開発面積	11,000m ²	調査面積	4,750m ²
調査期間	平成11年9月1日～平成12年6月28日		

目 次

第一章はじめに.....	1
1 調査にいたる経緯.....	1
2 調査組織.....	1
3 立地と環境.....	1
4 既往の調査.....	3
5 調査の概要.....	7
第二章 I区の調査.....	9
1 調査概要.....	9
2 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物.....	9
堅穴住居跡（SC）.....	9
貯蔵穴（SU）.....	14
3 古代～中世の遺構と遺物.....	14
土坑（SK）.....	14
溝（SD）.....	15
道路（SF）.....	22
4 小結.....	43
第三章 II・III区の調査.....	61
1 調査の概要.....	61
2 基本層序.....	61
3 遺構と遺物.....	64
1) 堅穴住居跡.....	64
2) 捩立柱建物.....	82
3) 井戸.....	85
4) 土壙.....	107
5) 溝.....	120
6) 古墳時代から古代にかけての遺物包含層.....	127
7) 旧石器.....	129
4 小結.....	130

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡（1/50000）.....	2
第2図 高畠遺跡の各調査地点の位置（1/4000）.....	4
第3図 大正末～昭和初期の地形図（1/4000）.....	5
第4図 調査区位置図（1/1500）.....	8
第5図 調査区土層図（1/80）.....	10
第6図 I区全体図（1/200）.....	
第7図 SC001・016及び出土遺物実測図（1/50、1/3）.....	11
第8図 SU010・011・012・013出土遺物実測図（1/40）.....	12
第9図 SU010・012・013出土遺物実測図（1/3）.....	13
第10図 SK014及び出土遺物実測図（1/40、1/3）.....	15
第11図 SD005・006土層実測図（1/60）.....	16
第12図 SD005出土遺物実測図1（1/3）.....	17
第13図 SD005出土遺物実測図2（1/3）.....	18
第14図 SD005出土遺物実測図3（1/3）.....	19
第15図 SD006出土遺物実測図1（1/3）.....	20
第16図 SD006出土遺物実測図2（1/2、1/3）.....	21
第17図 SD009及び出土遺物実測図（1/60、1/3）.....	22

第18図	SF002実測図（1/100）
第19図	波板状遺構I 実測図（1/50）
第20図	波板状遺構I 出土遺物実測図（1/3）
第21図	波板状遺構II 実測図（1/50）
第22図	波板状遺構II 出土遺物実測図（1/3）
第23図	波板状遺構III～VI 実測図（1/50）
第24図	波板状遺構III 出土遺物実測図I（1/3）
第25図	波板状遺構III 出土遺物実測図2（1/3）
第26図	波板状遺構III 出土遺物実測図3（1/3）
第27図	波板状遺構III 出土遺物実測図4（1/3）
第28図	波板状遺構IV～VI 出土遺物実測図（1/2、1/3）
第29図	波板状遺構VII 及び出土遺物実測図（1/50、1/3）
第30図	SF002出土その他の遺物（1/3）
第31図	SX015実測図（1/20）
第32図	SX015出土遺物実測図1（1/3、1/4）
第33図	SX015出土遺物実測図2（1/4）
第34図	SX015出土遺物実測図3（1/4）
第35図	SX015出土遺物実測図4（1/4）
第36図	SX015出土遺物実測図5（1/4）
第37図	SX015出土遺物実測図6（1/4）
第38図	SF002上層水田土中及びSD004出土遺物（1/2、1/3）
第39図	官道復元図（1/8000）
第40図	板付遺跡第38次、41次全体図及び出土遺物実測図（1/250、1/400、1/4）
第41図	II・III区遺構配置図（1/300）
第42図	北壁土層図（1/80）
第43図	SC052実測図（1/40）
第44図	SC053実測図（1/60）
第45図	SC052・053出土遺物実測図（1/3）
第46図	SC053・054出土遺物実測図（1/3、1/2）
第47図	SC054・056実測図（1/40）
第48図	SC057実測図（1/60）、同貼床除去後実測図（1/100）
第49図	SC057出土遺物実測図①（1/3）
第50図	SC057出土遺物実測図②（1/3）
第51図	SC058実測図、同貼床除去後実測図（1/40）
第52図	SC058滑石原石の出土状況（1/10）
第53図	SC058出土遺物実測図（1/3）
第54図	SC058出土滑石製品実測図（1/1）
第55図	SC059・063・065実測図（1/60）
第56図	SC059・065・066出土遺物実測図（1/3）
第57図	SC064・066・068・082実測図（1/40）
第58図	SB047・048実測図（1/60）
第59図	SB049・050実測図（1/60）
第60図	SB051・085実測図（1/60）
第61図	SE037・039実測図（1/40）
第62図	SF037出土遺物実測図①（1/4）
第63図	SE037出土遺物実測図②（1/3）
第64図	SE037出土遺物実測図③（1/3）
第65図	SE037出土遺物実測図④（1/3）
第66図	SE039出土遺物実測図（1/3）
第67図	SE040・041・043・046・070実測図（1/40）

第68図	SE040出土遺物実測図① (1/3)	94
第69図	SE040出土遺物実測図② (1/3)	95
第70図	SE041・043・060出土遺物実測図 (1/3)	97
第71図	SE046出土遺物実測図 (1/3、1/4)	98
第72図	SE060・073・074・076・077・081実測図 (1/40)	99
第73図	SE070出土遺物実測図 (1/3)	101
第74図	SE073・074・076出土遺物実測図 (1/3、1/12)	102
第75図	SE077出土遺物実測図 (1/4、1/3)	104
第76図	SE081出土遺物実測図① (1/3)	105
第77図	SE081出土遺物実測図② (1/3)	106
第78図	SK035・036・045・069・071・075実測図 (1/40)	108
第79図	SK035・036出土遺物実測図 (1/3)	109
第80図	SK038・044・061・072実測図 (1/30、1/20)	110
第81図	SK038出土遺物実測図 (1/3、1/1)	111
第82図	SK044出土遺物実測図① (1/3)	113
第83図	SK044・061出土遺物実測図 (1/3)	114
第84図	SK072出土遺物実測図 (1/3)	116
第85図	SK073・079出土遺物実測図 (1/3、1/6)	117
第86図	SK078・079・080・083・084実測図 (1/40)	118
第87図	SK083・084出土遺物実測図 (1/3、1/2)	119
第88図	SD031土層図 (1/60)	120
第89図	SD031出土遺物実測図① (1/3)	122
第90図	SD031出土遺物実測図② (1/3)	123
第91図	SD031出土遺物実測図③ (1/3)	124
第92図	SD031出土遺物実測図④ (1/3、1/2、1/1、1/4)	125
第93図	SD031上面包含層出土遺物実測図 (1/3、1/2)	126
第94図	包含層出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/2)	128
第95図	SD031出土旧石器実測図 (1/1)	129
第96図	滑石製白玉の制作工程復元図.....	132
付 図	II・III区全体図 (1/200)	付圖

表 目 次

福岡県内の道路状況図.....	48
第1表 高伝遺跡調査一覧表.....	6
第2表 SC058出土滑石原石計測表.....	75
第3表 II・III区時期別遺構分布表.....	131

写 真 目 次

巻頭写真1 SF002 (南から)	
巻頭写真2 SF002内波板状遺構上層	
巻頭写真3 SX015(西から) 1	
巻頭写真4 SX015(東から) 2	
写真1 SF002作業風景 (南から)	52
写真2 調査区全景 (上空から)	53
写真3 調査区全景 (北から 正面は大宰府方向)	53
写真4 SC001土層	54
写真5 SC001 (北から)	54
写真6 SU010 (西から)	54

写真7	SU011 (南から)	54
写真8	SU012 (東から)	54
写真9	SU013 (東から)	54
写真10	SK014 (東から)	55
写真11	SD005・006 (南から)	55
写真12	SD005・006土層1	55
写真13	SD006土層2	55
写真14	SD006土層3	55
写真15	SD009 (西から)	55
写真16	SF002南壁土層	56
写真17	SF002土層内近代轍痕跡	56
写真18	SF002北壁土層	56
写真19	SF002波板状遺構掘削前全景 (上空から)	57
写真20	SF002波板状遺構掘削後全景 (上空から)	57
写真21	波板状遺構 I 掘削前 (東から)	58
写真22	波板状遺構 I 掘削後 (東から)	58
写真23	波板状遺構 II～VI 掘削前 (南から)	58
写真24	波板状遺構 II～VI 掘削後 (南から)	58
写真25	波板状遺構 II～III 掘削後 (北から)	58
写真26	波板状遺構 III～VII 掘削後 (北から)	58
写真27	波板状遺構 IV 掘削後 (北から)	59
写真28	波板状遺構 VII 掘削後 (南から)	59
写真29	波板状遺構 III南北土層中央部分	59
写真30	波板状遺構 III南北土層南端部分	59
写真31	SX015検出状況 (東から)	60
写真32	SX015上面 (東から)	60
写真33	SX015中央筒部分掘削後 (北から)	60
写真34	SX015中央筒部分 (北から)	60
写真35	SX015筒部分木質除去後 (東から)	60
写真36	SX015瓦積み除去後 (東から)	60
写真37	Ⅲ区全景 (南東から)	133
写真38	Ⅱ区全景 (南東から)	133
写真39	豊穴住居跡群 (南西から)	134
写真40	獨立柱建物群 (南西から)	134
写真41	SC052 (南西から)	135
写真42	SC053 (南西から)	135
写真43	SC057 (西から)	135
写真44	SC058 (北西から)	136
写真45	SC058滑石原石出土状況	136
写真46	SC066 (東から)	136
写真47	SE040 (西から)	137
写真48	SE040 (北から)	137
写真49	SE060ねずみ返し状木製品出土状況	137
写真50	SK038 (東から)	138
写真51	SK044 (北から)	138
写真52	SK072 (北から)	138
写真53	出土土器	139
写真54	SC058出土滑石製品	140

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

現在、福岡市においては交通施設等の都市基盤が整備されないまま都市化が進行したため、交通量の増加に伴い慢性的な交通混雑が発生するなど多くの交通問題が生じている。そこで、このような状況に対処するため、自動車交通の効率的な分散を図り、福岡市西南部地域の交通混雑の緩和を図るとともに、福岡都市圏の外郭を形成する目的で、福岡外環状道路（一般国道202号線）の建設が進行中である。この外環状道路は、福岡市西区福重から博多区立花寺までを結ぶ延長16.2km幅員40mの道路であり、完成すれば福岡都市圏の骨格を形成する重要な幹線道路となる。

福岡市教育委員会では、外環状道路の建設に伴い、国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所より調査の委託を受け、平成3年度より継続して発掘調査を実施している。外環状道路は終点立花寺において福岡都市高速道路と結ばれるため、今回の調査にあたっては福岡北九州高速道路公社からも合わせて調査の委託を受けた。今回報告する高畠遺跡第18次発掘調査は、この外環状道路I区工事に先立って、平成11年9月9日から平成12年6月28日にかけて実施した。

2. 調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

事業主体 国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所

福岡北九州高速道路公社

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査統括 文化財部長 柳田純孝

埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

調査担当 長家伸、上角智希

今回の調査がつつがなく進行し、多くの貴重な成果を得ることができたのは、発掘調査および整理作業に参加していただいた発掘作業員、整理作業員の皆様に依るところが大きい。毎日の重労働に快く、そして忍耐強く従事してくださった皆様に、この場を借りて感謝申し上げる。

3. 立地と環境

福岡平野は、北は博多湾に臨み、残りの三方は丘陵地帯によって囲まれ、その背後には標高300m～500mの立花山、三日月山、牛頸山、油山、叶岳、高祖山などを繋ぐ山地の尾根線が半円状にめぐっている。福岡平野を囲む主な丘陵を挙げると、東側に月隈丘陵、南に春日丘陵、南西に油山丘陵、西に早良平野とを画する干隈丘陵がある。平野には那珂川、御笠川、樋井川をはじめとする大小の河川が北流し、古来から肥沃な沖積地を形成していた。

高畠遺跡は、福岡平野中央部を貫流する御笠川、那珂川の中下流域に所在する。この一帯の地形は、南側の春日丘陵から続く洪積台地が、前述の両河川およびその支流によって細かく開析されてできたものである。したがって、河岸段丘が発達しており、低平な沖積地の中に、洪積台地が島状に点々と



第1図 周辺の遺跡 (1/50000)

1. 高畠遺跡
2. 比恵遺跡群
3. 那珂遺跡群
4. 板付遺跡
5. 諸岡B遺跡
6. 井相田C遺跡
7. 麦野A遺跡
8. 麦野B遺跡
9. 麦野C遺跡
10. 南八幡遺跡
11. 雜錦隈遺跡
12. 井尻B遺跡
13. 須玖遺跡群
14. 雀居遺跡
15. 宝満尾遺跡
16. 天持森遺跡
17. 立花寺遺跡
18. 金隈遺跡

分布している。これらの開析丘陵上のほとんどに集落遺跡が存在しており、高畠遺跡もそのひとつである。高畠遺跡の立地する台地は、那珂川と御笠川に挟まれた場所にあり、本遺跡の南北に鞍部を挟んで並ぶ各丘陵上には、北に板付遺跡、南に麦野A遺跡が立地する。本遺跡は台地の頂部から縁辺部にかけて分布している。現在では戦後の都市化により住宅が密集し、地形の起伏は全く分からぬが、昭和初期の地図（第3図）を見ると、往時の丘陵の姿がはっきりと見て取れる。当時、台地上は果樹園として、縁辺部は水田として利用されていた。

高畠遺跡の所在する那珂川・御笠川中流域には多くの遺跡が密集している。本報告書と関連する弥生時代から古代にかけての周辺の遺跡をいくつか紹介することにしたい。高畠遺跡の北500mには绳文時代晩期の水田や環濠集落で有名な国指定史跡の板付遺跡が所在する。弥生時代の集落としては、板付遺跡のさらに北西に位置する比恵・那珂遺跡群や本遺跡の北5kmの雀居遺跡、南に3kmの春日市須玖遺跡群などが有名である。また、本遺跡の南西1.5kmに位置する井尻B遺跡においても弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が存在する。弥生時代の墓地は、御笠川を挟んで東側の月隈丘陵で多く発見されている。たとえば100基を超える甕棺墓群が発見された国指定史跡金隈遺跡や天神森遺跡、宝満尾遺跡がある。平野部においても本遺跡の西隣の丘陵に立地する諸岡B遺跡などで墓地が見つかっている。

高畠遺跡周辺では古代の大集落も多く発見されている。例えば、本遺跡の南南東2km弱に位置する麦野B、麦野C遺跡や、その南側の南八幡遺跡、南東1kmの井相田C遺跡、御笠川東岸の立花寺遺跡などが挙げられる。また、本遺跡の南2kmの雜鶴隈遺跡では、7世紀末～8世紀初頭の方形の配置をもつ大型建物群が検出され、官衙的な施設と考えられている。

4. 既往の調査

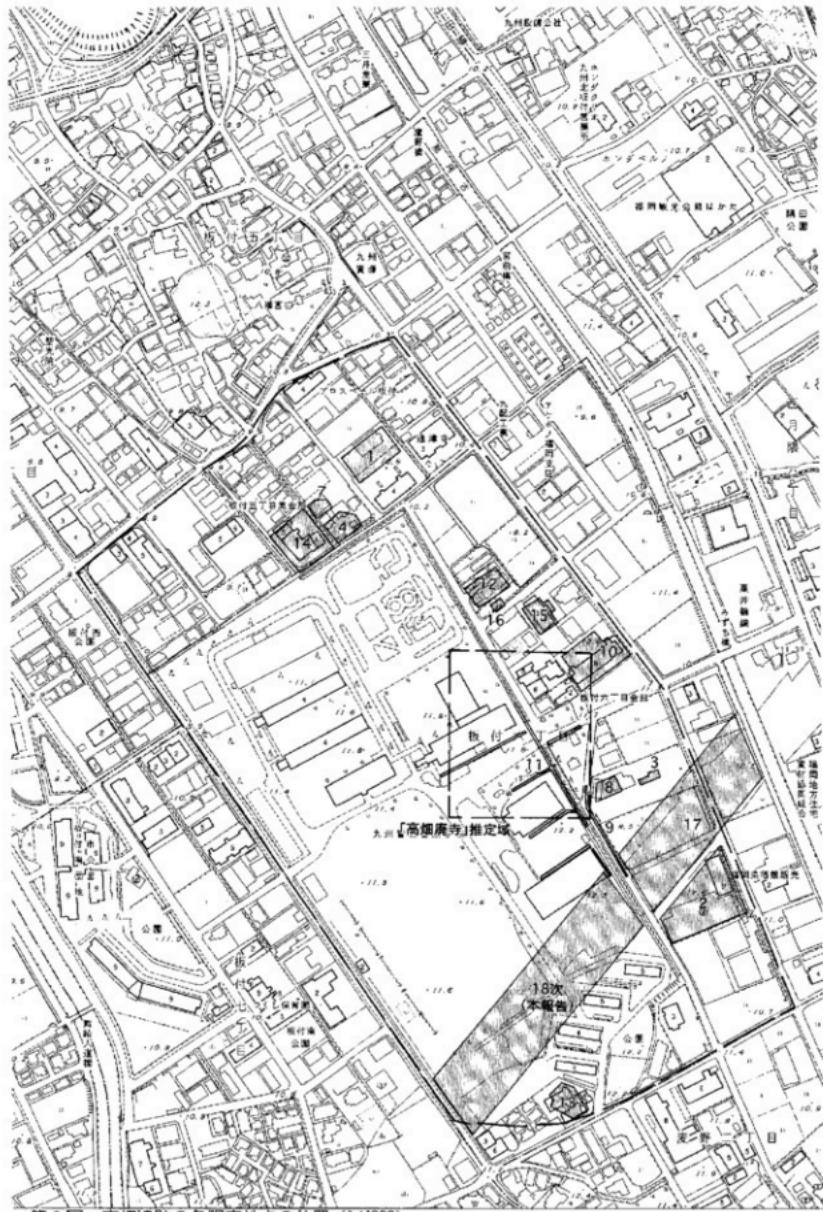
高畠遺跡の調査は今回で18次を数える。本節ではこれまでの調査の成果について簡単にまとめる。

高畠遺跡の調査は、当初、板付周辺遺跡緊急調査としておこなわれた。これは1974年の板付遺跡の一部国史跡指定に伴い、急速に宅地化がすすむ板付台地およびその周辺において板付遺跡の全容把握を目的として実施された国庫補助事業である。1973年度から継続して調査が行われている。この調査に際し、福岡市地図No24「板付」を100m方眼に区切り、東から西へA・B…、北から南へ1・2…とし、緊急調査地点をこの方眼の番号で呼ぶことにした。例えば高畠第1次調査地点は板付D-9・10地点と称された。以降、1984年度の第10次調査までこの呼称がとられたが、九州管区警察学校内下水道工事に伴う第11次調査において、はじめて高畠遺跡発掘調査として登録され、同時に、先立って実施されていた本遺跡内の板付周辺遺跡緊急調査に高畠遺跡第1次～第10次調査の名称が併用されることとなった。

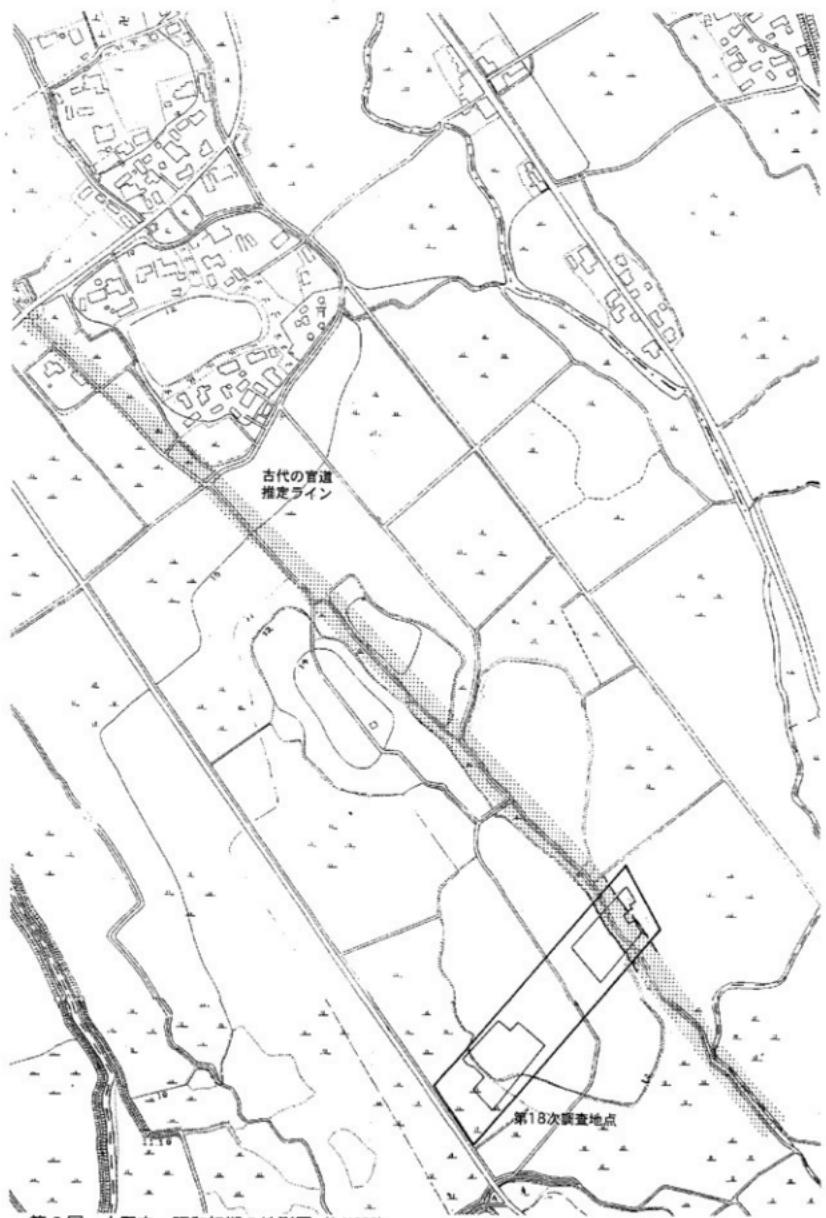
高畠遺跡は洪積台地上とその縁辺部の沖積地に分布しており、調査地点の立地によって検出される遺構の性格もおのずと異なる。調査地点の立地を台地の各方位の縁辺部、台地上に分け、それぞれについて説明していくことにする（第2図・第1表）。

まず、台地の北縁部では第1・4・7・14次調査が実施されている。第4・7次調査地点では古墳時代の溝が検出され、大量の古式土師器・木製品が出土した。また、第4・7・14次地点で奈良時代の溝・土壤が検出されている。

台地の東側縁辺部は、最も調査例の多いところである。第2・3・8・9・10・12・15・16・17次調査が実施されている。東縁部の北半には台地の裾に沿って南東から北西方向に向かって走る古墳時代の溝が検出され、大量の木製品・古式土師器が出土している（北から第12・16・15・10次調査地点）。



第2図 高畠遺跡の各調査地点の位置 (1/4000)



第3図 大正末～昭和初期の地形図 (1/4000)

この溝は前述の台地北縁部の溝へ続いている。水田に間連する水路と推測され、第12次調査では漆を塗布した鉢の柄や小型模造船が出土し、農耕祭祀・水利祭祀に使用されたものと考えられている。また、東縁部南半では奈良時代の大溝が検出されている（南から第2・17・9・8・10次調査地点）。この溝は台地の裾を南北に走り、第10次地点で東へ向きを変える。

第8次調査では前述の古代の溝から大量の古代瓦・埠、墨書き土器、木簡、木製品が出土した。調査を担当した柳沢一男は、瓦・埠をはじめとする諸遺物の内容と、かつて台地上に礎石らしき大石群があったという話から、台地上に「高畠廃寺」の存在を主張した。一方では、墨書き土器に地名を記したものが多いこと、木製祭祀遺物が多く出土することから、寺院ではなく官衙的施設を想定する説もある。第17次調査においても、溝から人面墨書き土器や木製人形、絵馬等の祭祀遺物が出土している。

台地西縁部においては、第5・6次調査が実施されたが、両調査区とも八女粘土層まで削平されており、遺構は検出されなかった。おそらく試掘状のトレンチ調査であろうが、調査番号は付与されず報告書にも記述がないので、正確な調査地点は不明である。

台地南縁部では第13次調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての井戸、土壙が検出されている。土壙3基から滑石製臼玉、ガラス小玉、碧玉製管玉が出土した。

最後に、台地上においては、第11次調査が行われたのみである。これは警察学校内の下水道工事に伴う調査で、幅1m、総延長550mにおよぶトレンチ調査である。調査の結果、台地中央部は削平を受けているが、削平の影響が少ない縁辺部では遺構が残っていた。弥生時代初頭から古墳時代の堅穴住居、井戸、貯蔵穴が検出され、本来は台地全体に該期の集落が広がっていたことが予想された。また、高畠廃寺に関して、溝2条と井戸1基が検出されたが、トレンチ調査のためこの溝が寺域を画すものかどうかは分らない。

今回の第18次調査が台地上におけるはじめての面的な調査である。

第1表 高畠遺跡調査一覧表

次数	板付地点呼称	調査番号	調査面積(m ²)	主な遺構、遺物	報告
1次	板付D-9・10地点	7312	48		29集
2次	板付A-B-13地点	7313	72	奈良; 溝	29集
3次	板付B-12a 地点	7509	400		36集
4次	板付D-10a 地点	7933	370	古墳; 溝・古式土師器、奈良; 溝	57集
5次				遺構なし	
6次				遺構なし	
7次	板付D-10b 地点	8138	180	古墳; 溝・古式土師器、奈良; 溝	83集
8次	板付B-12b 地点	8220	330	奈良; 溝・瓦・?	98集
9次	板付B-12c 地点	8221	94	奈良; 溝	98集
10次	板付B-11a 地点	8436	1560	古墳; 溝・奈良; 溝	115集
11次		8441	550	弥生・古墳; 坚穴住居・井戸・貯蔵穴	115集
12次		8649	600	古墳; 溝・木製品	210集
13次		8702	480	弥生・古墳・井戸・土壙	
14次		9368	566	奈良; 溝	
15次		9753	254	古墳; 溝	年報12
16次		9774	70	古墳; 溝	
17次		9833	2063	奈良; 溝・墨書き土器・木製祭祀遺物	676集
18次		9936	4750	弥生・古墳; 集落、古代; 道路	本報告

5. 調査の概要

高畠遺跡第18次調査は、福岡外環状道路の建設に先立ち、平成11年9月9日から平成12年6月28日にかけて実施した。開発面積は約11,000m²である。昭和初期の地形図と対照すると、本地点は台地の南端部にあたる（第3図）。第11次調査の所見から、台地中央部の高い部分は削平を受けて遺構が残っていないと予想されたが、試掘調査の結果、やはり調査区の中央部では削平によって遺構は完全に消失していた。そのため、調査は調査区の東西の両サイドについて行うことになった。

調査にあたり、東側の調査地点をI区、西側をII区とした。調査はI区から先行し、ある程度目途が立った時点でII区の調査を併行して開始した。I区調査は平成11年度に終了した。II区については、幸いに当初の予想よりも遺構の残りがよく、II区北側の開発地内未調査部分にも遺跡が残存して続いていることが確実になった。そのため、この部分に調査区を拡張しIII区とした（第4図）。

I区とII・III区とは調査地点が離れている上に、検出された遺構もまったく性格の異なるものであった。そのため、本書では両地区を別々に扱ったほうがよいと判断し、第二章でI区の調査、第三章でII・III区の調査について報告している。

調査区東側のI区では、調査区東側で南北方向に軸をとる波板状遺構が検出された。これは道路遺構であり、古代の官道が台地上を縦断していることが明らかとなった。波板状遺構等から大量の瓦・埴が出土した。また、弥生時代前期～中期の貯蔵穴4基、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟が検出されており、削平を受けて残存状況が悪いものの、該期の集落が広がっていたと推測される。

調査区西側のII・III区では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡を検出した。主な検出遺構は竪穴住居跡13軒、据立柱建物6棟、井戸13基、土壙15基、溝1条である。古墳時代中期末の竪穴住居跡の1軒は滑石製白玉の製作工房で、関連遺物が多く出土した。白玉の製作工程を復元するうえで貴重な資料である。弥生土器、土師器が大量に出土した。



第4圖

第二章 I 区の調査

1 調査概要

I 区は対象地の東半部分にあたる。高畠遺跡群の立地する洪積台地は調査地点で幅約300mを測り、台地尾根線は北西方向に延びている。調査時点では九州管区警察学校敷地であり、現況標高は12.2mでは平坦な状態であった。近隣からの聞き取りおよび昭和初期前後の地図によると、戦前までは台地高所部分は桑畠、低地部分は水田として使用されていたようである。その後戦時中に板付地区的台地土をトロッコで運搬して現況に近い状態に造成したことである。なおこの造成は現地の高所を削平して行ったものではないようである。その後戦時中は軍用機の部品工場が建設され、戦後米軍用地を経て現在に至っている。

調査は重機による表土除去から行った。東側には戦時の造成土が厚く堆積しその上面には以前の建物の基礎が存在していた（第5図）。東側端では竪穴住居跡を確認しており、遺構の残存状態は比較的良好である。また西半は遺構面である鳥栖ローム層直上に40cmほどの表土がのるのみで、遺構面には建物の基礎が格子状に残る。台地尾根部分にあたる調査区東半部分は遺構の残存状態から削平がかなり進んでいるものと考えられるが、弥生時代の貯蔵穴が40cm程しか残っていないのに比べると、中世前半の溝の残存状態が比較的良好なことから、これ以前の造成による遺構の削平が比較的大きなものと考えられる。具体的な時期については明らかでないものの、遺構・遺物報告の項で後述するように古代に位置付けられる瓦が多量に出土していることや、官道の存在を考えると古代～中世の間に大規模な造成が行われた可能性が高い。II区では弥生～古墳時代の生活遺構が広がっており、本的にはI区にも同様の遺構群が形成されていたと考えられるが、古代～中世の遺構埋土からはこの時期の遺物がほとんど出土しておらず、該期の遺構が埋没する段階ではすでにそれ以前の遺構が大きく失われていたものと考えられる。遺構面標高は西端で12.2m、中央部で11.6m、東端では11.3mである（調査区南壁土層図およびSC001土層図参照）。

主な検出遺構は弥生時代前期～中期の貯蔵穴4基、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟、古代の官道・土坑1基・溝1条、中世前期の溝2条、近世～現代の溝1条である。

2 弥生時代～古墳時代の遺構

前項でも述べたようにこの時期の遺構は古代以降と考えられる削平により依存状態が極めて不良で、掘り込みの深い遺構が残存するのみである。

竪穴住居跡（SC）

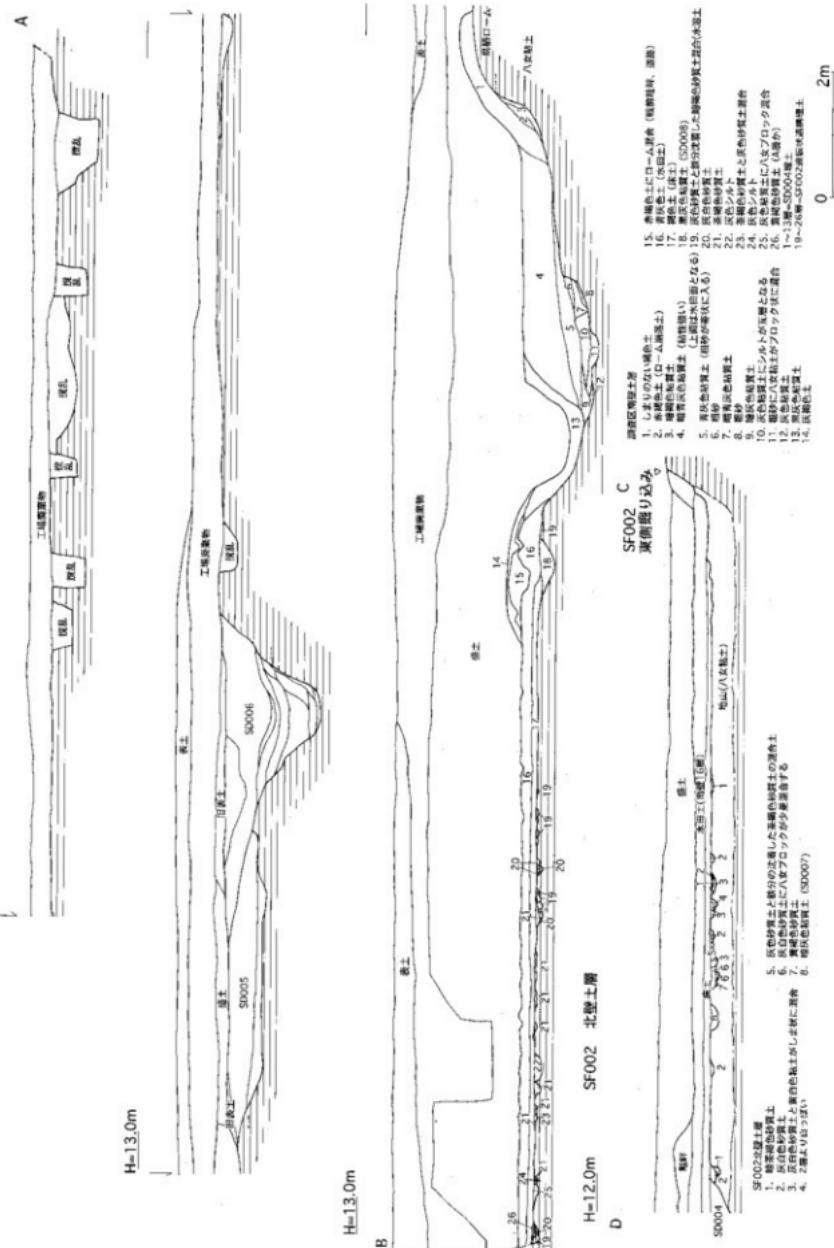
SC001（第7図）

調査区東端で検出する。東側は調査区外に延びており未掘である。南北長3m、遺構面からの深さ70cmを測る。全体に厚さ5cmほどの貼り床（5層）を施し、周囲には縁溝が巡る。床面直上のはば全面には焼土および炭化物層が広がり消失家屋の可能性が考えられる。掘り方は中央部分がわずかに高く、壁際がやや低くなっている。遺物の大半は1・2層からの出土で土器器壺の小破片のみである。古墳時代前期に位置付けられる。

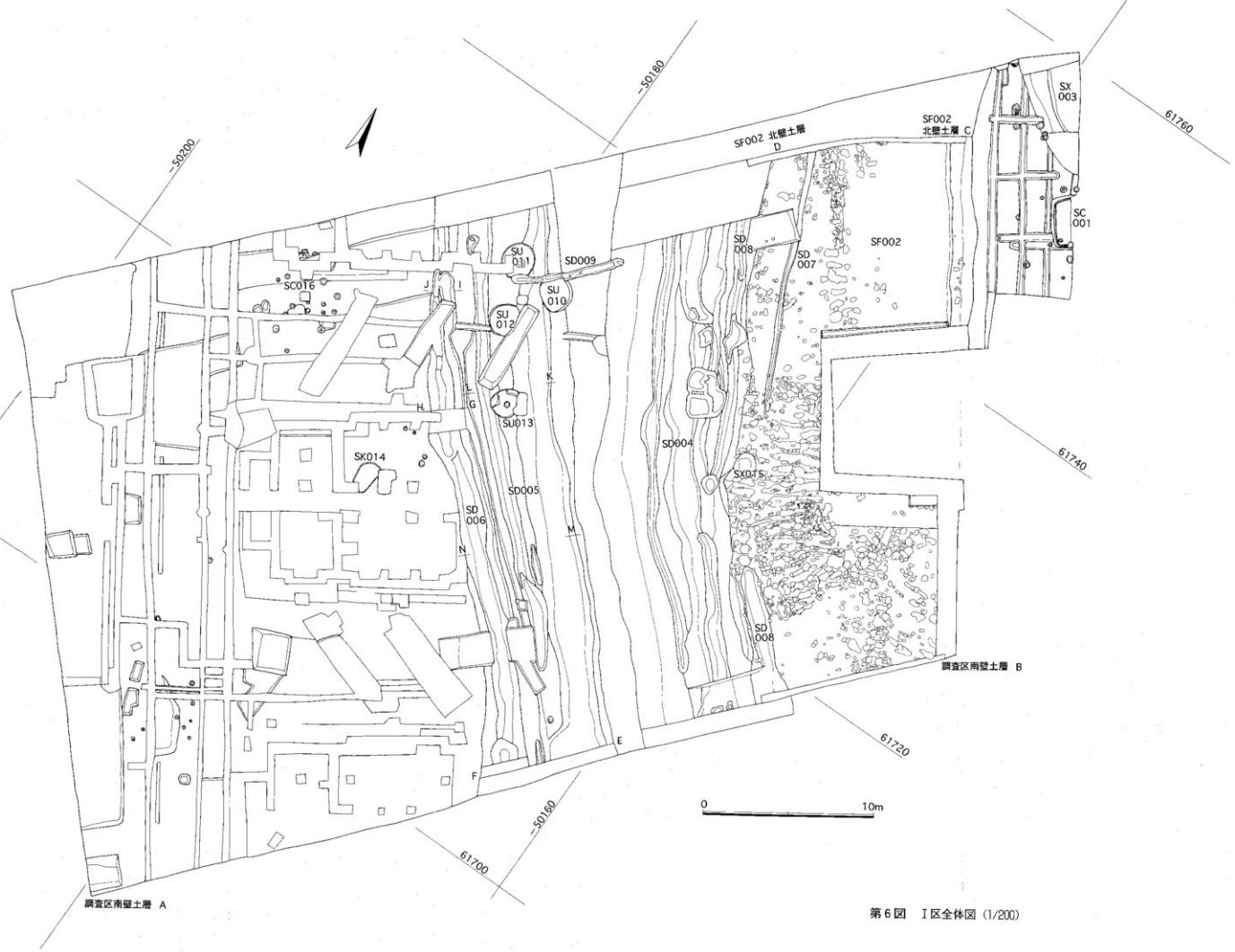
出土遺物（第7図） 1は布留式壺の上部小破片である。口縁端部はわずかに上方につまみ上げている。摩滅が著しく調整には不明瞭な点が多いが頭部から胴部にかけては横刷毛が残る。胴部内面は斜め上方に削り上げている。2は小型の壺である。胎土は精良で器壁は薄手に仕上げている。色調は赤みの強い褐色を呈する。摩滅のため調整は不明である。

調査区南端土質

H=13.0m

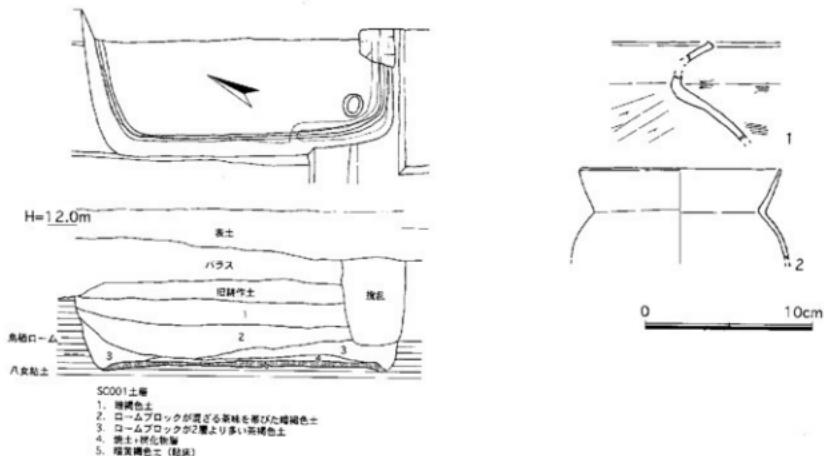


第5図 調査区土層図(1/80)

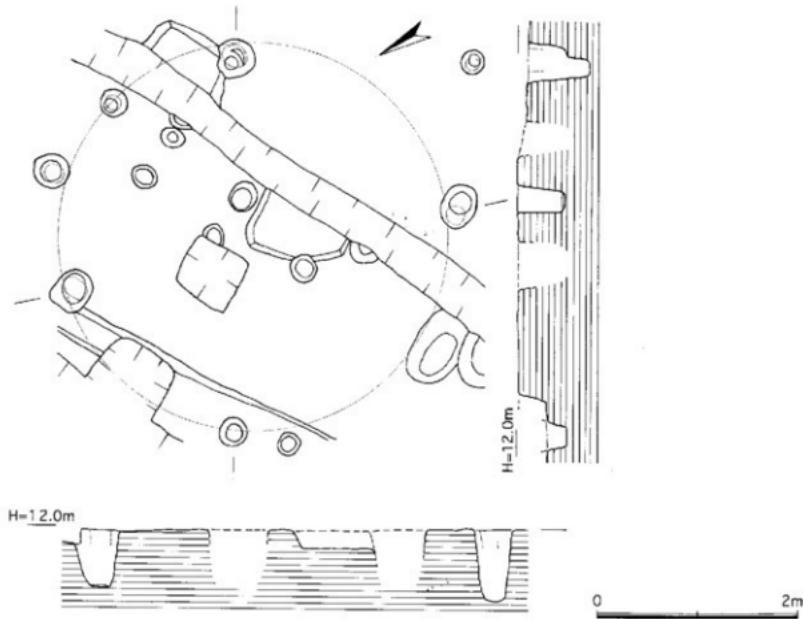


第6図 I区全体図 (1/200)

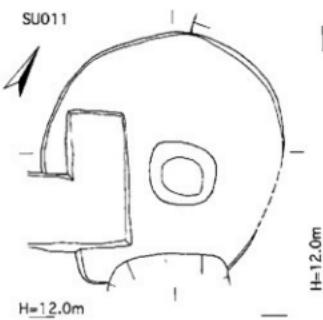
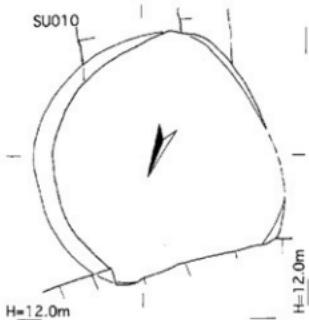
SC001



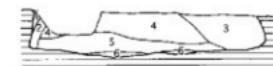
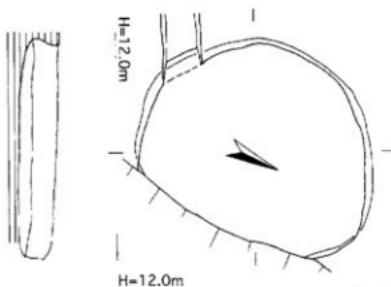
SC016



第7図 SC001・016及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

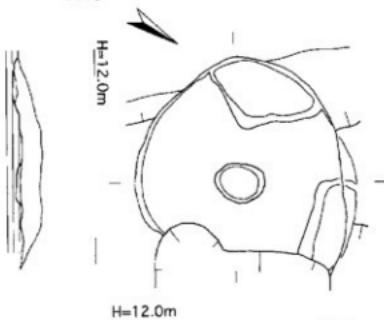


SU012



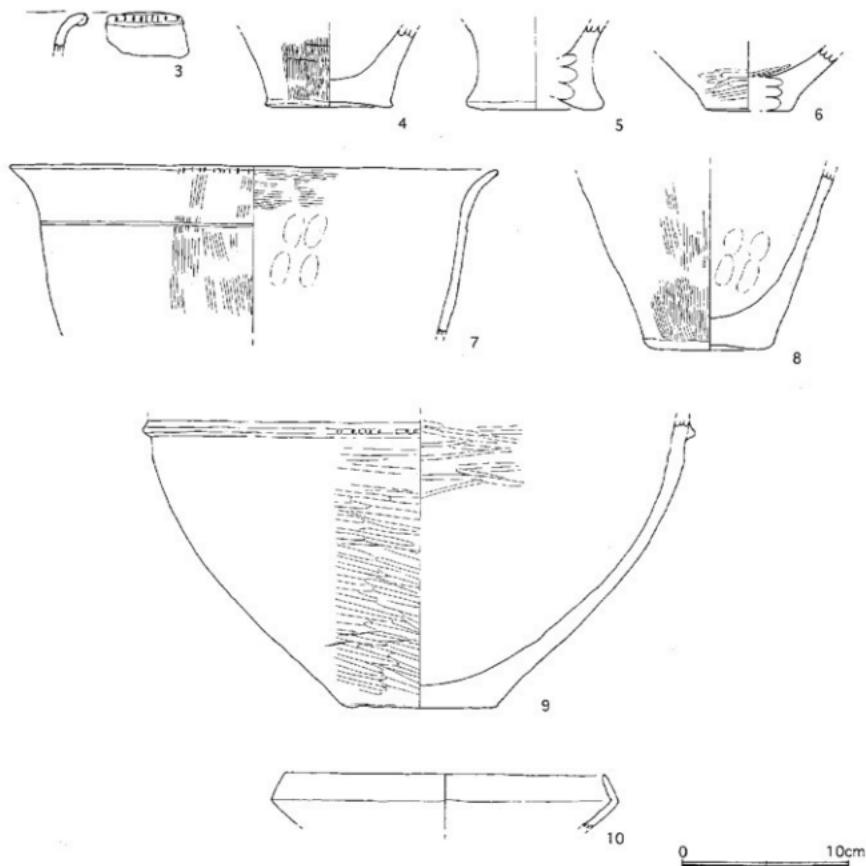
- SU012土壤
1. 暗褐色粘土土 (腐泥土)
2. 黄褐色土 (腐泥土)
3. 黄褐色土 (ロームブロックを含む)
4. 黄褐色土 (3層よりロームブロックが多い)
5. 4層より黄褐色が強い (ロームブロックが多い)
6. 暗褐色土 (腐泥土)

SU013



0 2m

第8図 SU010・011・012・013実測図 (1/40)



第9図 SU 010・012・013出土遺物実測図 (1/3)

SC 016 (第7図)

調査区西北側で検出する。この周囲は削平を受けながらも比較的ピットの残存状態が良好であるため竪穴住居跡の存在が想定できるが、かろうじて遺構としてまとめることができたものはこの1棟のみである。竪穴の掘り方は失われているが、柱間径4mの円形竪穴住居跡と考えられる。主柱は10本ほどで構成されるものと考えられるが欠失しているものも半数近い。残存している柱の深さを考えると円形住居としてまとめるのもやや不安定である。柱掘り方は径40cm前後、深さは50~70cm、柱痕跡径15~20cmを測る。柱以外の屋内土坑等は削平されており確認できていない。小破片のみで図示できる遺物はないが形狀から弥生中期に位置付けられるものであろうか。

貯蔵穴 (S U)

調査区内で4基の貯蔵穴を確認している。いずれも削平が著しく確認面は鳥栖ローム層の最下部で床面が八女粘土層の直上となる。掘り方は貯蔵穴の基底面から20~40cm程しか残っていない。調査区に中央やまとまって北寄りに位置しており、削平・官道の掘削等で失われたものも多いと考えられる。

S U 0 1 0 (第8図)

検出面での上面径2m、検出面からの深さは最大で30cmを測る。北側と西側の一部は削平により壁が失われている。東側の壁面はオーバーハングしているが、西側では削平も有りその痕跡は確認できていない。床面はほぼ平坦である。遺物は破片が少量出土している。弥生時代前期末~中期初頭に位置付けられる。

出土遺物 (第9図 3~6) 3は如意形に屈曲する壺の口縁部破片である。端部の刻み目は前面に行なわれる。鈍い赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含む。4・5は壺の底部である。4は平底で外面に継刷毛を施し、底部との境は軽く横なでを行なう。内面及び外底面はなでている。5は上げ底の底部である。内外面なでによる調整を行なう。6は壺の底部である。内外面にヘラ状工具による磨きを行なう。

S U 0 1 1 (第8図)

検出面での上面径1.9mを測り、平面径はやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測るが東側では中世溝により壁がほとんど失われている。床面はほぼ平坦であるが中央部分に深さ10cm弱のくぼみが残る。遺物は小破片が数点のみで図示できるものはない。

S U 0 1 2 (第8図)

東側を削平により失うが検出面での上面径1.8mの円形に復元できる。検出面からの深さは40cmを測る。壁面はややオーバーハングする。床面は中央部に向かってわずかにくほんでいる。出土遺物には壺・壺があり、弥生時代前期後半~末に位置付けられる。

出土遺物 (第9図 7~9) 7・8は壺である。7は上半部分の破片である。口縁部は緩く外反し端部はわずかに面取りしている。刻み目は口縁下端部分に行なう。胴部外面は継刷毛を施し、上部に1条の沈線をめぐらせる。口縁部内面は横刷毛を行い、以下はなでによる調整である。8はやや上げ底気味の底部である。外面は継刷毛、内面はなでを行なう。9は壺の下半部分である。胴部に断面三角形の突帯を巡らせ、突帯頂部に刻みを施す。内外面に磨きを行なうが、外面は比較的緻密に磨くが、内面はなでの後や粗い磨きを行なっている。

S U 0 1 3 (第8図)

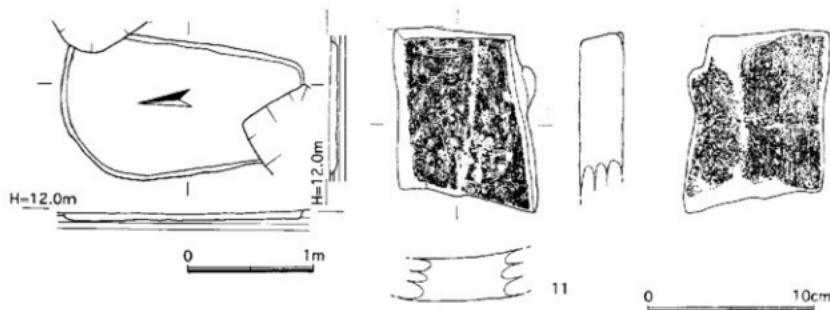
検出面での上面径1.6mを測り、平面径はやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。床面は凹凸が残り、壁際の一部および床面中央部に緩やかな掘り込みがある。遺物は小破片が数点のみである。図示し得た遺物以外に外面継刷毛、内面ナデを行い、胎土に砂粒を多く含む壺の胴部破片が出土しており、この遺構の時期は弥生時代前期の範疇で捉えられよう。

出土遺物 (第9図 10) 10は暗褐色を呈し、胴部を「く」字状に屈曲させている。摩滅のため不明瞭であるが繩文時代後期に位置付けられる浅鉢の破片であろうか。

3 古代~中世の遺構

土坑 (S K)

S K 0 1 4 (第10図)



第10図 SK 014及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

調査区中央部分で検出する。長軸1.9m、短軸1.1mを測り、平面形はやや不整な四角長方形を呈する。削平が著しく検出面からの深さは5cm前後である。埋土は褐色土にロームを混合している。床面はほぼ平坦である。遺物は上部器・須恵器・瓦の小破片が出土している。残存状況が悪く、機能・用途は不明である。

出土遺物 (第10図) 図示し得たのはこの1点のみである。半瓦の先端部破片である。焼成はあまり淡黄色を呈し器面の摩滅が進んでいる。凹面はわずかに痕跡的に布痕が確認できる。凸面には長軸方向に平行な縄目が残る。また器面の剥落・断面の状況から粘土板の接合と考えられる。

溝 (SD)

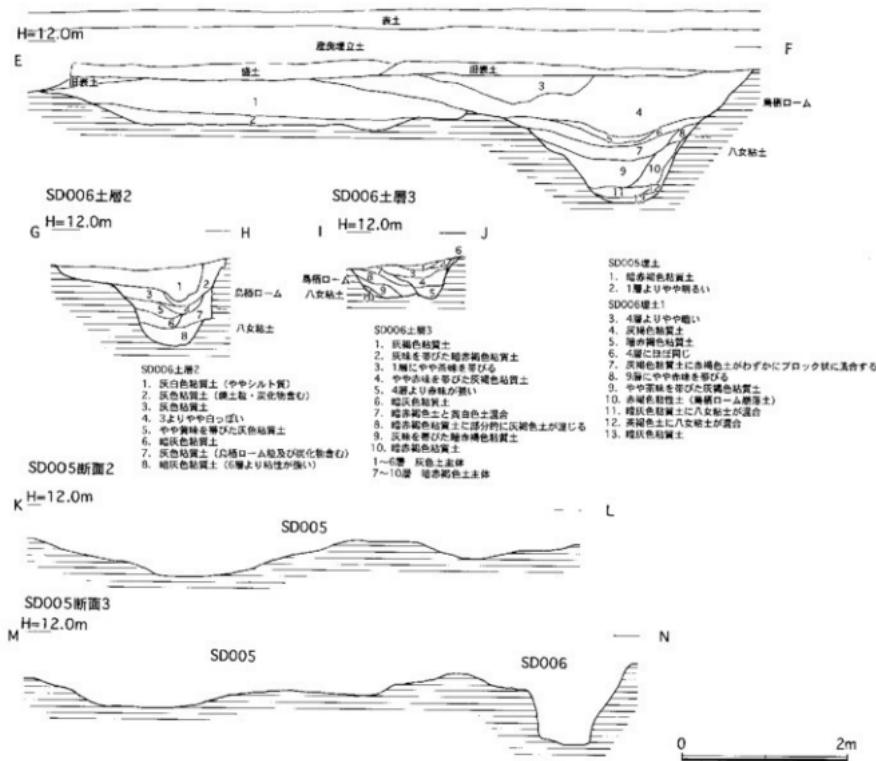
SD 005・006 (第11図)

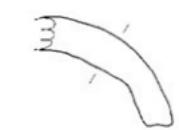
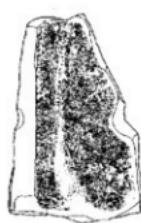
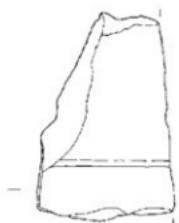
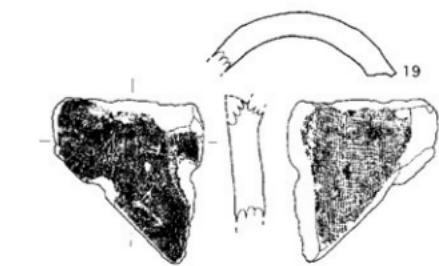
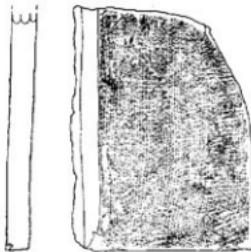
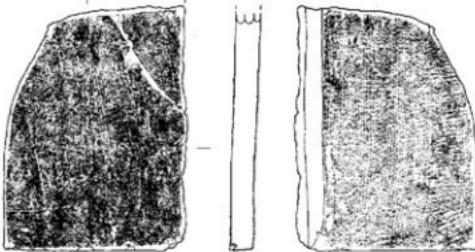
いずれもSD 004の西側で検出された溝で、これにはほぼ並行して南北方向に延びる。表土掘削時にSD 005の溝埋土部分を遺構面上層の土と誤認して埋土の2/3程を掘り下げたため、平面的には切りあい関係が不明であったが、土層観察の結果SD 005→SD 006の先後関係が確認できた。

SD 005は東側に位置する溝である。溝幅4~5mを測り、検出面からの深さ30~50cm前後となる。断面形状は一定していないが、南端部分では低平な皿状を呈し、北半部分の底面では2条の溝が並行しているような状態である。埋土は赤褐色土を主体とし、しまりがない。遺物は2層を中心にして出土しており、大半が古代に位置付けられる瓦でコンテナ10箱程出土している。他に上部器、陶磁器、瓦質土器が少量出土している。細かな位置付けは不明であるが、中世前半期の12世紀中頃~13世紀代に位置付けられる。

SD 006はSD 005の西側に位置する。SD 005の蛇行に伴って同様に屈曲しておりほぼ並行している。検出面での幅は南側で2~3m、北端付近で1m前後を測るが、土層観察からみると本来的には幅5m程度と考えられる。掘削深は北側ほど浅くなっているが、北端部分では検出面から30cm程となっている。また上層から埋没途中の掘りなおしが想定できる。出土遺物はSD 005同様に瓦が主体を占めるが、SD 005に比べると相対的に量は少ない。出土遺物・位置的な関係などからSD 005埋没後に掘削されているものの、時期的な間隙はあまりなかったものと考えられる。出土遺物はコンテナ4箱で、SD 005同様瓦が主体を占めているが、陶磁器等を若干含んでいる。

出土遺物 (第12~16図) 第12~14図 (12~35) はSD 005出土、第15~16図 (36~51) はSD 006出土遺物である。

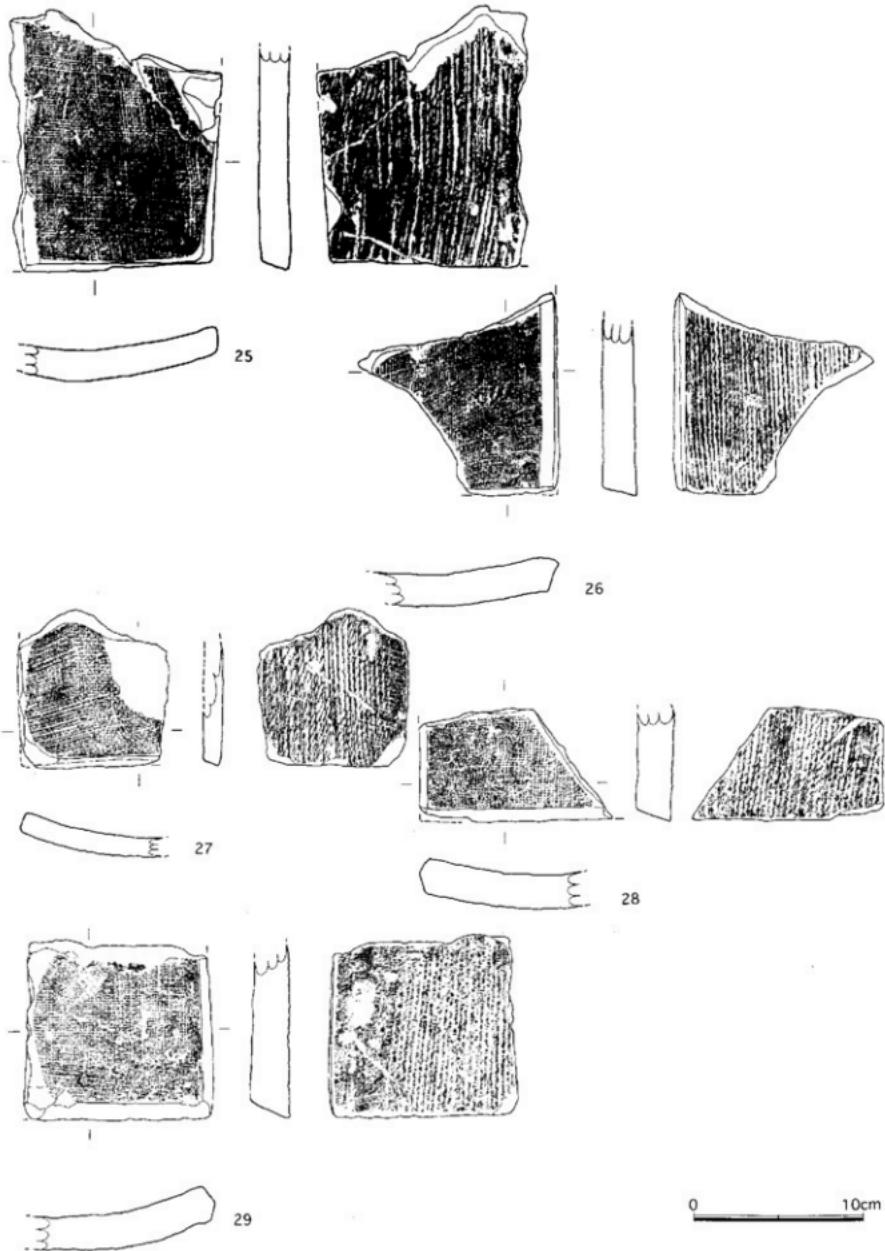




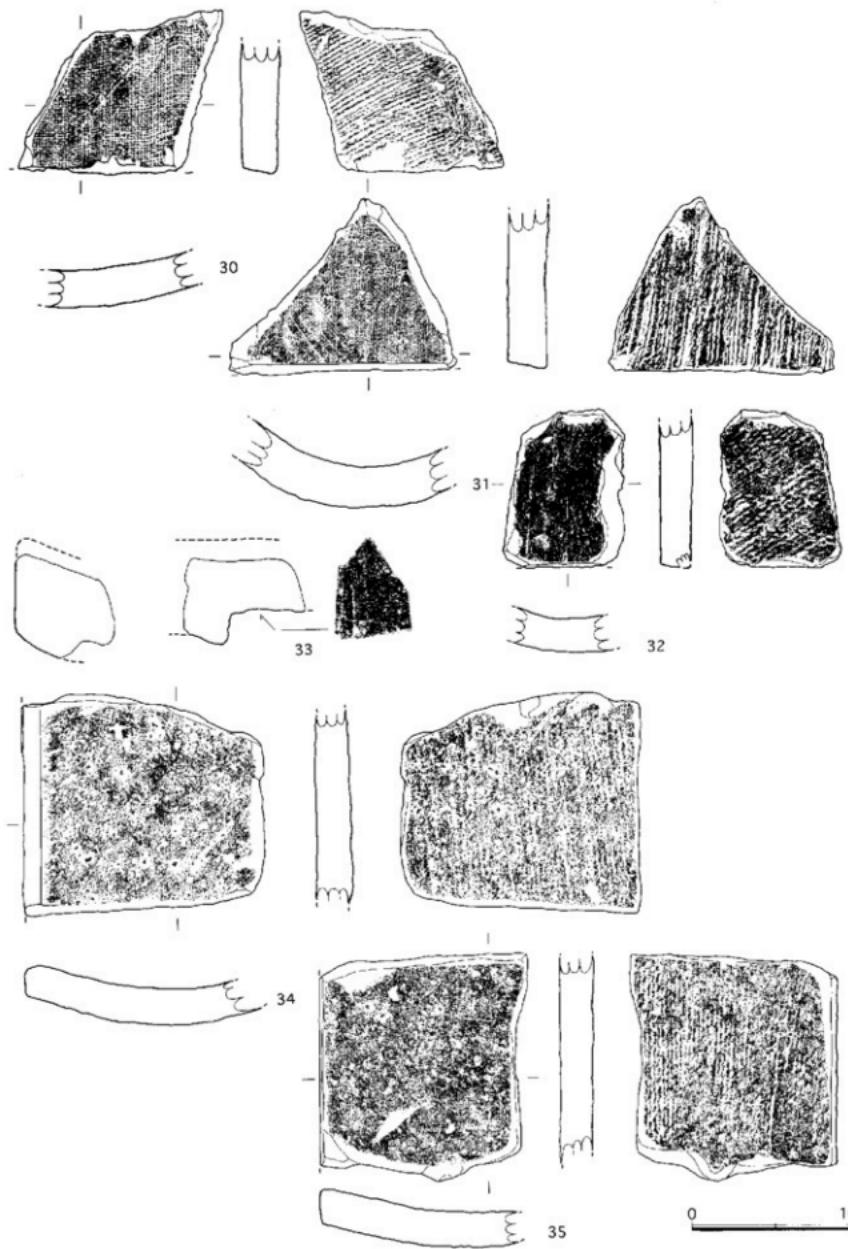
23

0 10cm

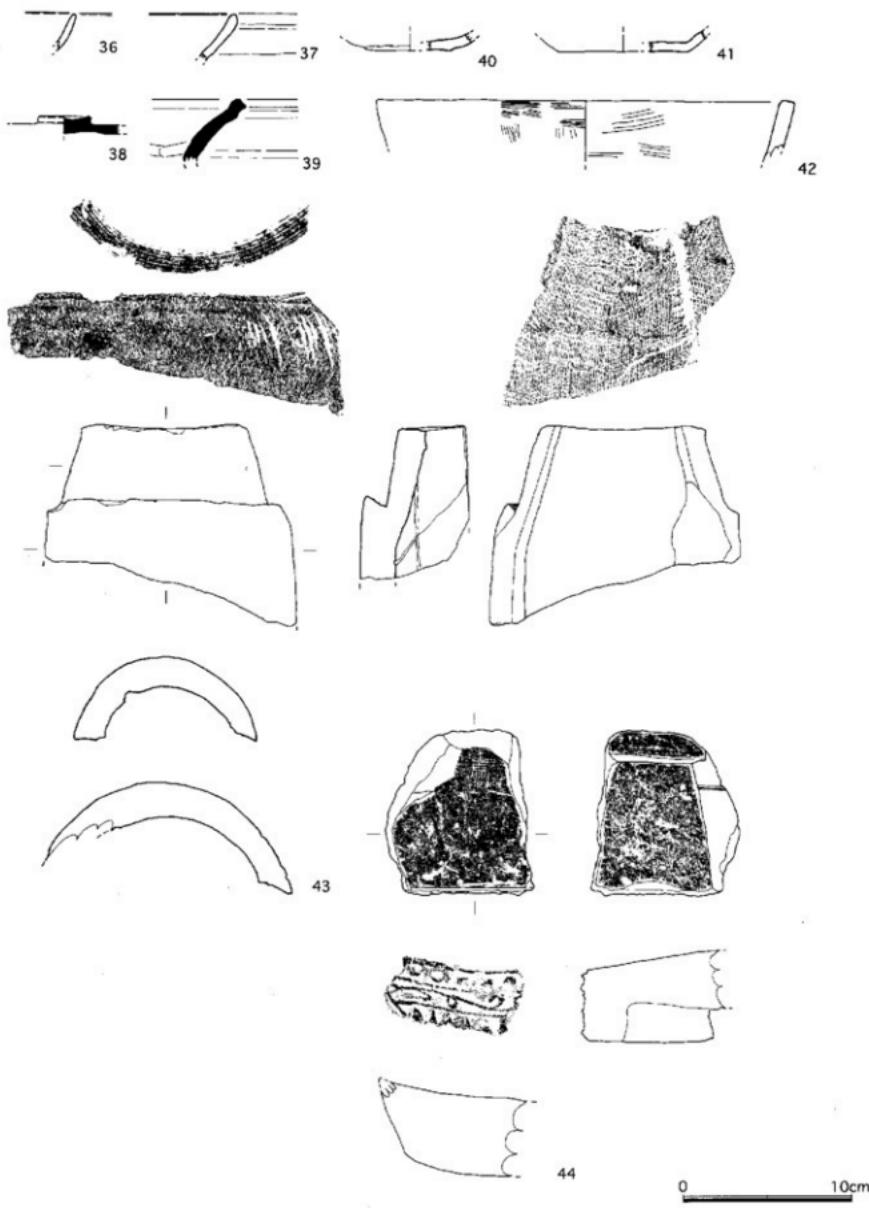
第12図 SD005出土遺物実測図1(1/3)



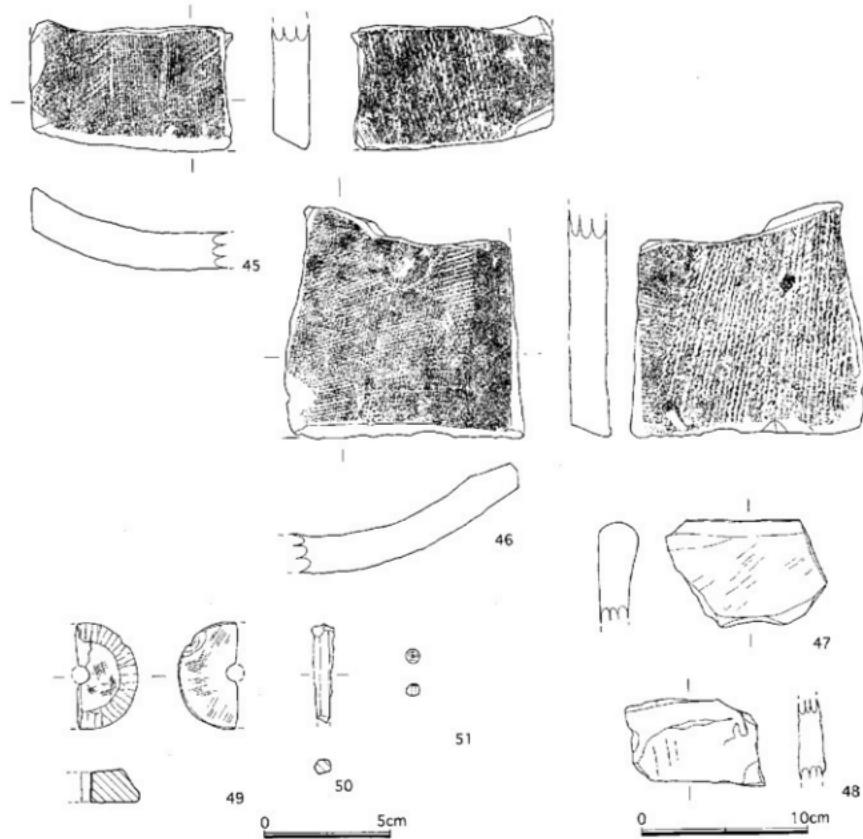
第13図 SD 005出土遺物実測図 2 (1/3)



第14図 SD 005出土遺物実測図 3 (1/3)



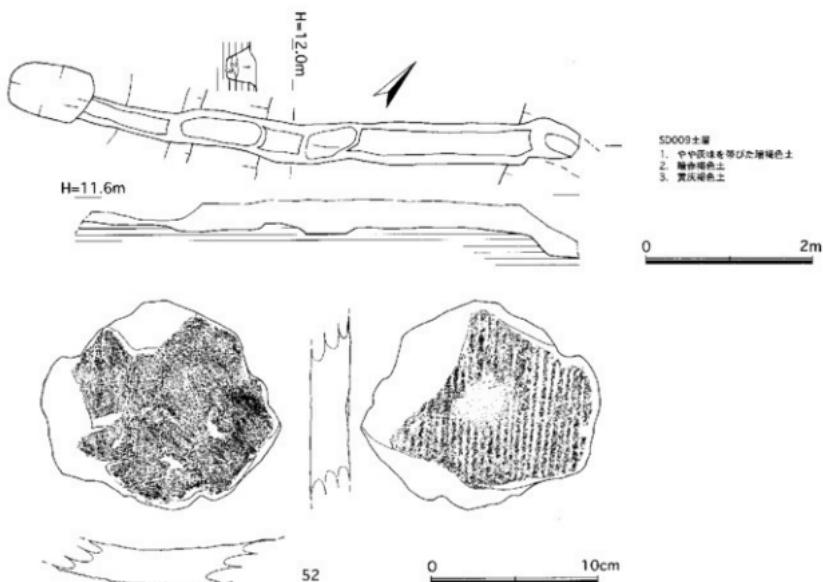
第15図 SD006出土遺物実測図1 (1/3)



第16図 SD006出土遺物実測図 2 (49~51は1/2、その他は1/3)

凹面の側面側にヘラ削りを行なうもの（25・26・34・35）もある。33は破損が著しいが、軒平瓦の一部である。側面の一部が残存し、瓦当部分は欠失している。

36は青磁皿、37は白磁碗の小破片である。38・39は須恵器である。40・41は土師器壊である。外底面には糸切りが行なわれる。42は土師質の鍋である。内外面に刷毛目が施される。43は玉縁式の丸瓦である。焼成は堅緻な須恵質で灰色を呈する。玉縁部分は両側面が残っている。側面は凹面から1/3はヘラ削りを行なうが、これより外側は割り取られたような痕跡を残す。凸面は横なでを行なうが、胴部には一部繩目が残る。また連結面には5条の圓線が巡る。凹面には全体に布目が残るが、布が寄つたような痕跡が残る。44は軒平瓦である。焼成はやや不良で淡灰白色を呈する。凹面は頭部には板などで状のヘラ削りを行い、胴部には布目が残る。また凸面は頭部・胴部共に繩目が残る。凹面のヘラ削



第17図 SD 009及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

り部分にあわせて、側面には段が残る。瓦当は周縁を圓線で縁取りり、内部を3段の文様帯にはば均等に分割する。文様は上区に連珠文、中区に偏行唐草文、下段に鋸歯文を陽刻する。45・46は須恵質の平瓦である。凹面には布目、凸面には繩目が残る。46は側面を2面に面取りをし、凹面端部もやや幅広のヘラ削りを行なう。47・48は砂岩製の砥石である。49は滑石製の紡錘車、50は鉄釘、51はコバルトブルーを呈するガラス小玉である。

SD 009 (第17図)

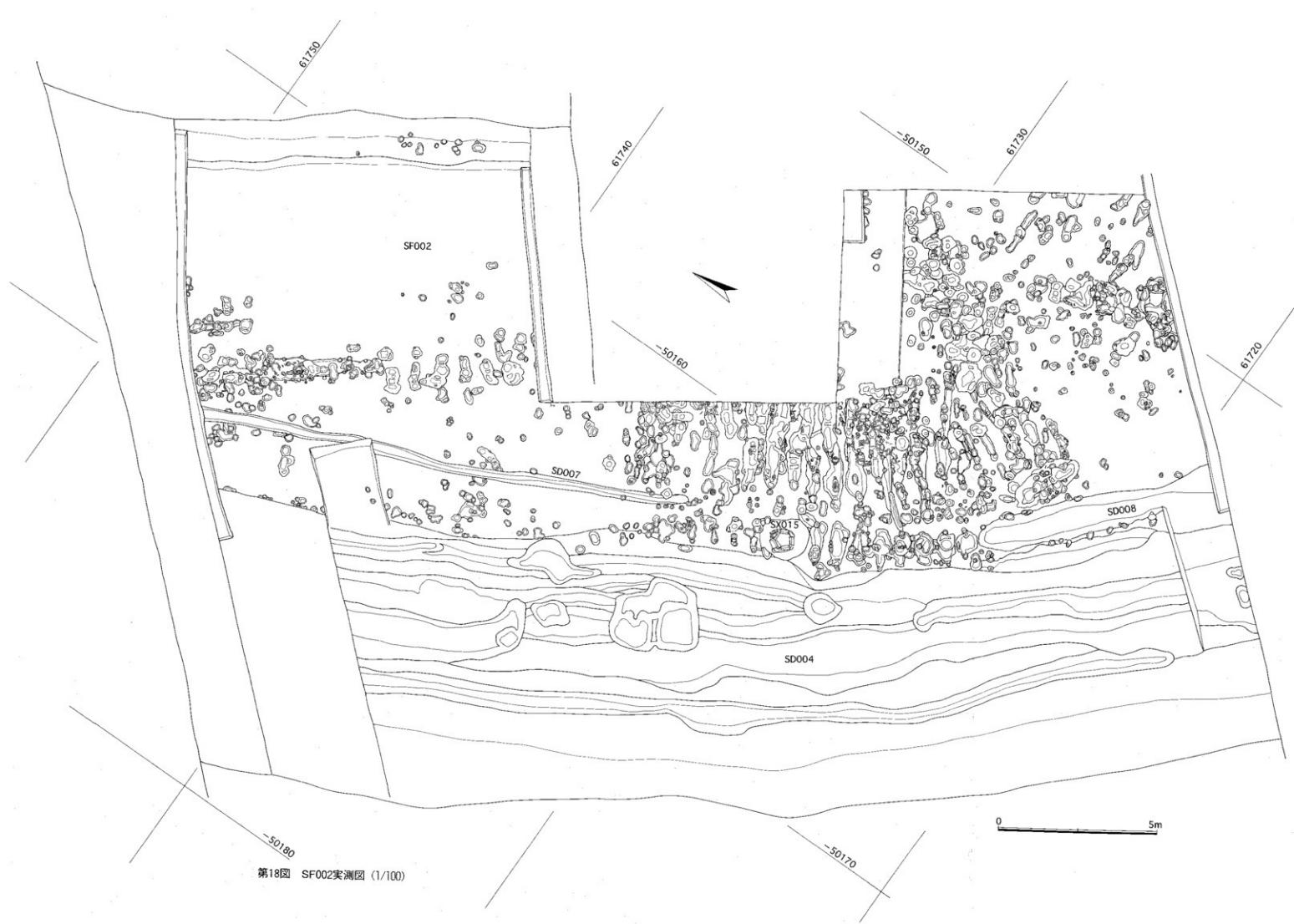
調査区中央北側で検出する。斜面に直交するように東西方向に比較的直線的に延びる。西側は擾乱を受け自然に立ち上がり、東側はSD 004により削平されている。溝横断面形は比較的均整の取れた箱型に近い逆台形を呈し、延伸方向の溝底断面は面的な凹凸を有する。土師器・須恵器・瓦が少量出土している。

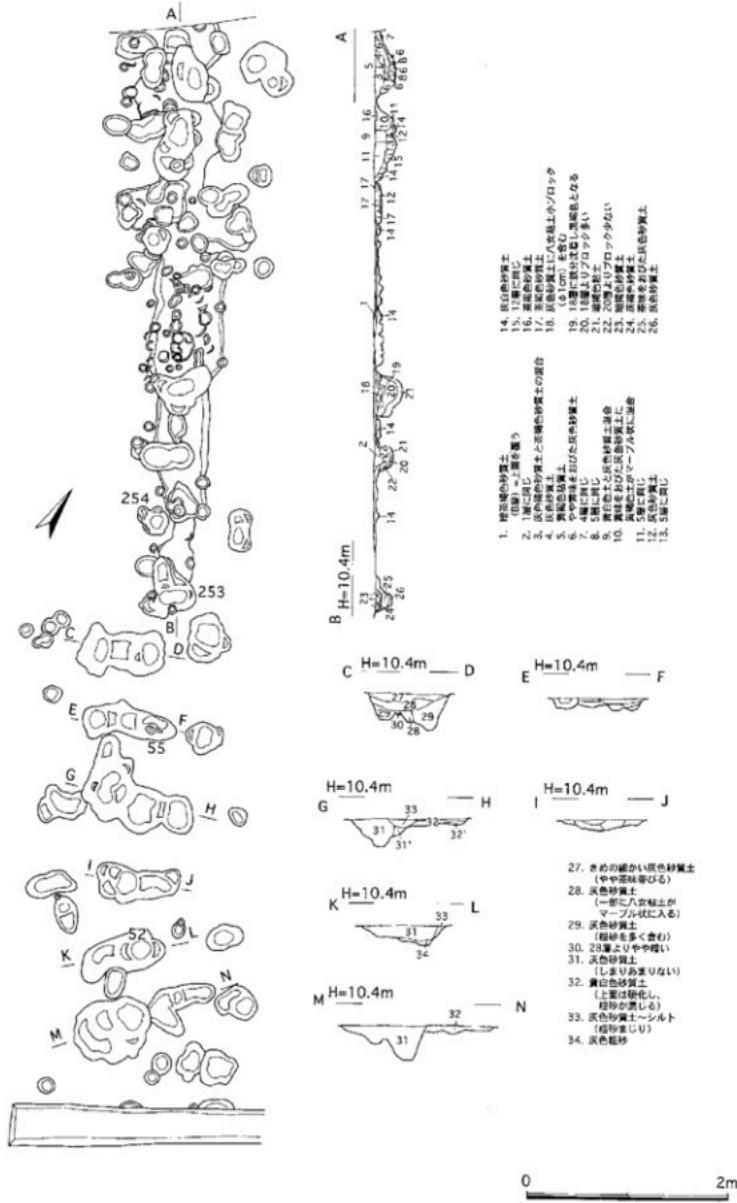
出土遺物 (第17図) 52は平瓦である。淡灰色を呈し本来須恵質であると考えられるが、焼成が不良で器面は大きく摩滅している。凹面には痕跡的に布目が残存しているが、製作時の粘土のしまりが悪く、表面に亀裂が生じている。また凸面には繩目が残っている。

道路 (S F)

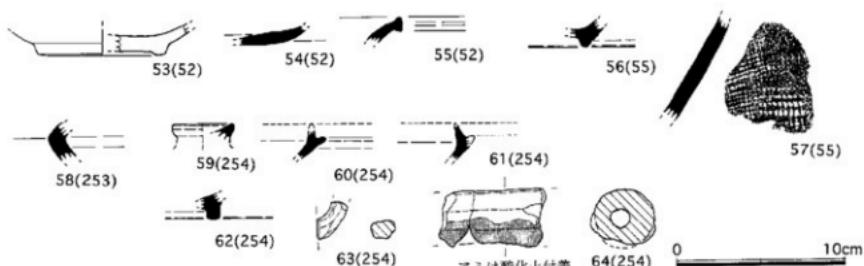
S F 0 0 2 (第18図)

本調査地点は水城東端部分の切り通し部分(推定東門跡)から博多遺跡群に向けて直進する官道(水城東門ルート)の通過地点として、歴史地理学・考古学的な成果から調査前より指摘されていた地点





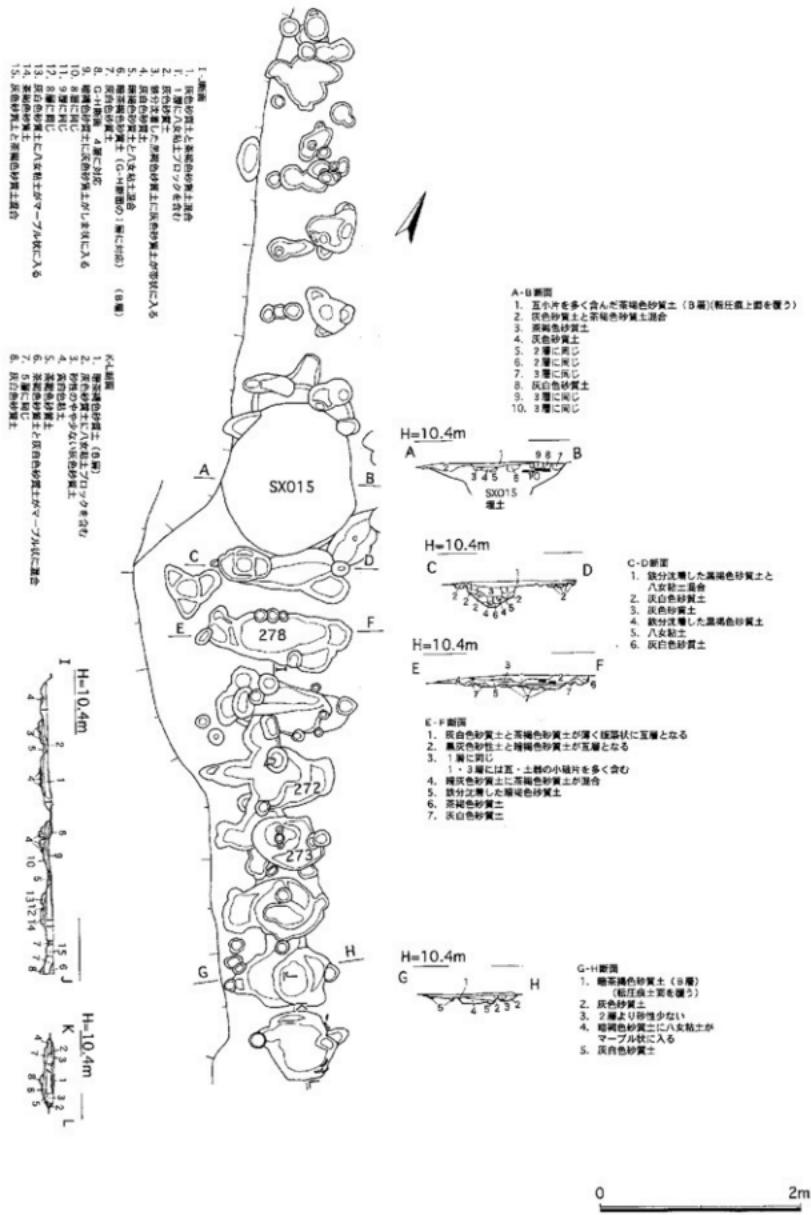
第19図 波板状造構工実測図(1/50)



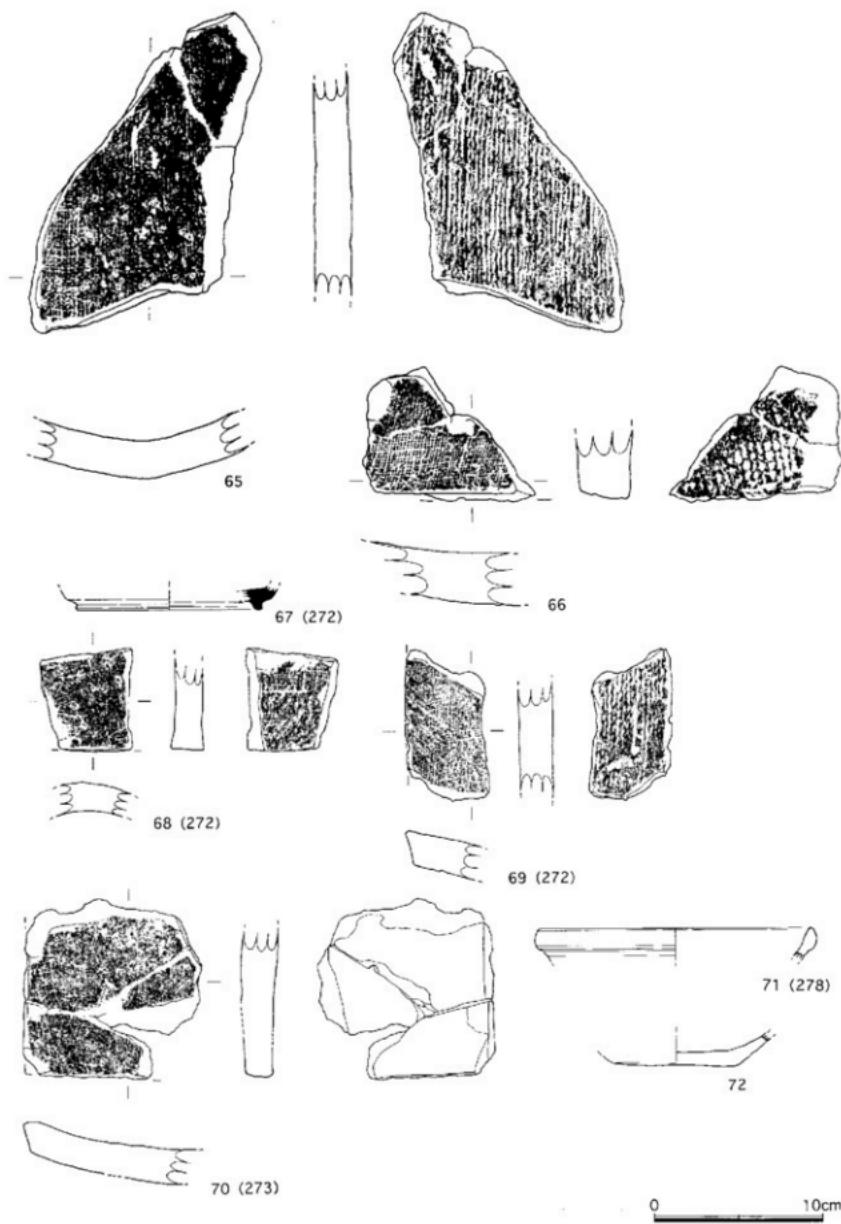
第20図 波板状遺構Ⅰ出土遺物実測図(1/3)

である。大正末～昭和初期に作製された地図(第3図)においても丘陵の尾根線に並行して全長約400m、幅10～20m程度の切り通しが表現されている。切り通しには細かな蛇行が見られるものの巨観的には南東方向から北西方向にはば直進して掘削されている。切り通し内部には通路及び水路が走り、他は周囲の低地部分同様水田として表現されている。本調査地点は低平な独立丘陵の南側にあたり、切り通しの最南端部分に位置している。切り通し南西側には幅150m程の丘陵が広がり、北東側には幅10m、長さ35m程の小島状になった丘陵端部が残されている。この部分での切り通し幅は約20mである。この地図に示された切り通しはI区の東側で確認された。概要の項で述べたように切り通しの上部には2m程度の盛り土が行なわれており、それを除去すると北側の上端幅で22mを測る切り通しが確認できた。なお東側中央部分にコンクリート柱が存在していたため凸字状に未掘部分ができる。切り通し内では戦前まで使用されていた水田・畦畔・水路が認められた。水路(SD004)は切り通しの西側壁沿いに掘削されている。上端幅7～9mを測り、第5図5～12層に見られるように流水の状況が認められるが、その後4層は滞水状況の中で堆積したようである。なお4層上面(水路の西側)も戦前には水田となっていたものと考えられる。また13層上面が大正末～昭和初期の地図に示された水路にあたるものである。SD004出土遺物は第38図に一部を掲げているが、下層の5～12層からは中世前半の土器、4層からは近世の陶器が出土している。SD004は官道廃絶後の水田化に伴ない開削され、形状を変えながら戦前に至ったものと考えられる。畦畔は戦前のもので、幅1.9mで水路の東側に沿う。上面に幅1mの轍が残っており(写真17)、道路としての使用が伺われる。なお道路底面で確認した2条の南北溝(SD007・008)は水田に伴うものであろう。

水田土・床土を除去したところで八女粘土が露出し、官道に伴なう波板状遺構・地鎮状遺構(SX015)が確認できた。この他には道路内に同時期の遺構は存在しない。道路の延伸方位にはやや蛇行が見られるが東側掘下げの直線部分で真北からN-38°-Wの方位をとる。幅については波板状遺構の分布を考えると、東側の肩は水田化においても道路使用時のものがほぼ踏襲されていたものと考えられる。西側はSD004が現状の1/3強を占めており、道路使用時の確実な西側肩は不明確であるが、地図に示された小島状に残された丘陵部分と考えられる東側の肩が水田化の際にも削平されていないことを考えると、切り通しに新たな造作を加えるより現状をそのまま利用して水田化した可能性のほうが高いと考えられ、西側についても道路使用時の肩がそのまま残存しているものと考える。現状では道路としての使用時には切り通しの上端の幅22m、下端で幅18m前後の幅員が考えられる。また底面には道路関連の遺構として側溝等は認められず、前述のように波板状遺構と波板状遺構に切



第21図 波板状遺構II実測図 (1/50)



第22図 波板状遺構Ⅱ出土遺物実測図(1/3)



第23図 波板状構造III～VI実測図 (150)

られる地盤状遺構のみが確認できる。なお切り通しの東側肩の南半分を確認するためトレンチを設定したが、搅乱が著しく確認できなかった。

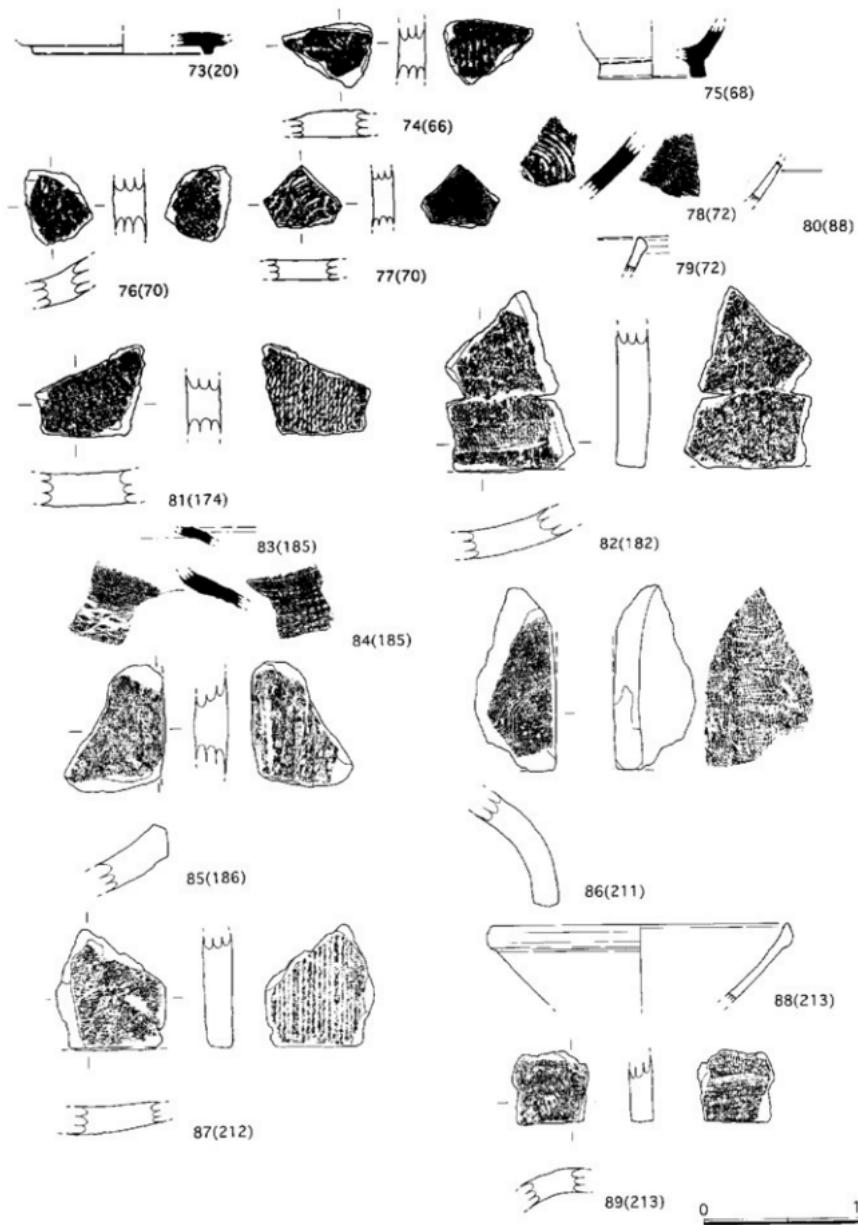
調査時点では道路底面のレベルは標高10.2mでほぼ平坦である。底面の確認時には茶褐色砂質土が面的に広がる部分（中央から南寄り）と砂質土が比較的面的に広がらず波板状遺構が観察できるもの（北半分と南端）が存在する。砂質土が広がる部分については極一部を除いて切り合い関係が認められないため上層用のベルトを残して面的に掘下げた。その結果除去後に複数の波板状遺構のまとまりを確認した。波板状遺構は平面的には切りあい関係も確認できず、特に密集部分ではまとまりを抽出することが困難であるが、方位・掘削状況などから一連のまとまり（単位）を有すると考えられるものがある。波板状遺構埋土は主に地山とは異なる砂質土を投入しており、この中から土師器・須恵器・陶磁器・瓦の小破片が多く出土しており、特に5cm角以下の瓦小破片がその大半を占める。破片はいずれも摩滅が進み極小破片となっているが、他地域の例で見られるような石敷き、土器敷きとでも言うようなまでの密集部分は見られなかった。ここでは調査時点で抽出した波板状遺構の単位をI～VIIとし、それぞれから出土した遺物を掲載する。なお遺物の取り上げにおいては各掘り込みごとにSF002-1から枝番号を振って取り上げており、報告でもこの枝番号を生かしてこれ毎に出土遺物を掲載している。なお説明時には枝番号の頭に付した「SF002-」は省略している。

波板状遺構 I（第19図） 道路北側で検出する。溝状の掘り込みの南側に同一方向の土坑状の掘り込みが連なる。主軸方位は道路主軸にはほぼ平行し、真北からN-40°-Wの方位をとる。溝状の掘り込みは深さ5cm以下で底面に径10cm程度の圧痕が残る。圧痕は特に中央部分に顕著で主軸に平行に並んでいる状態が認められる。圧痕の深さは数センチで丸太状の木材小口部分で路底をたたき占めた痕跡であろう。また上層観察からピット状の掘り込み埋土にも圧痕が認められる。この埋土には砂質土がマーブル状になっているものも見られ、これは地山（八女粘土）と異なる砂質土を水分の多い状態（泥土状）で投入しこれを圧迫・乾燥させることにより路底面を強化させることを目的としたものと考えられる。上面に硬化した砂質土が堆積しているが、これは後世の水田使用による鉄分・マンガンの沈着によるものと考えられる。また南側の土坑状の掘り込み埋土は前者と異なり、圧痕はほとんど見られなかった。埋土も比較的しまりがなくどちらかといえば軟弱である。ただし粗砂を混合しているため地山に比べるとしまりがでており、特に雨などで地山が軟弱になった時にはその差は明瞭である。

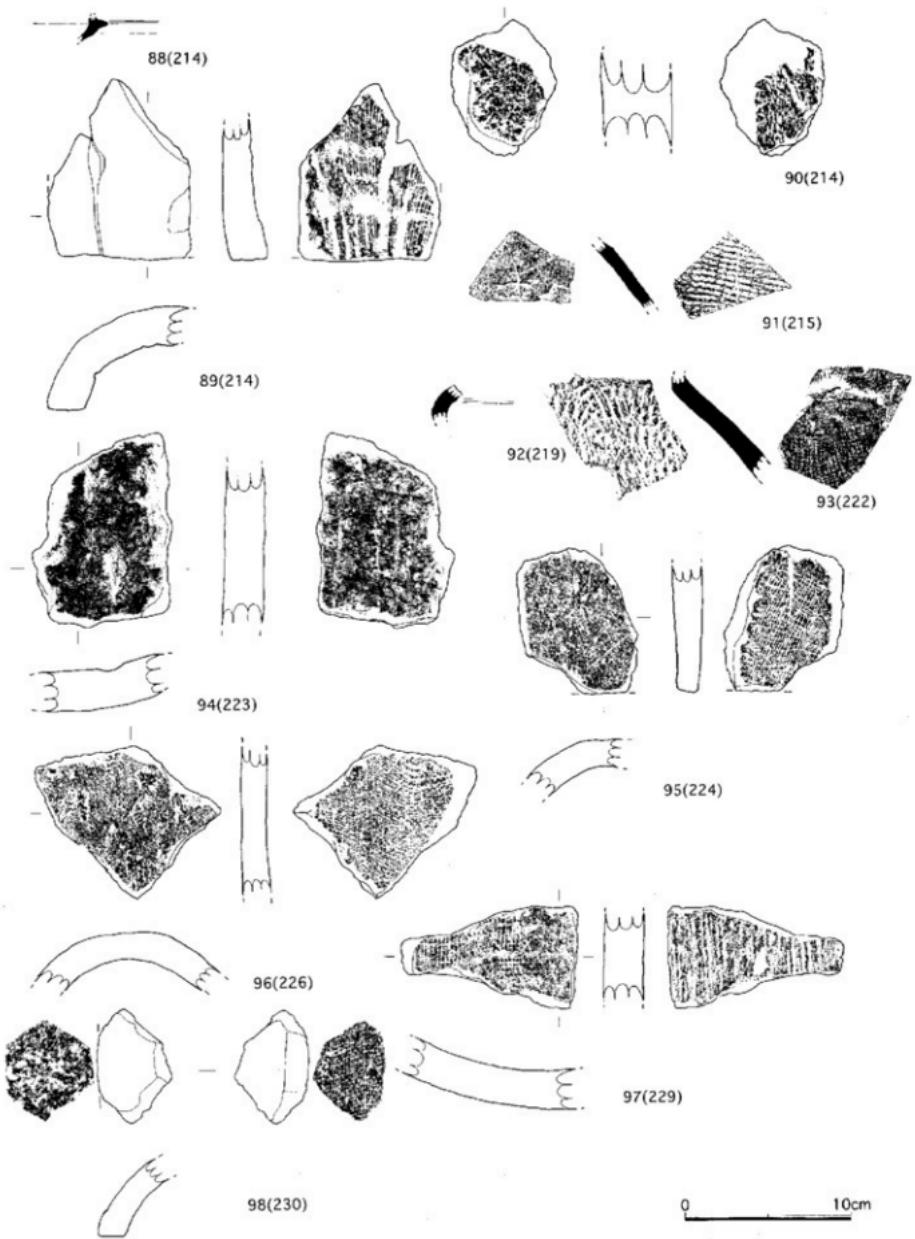
出土遺物（第20図） 白磁（53）、須恵器（54～63）、土錐（64）を図示している。出土遺物はいずれも小破片で摩滅が進んでいる。特に254出土須恵器は2～3cm角の小破片である。53はIV-1類碗の底部であり、時期的に最も新出するものである。

波板状遺構 II（第21図） 中央南寄り、SD004に接して検出する。北側は不規則なピット状の掘り込み、南側は円形～長さ1m強の溝状の掘り込みとなる。主軸方位は真北からN-35°-Wとなる。各掘り込みは深さ15cm程度の浅いもので、底面には圧痕が残る。また埋土途中にも転圧痕が観察できる。ここで確認できた転圧痕には径10cm強のものと径5cm程度の2種類があり、複数サイズの転圧道具が使用されたことがわかるが、その使い分けについては明確ではない。転圧痕の上面には、転圧後に面上に投入されたと考えられる暗茶褐色砂質土（B層）が堆積している。また中央部分には波板状遺構除去後にSX015が確認されている。詳細は後述するが道路の使用時期を推定する遺構である。

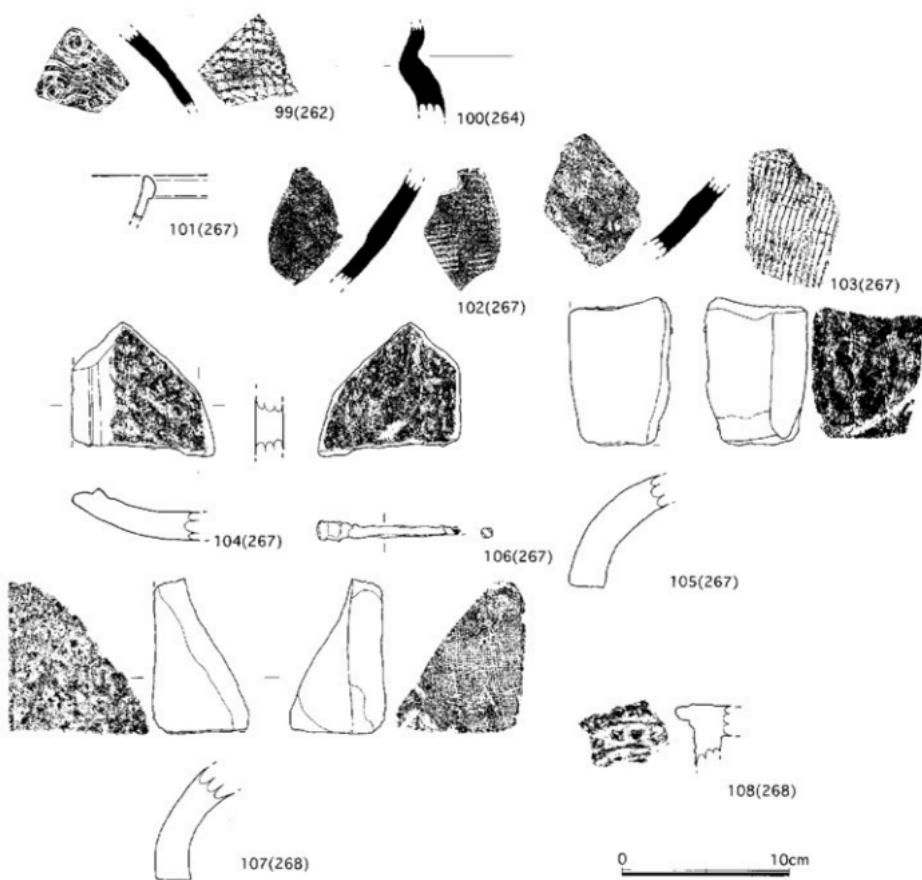
出土遺物（第22図） 65・66は南側の上面から出土している平瓦である。凹面布目、凸面繩目が残る。67-71は各掘り込み出土遺物である。68丸瓦は凸面をヘラ状工具によりなでを行なう。平瓦は69



第24図 波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図 1 (1/3)



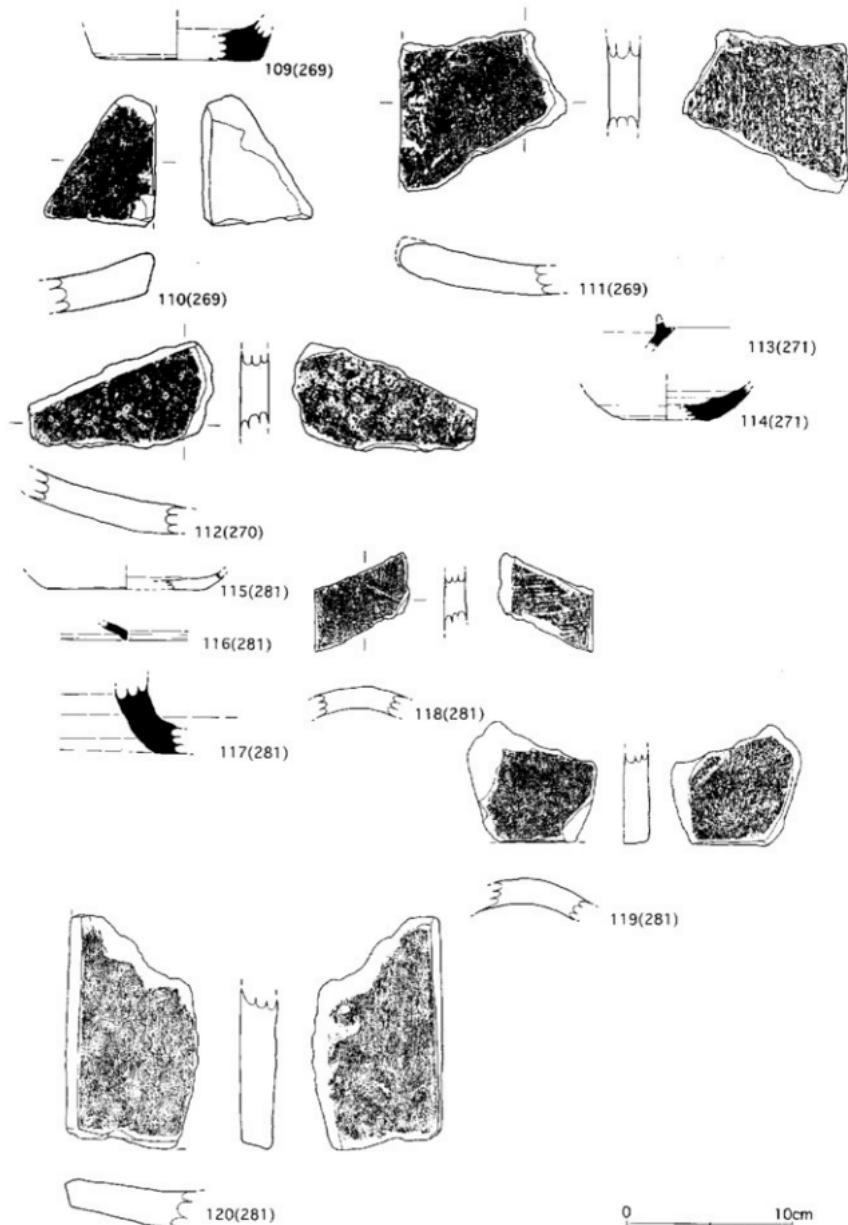
第25図 波板状造構III出土遺物実測図 2 (1/3)



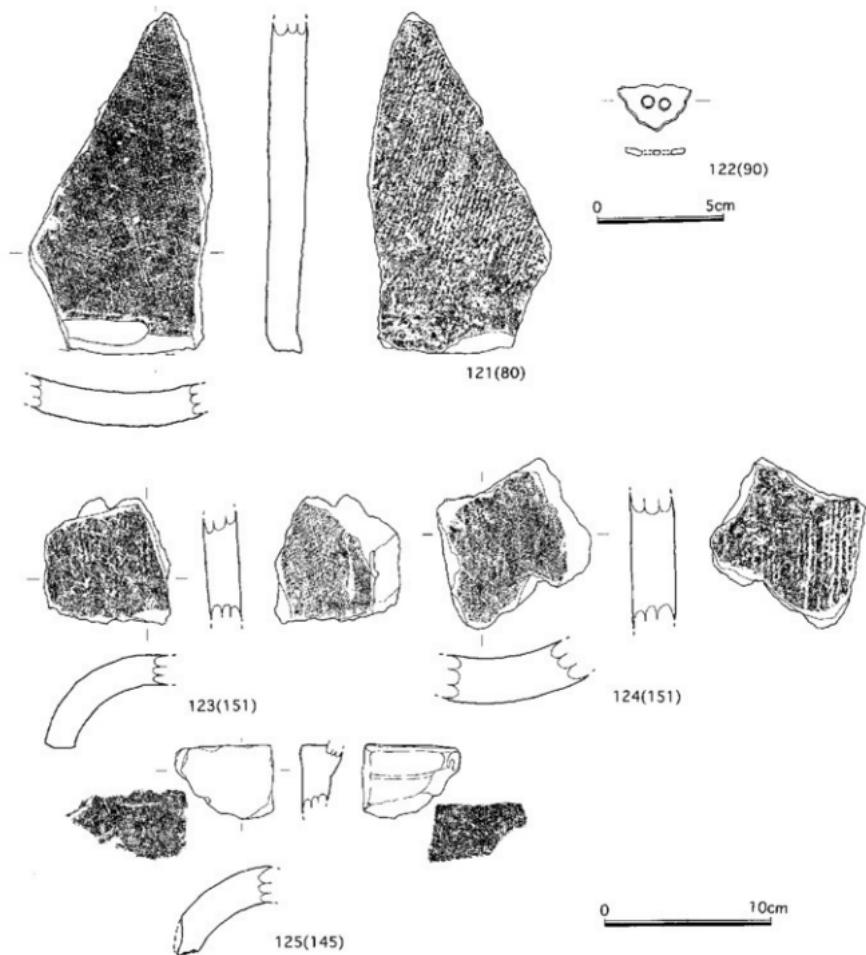
第26図 波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図 3 (1/3)

が須恵質、70は焼成不良であるが、共に凹面布目、凸面繩目が残る。71はIV類白磁碗の口縁部である。72はSX015上面の砂質土層出土の土師器坏である。外底面は回転ヘラ削りを行なう。

波板状遺構Ⅲ（第23図） 中央南寄り、波板状遺構Ⅱの東側に位置し主軸方位はこれとほぼ同じである。北側はランダムなビット状の掘り込みであるが、中央部分は長さ3m程度、幅20~50cmの溝状を呈する。更に南側では径10cm前後の転圧痕跡が地山直上に密集して確認される。波板Ⅲ~VIの間は上面に砂質土（B~D層）が広がっている。土層から波板状の掘り込みを埋め戻した後、面的に投入されているようである。またA層は主に北側で確認しているが、砂質土の更に上面に広げられているシルト層である。これらは波板状に凹凸面を埋め立てた上で面的に広げられたものと考えられ、



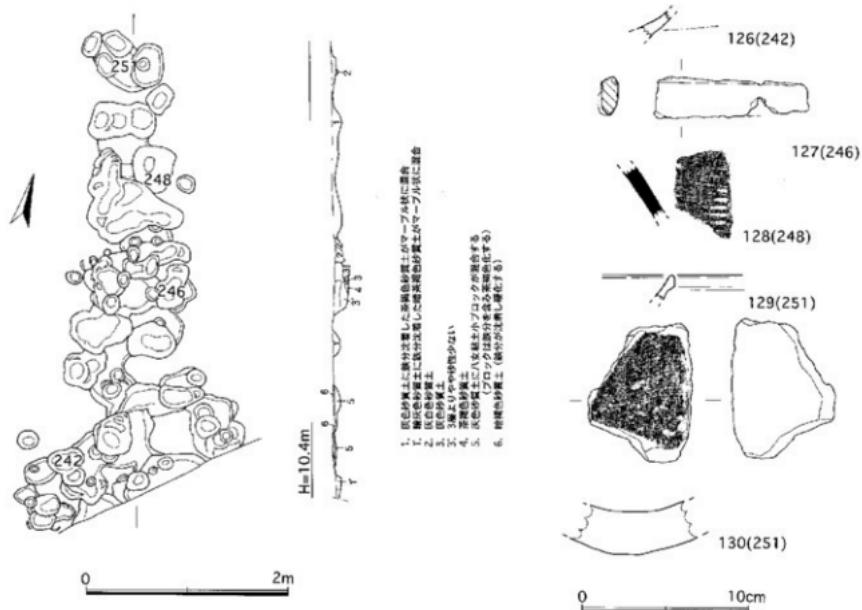
第27図 波板状遺構Ⅱ出土遺物実測図 4 (1/3)



第28図 波板状遺構IV～VI出土遺物実測図 (122は1/2、その他は1/3)

官道の路盤を構成するものと考えられる。溝状の凹凸部分では転圧の痕跡が明瞭な部分とそうでない部分があるが、痕跡が確認できないところでも底面の地山に土器小破片が砂質土と共に埋まり込んだような部分が多く見られ、凹凸面埋めたて時に転圧が行なわれたことを示している。また南側を中心とし凹凸部分埋土がマーブル状になるものが多く見られる。

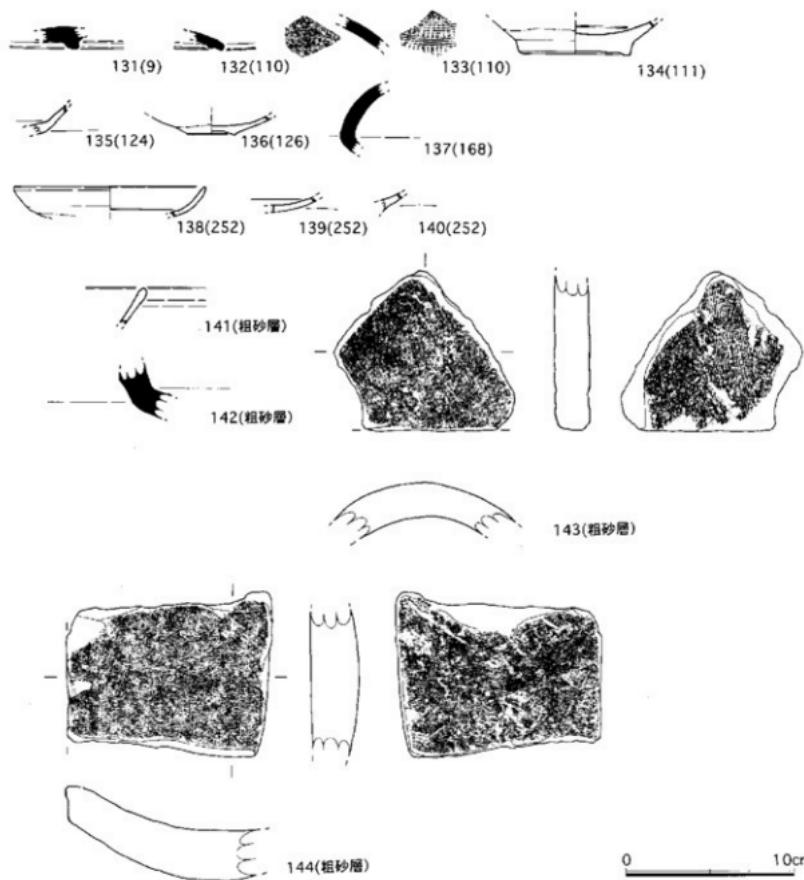
出土遺物 (第24～27図) 第24図の73・75・78・83・84は須恵器である。80は越州窯系青磁の皿で



第29図 波板状遺構Ⅳ及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

あろうか。破片部分は前面に施釉され、外面に1条弦線が残る。79・88は白磁IV類碗である。他はいずれも須恵器の瓦である。85・89は表面を焼している。86・89は丸瓦で凸面ヘラナデ、凹面布目が残る。89の四面端部は回転の横ナデが残る。他は平瓦である。74は凹面青海波當て具痕、凸面平行叩きを行なう。77は凹面青海波當て具痕、凸面擬格子叩きが残る。76は凹面布目で凸面はナデか。81・87は凹面布目、凸面縄目。82は凹面布目、凸面縄目の後ヘラナデを行なう。85は凹面ナデで、凸面には縄目が残る。21図は88・91・93が須恵器である。89・95・96・98は丸瓦である。89は軟質で凸面は縄目か。凹面は布目が残り、端部に布が寄った痕跡が残り、横方向に紐跡が観察できる。95・96は須恵質で凸面ヘラナデ、凹面布目である。95には吊り縄の痕跡が残る。98は軟質で凹面布目、凸面は縄目か。90・97は平瓦である。90は須恵質で縄目が残る。97は凹面布目、凸面縄目である。22図は101がIV類白磁碗である。99・100・102・103は須恵器である。104は軟質の平瓦である。凹面に布目が残り、凸面はヘラナデを行なっている。105は軟質、107は須恵質の丸瓦である。凸面ヘラナデ、凹面には布目が残る。108は軒丸瓦の瓦当破片である。焼成は軟質であるが表面を焼している。圓線内に珠文を配する。106は鉄釘か。23図は115が土師器壺である。小破片で不明瞭であるが外底面はヘラ切りであろう。109・113・114・116・117は須恵器である。110・112・118・120は瓦である。110・112は須恵質の平瓦である。110は凹面布目、凸面ヘラナデを行なう。111・112は凹面ヘラナデ、凸面縄目である。120は軟質の平瓦である。側面は2面取りを行なう。凹面・凸面ともにヘラナデを行なう。118・119は丸瓦である。共に凸面ヘラナデ、凹面布目が残るが、118は凹面に横なでを行なう。

波板状遺構IV (第23図) 波板状遺構Ⅳの東側に位置する。他の凹凸部分と異なり深いピット状の



第30図 SF 002出土その他の遺物 (1/3)

掘り込みが密集している。埋土は灰色～灰白色のシルト質で他と比べやや軟質であり、上面を被覆する土砂も灰色シルトでやや軟弱である。掘り込みの下層にマーブル状となる埋土が見られる。

出土遺物 (第28図 121・122) 121は須恵質の平瓦である。凹面布目、凸面繩目が残る。122は青銅製品である。径4.5mmの孔が2個並ぶ。飾り金具であろうか。

波板状遺構V (第23図) 波板状遺構IVの南側に連なる。幅20～40cmの溝状の掘り込みを基本とする。埋土、掘り込みの形状の類似性などから波板状遺構IIIの延長とも考えられるが、主軸方向がIIIよりも西に振れており、IVの延長により近い。

出土遺物 (第28図 123・124) いずれも焼成不良の須恵質である。123は丸瓦で凸面繩目の後へ

ラナデ、凹面は布目が残る。124は平瓦で凹面はナデ、凸面は縄目を施す。

波板状遺構VI (第23図) 長軸2.3m、短軸1mの土坑状の掘り込みである。主軸方位は真北からN-70°-Wをとる。埋土は灰色砂質土-シルトを主体としている。土層からは径10cm程度の転圧痕が多く見られ、マーブル状の堆積も見られるが、特に硬化した部分はない。平面的には波板Vの埋土を切っている。波板状遺構IV-VIは方向的に一連のものであり、官道の直進方向に対して斜交している。また特にIVとVIは埋土の類似性も高い。

出土遺物 (第28図 125) 玉縁が結合面から欠失した丸瓦である。焼成は軟質であるが、表面は焼しの加工が行なわれる。凸面ナデ、凹面布目が残る。

波板状遺構VII (第29図) 南端で検出する。ランダムなピット状の掘り込みがつながるが、IV程密集していない。砂質土を主体とし、特に中央部分に径10cm程の転圧痕が残る。主軸はおおよそ真北からN-26°-Wをとる。

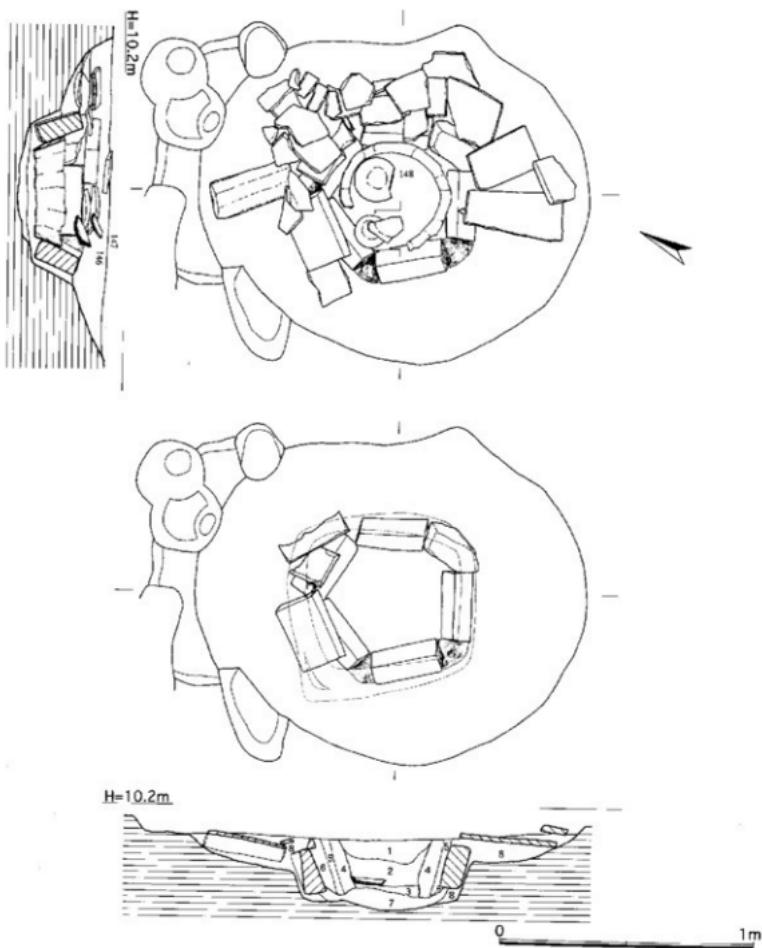
出土遺物 (第29図) 126・129は白磁である。126は胴部下半に施釉の境がある。128は須恵器の胸部破片である。内面ナデ、外面擬格子の叩きが残る。130は軟質の平瓦である。凹面に布目が残る。凸面は不明瞭である。127は焼成が著しく崩れているが、断面形状から刀子と考えられる。

その他の遺物 (第30図)

131~140は前述以外の波板状遺構から出土した遺物である。131~133・137は須恵器である。蓋坏、壺が出土している。いずれも極小破片である。134は白磁IV類碗である。135・136・138~140は白磁皿の小破片である。141~144は主に波板状遺構IV上面の砂質土層を掘下げ中に出土した遺物である。141は口縁部を小さな玉縁に作る白磁である。142は須恵器壺の頸部である。143は須恵器の丸瓦である。凸面にはナデを行い、凹面には布目が残る。144は軟質の平瓦である。摩滅が著しいが、凹面布目、凸面縄目が観察できる。

S X 0 1 5 (第31図)

波板状遺構II の中央部で検出する。波板状遺構に伴う砂質土を除去した後に検出しており、第21図A-B土層からも、この遺構が波板状遺構に先出することが確認できる。平面プランは1.25×1.55mとわずかに楕円を呈する。掘り方は2段に行なわれており、2段目は平面70cm程度の隅丸方形に掘下げられる。2段目の掘り方内には、5cm程の砂質土-細砂上に素文塗6個、自然石1個を略五角形に組み、間隙には暗褐色の粘土を充填し日張りを行なっている。この内側には木材を割り貫いた筒を据えている。筒は鉢状にやや下がすつまり、木質の上面外径48cm、下端外径38cmを測る。現状で木質は厚さ2cm程しか残存しておらず(5層)、依存状況も不良であったが、断面の観察により4層とも木質の痕跡と考えられる。これにより内径を復元すると上面径35cm、下端径25cmとなる。木質と壇の間には白色粘土(6層)が詰められ、安定を図っている。筒内埋土は最下層に薄くべたべたした黒褐色土が堆積し、その上面から完形に近い土師器碗(148)が正位で出土している。また上層には水分を含んでややしつつとした燒土がレンズ状に堆積しており、ここからは完形の須恵器坏(146)が出土する。壇上面～掘り方外周にかけては汚れた白色粘土を充填しながら主に平瓦が2~3段平積みされている(一部丸瓦・壇を含む)。瓦組みは粘土上面から行なわれたものではなく、ランダムに平積みした瓦も粘土内に埋め込まれたような状況であったと考えられる。遺物の接合を行なったところ、やや離れた(40cm)破片が接合したものもある(152)ことなどからも、破片も多く用いた乱雜ともいえる組み方であるといえる。この瓦積みは波板状遺構構築の際の転圧等による破壊が行なわれているようで、現状では積まれている瓦も壊れているものが多い。また8層上面にも転圧痕が残されていたり、瓦の上面まで転圧痕が確認されたりしている。なお西半部分では平積みの瓦・壇がほとんど

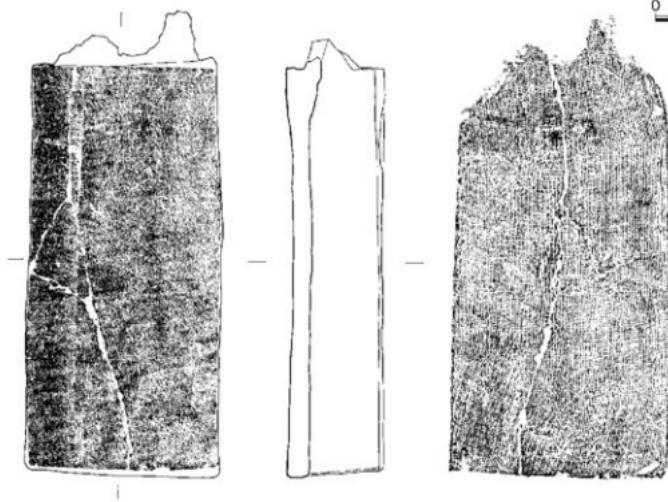


1. しょとりした壁赤褐色粘土（馬鹿口ームブロックを少量含む、性土）
2. 壁赤褐色粘土（ロームブロックを含まない、1層よりボロボロしている）
3. 黒褐色粘土質土（べたべたとして水気が多い）
4. 黑褐色粘土（歯分が沈着しスカスク）である。木質の残骸か
5. 水質
6. 白色粘土（壁と木質の間にめている）
7. 灰白色砂質土→細砂
8. やや汚れた黄白色（八女粘土の堆土）

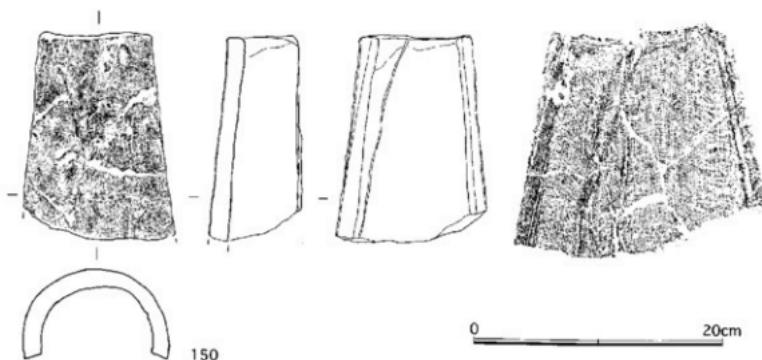
第31図 SX015実測図(1/20)



0 10cm



149



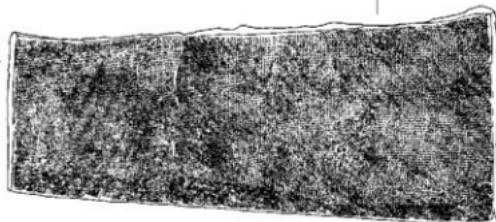
第32図 SX015出土遺物実測図1 (146~148は1/3、149、150は1/4)



1



1



1



151



1



1



1

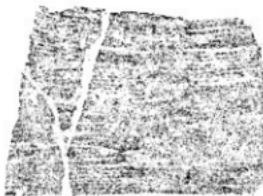
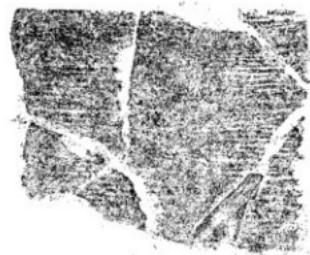


152

0

20cm

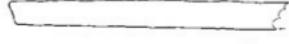
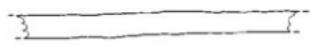
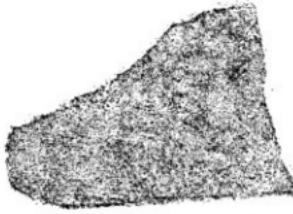
第33図 SX015出土遺物実測図2 (1/4)



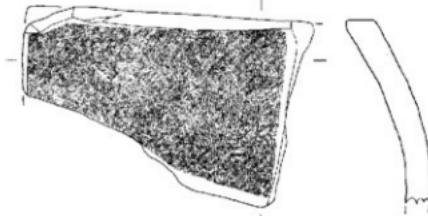
153



154



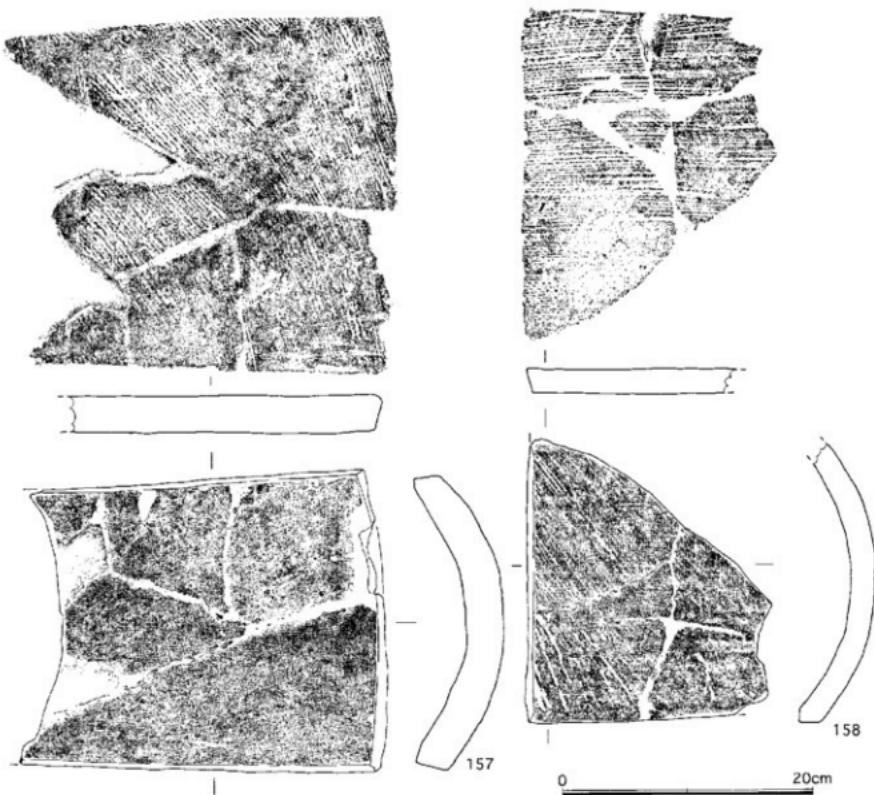
155



156

0 20cm

第34図 SX015出土遺物実測図 3 (1/4)

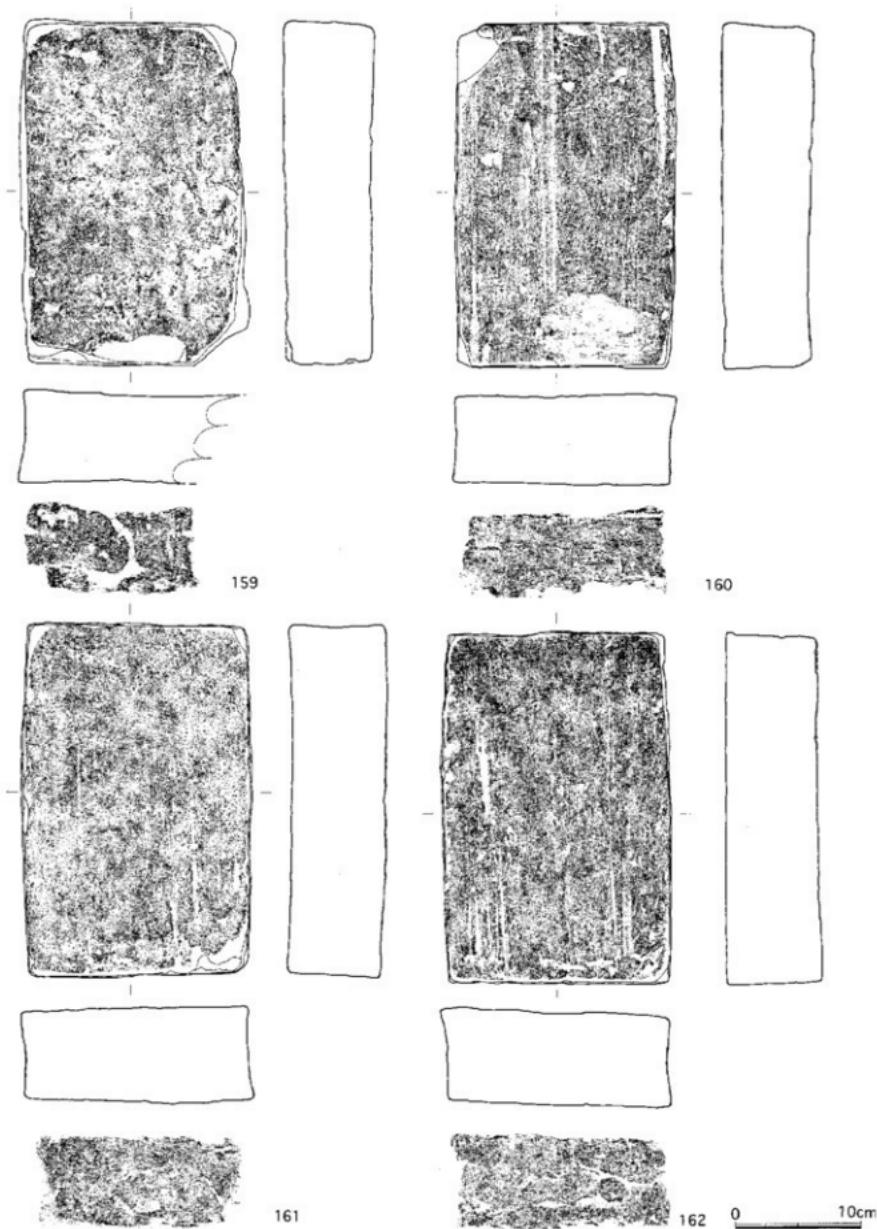


第35図 SX015出土遺物実測図4 (1/4)

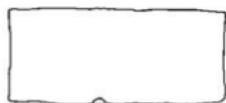
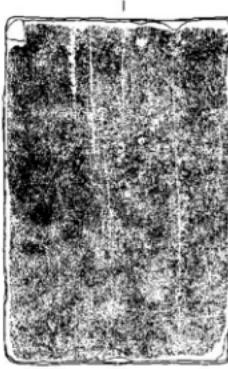
ど確認されていない。使用されている瓦自体は波板状遺構内から出土するものと同様のものであるが、破片は大きく摩滅もあまり進んでいない。遺物の大半は瓦組み部分もしくは掘り方内からの出土であるが、木質内からも土師器、須恵器、瓦、埠の破片が出土している。しかし両者の間に遺物の接合関係は見られなかった。

本遺構は出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭に位置付けられるものと考えられる。本遺構の特異な形態から、道路に伴う祭祀的な意味合いを有する遺構と考えておきたい。なお時期的にはずれがあるものの、SX015の位置は波板状遺構が交差する部分にあたる。道路の交差する地点に上器を埋納する例があり、SX015掘削時にもこの道路に取り付く支線のような施設が存在していたかもしだれない。

出土遺物 (第32～37図) 146～148は木質内出土の遺物である。またこの他の瓦埠は掘り方内に組まれたもの及び掘り方出土との接合資料である。146は須恵器壊である。口縁端部の一部分を欠くが



第36図 SX015出土遺物実測図 5 (1/4)



163



164



165

0 20cm

第37図 SX015出土遺物実測図 6 (1/4)

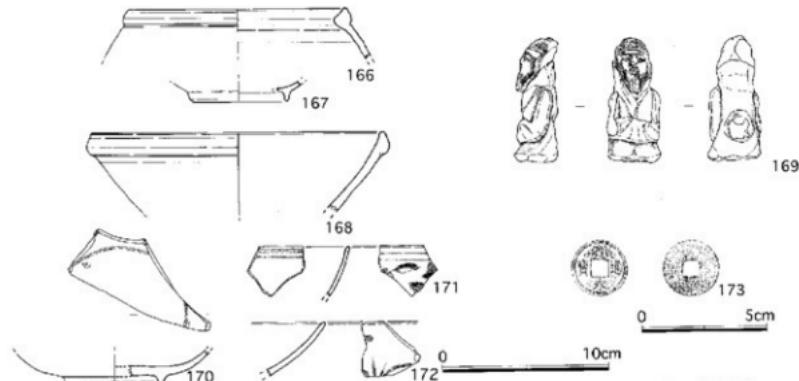
ほぼ完形である。口径13.2cm、底径8.4cm、器高3.8cmを測る。器面は全体に摩滅が進んでおり調整は不明瞭である。外底面にはヘラ状工具による削り痕跡が明瞭に認められないが、外縁部にヘラ切りの痕跡がわずかに確認できる。147・148は土師器坏である。法量は147が復元口径17cm、器高3.8cm、148が口径17cm、器高4.6cmを測る。いずれも体部下半から外底面は回転のヘラ削りを行なっている。器面調整は剥落が進んでおり明瞭でないが、一部に横方向のヘラ磨き状の痕跡が残る。149・150は丸瓦である。149は玉縁式で玉縁部分を欠くほかはほぼ完存する。焼成はやや軟質である。凸面は胴部に平行する繩目叩きのちナデを行なう。また横方向ランダムな段が残るが、製作道具の痕跡であろう。凸面は全体に布目が残る。150は行基式で狭端部分が残る。焼成は須恵質で灰白色を呈する。凹面は叩きの後に丁寧なナデを行い、凸面は全体に布目が残る。また布目には布が寄った部分が認められる。151～158は平瓦である。完形に復元できるものはなく最大でも1/2強の残存である。いずれも凹面に布目が残っている。凸面は151がナデの他は繩目の叩きが残る。叩きは157が長軸に斜交するばかりか、長軸方向に平行している。159～165はいずれもほぼ完存する素文埴である。159・164は丸組み内出土で、他の5個体は下段で組み合わされたものである。形状は規格的で長さ27.5～28.5cm、幅18cm前後、厚さ7.5cm前後である。重量は5～6kgである。表面はいずれもなでによる整形を行なっている。

S F 0 0 2 関係その他の遺物（第38図）

166～169はS F 0 0 2 直上の水田土中から出土した遺物である。この水田は戦前まで使用されていたものである。166は陶器壺、167は瓦器碗、168は白磁碗である。169は白磁の人形である。頭部全面には褐色釉が塗布される。頭部背面は釉が剥落しており、飾りとして接着していたものであろうか。170～173はSD 0 0 4 出土である。170～172は近世陶磁器、173は寛永通宝である。SD 0 0 4 の埋土最上層は戦前まで水田となっていたようであるが、溝の掘削時期については道路廃絶以降としかいえない。

4 小結

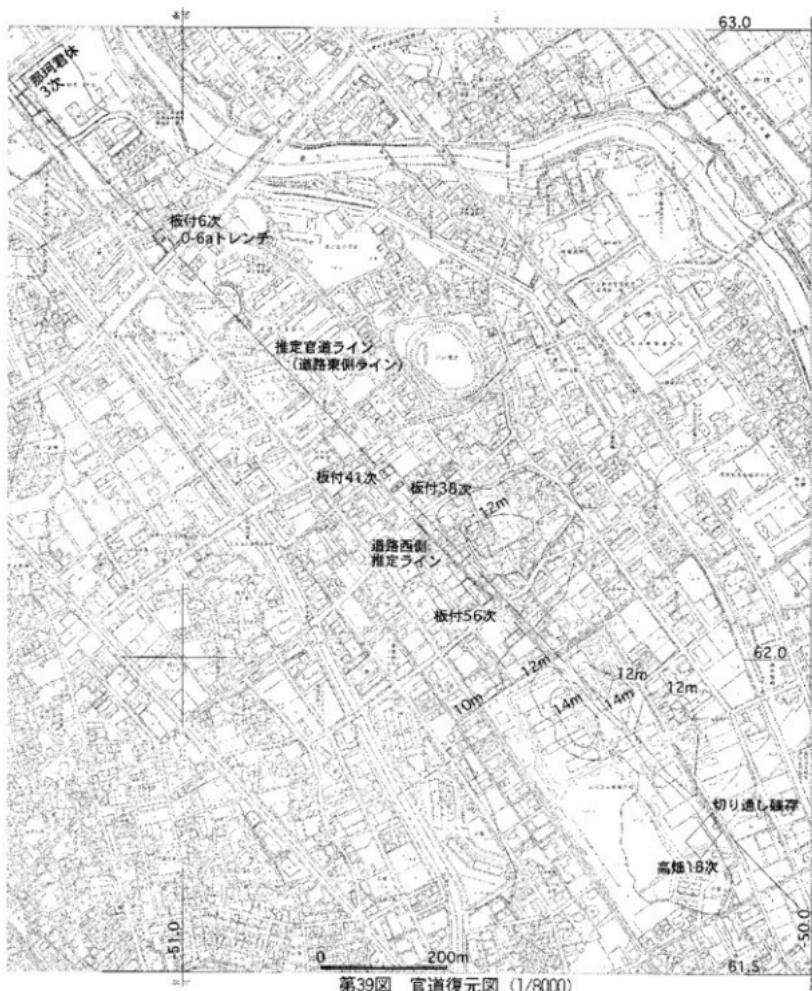
今回のI区の調査では、削平が著しかったものの弥生時代～戦前に至る遺構・遺物が確認された。中でも切り通しにより造られた官道は注目すべき遺構である。ここでは周辺の調査事例を含めて官道



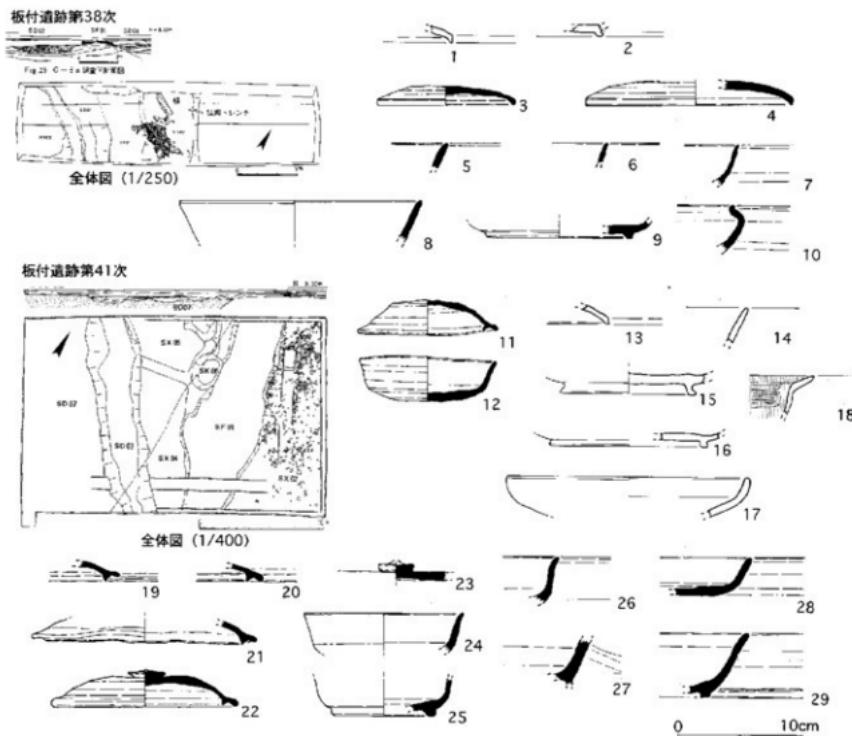
第38図 SF 002上層水田土中及びSD 004出土遺物 (169、173は1/2、その他は1/3)

について簡単に述べておきたい。

官道の復元等についてはこれまで歴史地理学・考古学の分野から研究が行なわれており、ルートの解明・歴史的意義などについて検討が加えられている。今回確認された官道は水城東門跡から博多遺跡群を直線的に結ぶと考えられている「東門ルート」と呼称されているもの一部である。これまでの成果から東門ルートは8世紀中頃以降に使用が開始され、12世紀代まで保持されていたと考えられている。ここで今回の調査成果と照らし合わせてみたい。



第39図 官道復元図 (1/8000)



第40図 板付遺跡第38次、41次全体図及び出土遺物実測図 (1/250, 1/400, 1/4)
(1~10は38次SD02出土、11・12は41次SX05出土、13~29は41次SD03出土)

まず今回特に特徴的な波板状遺構について概要をまとめたい。まずその配置はいくつかのまとまりに分けることができ、各まとまりで主軸方向が異なっている。このため道路の直進方向に必ずしも沿う方向となっていないものもある。また分布に粗密があり、路面全体には行なわれていない。このことは掘削時期の相違とも考えられるが少なくとも出土遺物・埋土からはそのような状態を見出すことはできなかった。また埋土上には水溶土砂が多く投入されており、マーブル状の土層を示す部分が多く見られた。遺構面は比較的軟弱な八女粘土層で、前述のような土砂及び土器・瓦小破片を投入し転圧することにより路底面の強化を意図しているものと考えられる。この成果は調査時に雨水により八女粘土が露出している部分がべたべたになったときでも、波板状遺構上面は比較的安定していることに現れている。また凹面に土砂を充填後、面的に砂質土・シルトをひいている部分が確認でき、舗装材のような性格を有するものと考えたが、路面全体で確認できたわけではなく、部分的な造作に終わる可能性もある。次に時期的な問題であるが、波板状遺構の埋土から出土した遺物をみると、陶磁器については同安窯系・龍泉窯系の青磁は見られず、白磁はIV類のみでV類はほとんど認められない。また土師壺・皿類は一部糸切りのものが混在するもののヘラ切りが大半であるという特徴を有する。こ

それのことから波板状遺構が11世紀後半～12世紀前半に形成されたものと考えられ、これ以降の遺物も認められないことから道路の廃絶の時期もこれに近接した時期が考えられよう。なお調査において確認できた波板状遺構は埋土・遺物からいずれも時期的に近接したものと考えられ、この遺構が道路が保持された最終段階のものであると考えられる。なお出土遺物を見ると、大半は瓦類が占めるが、他の遺物では8世紀代～9世紀初頭までの須恵器・土師器が見られ、その後の遺物はほとんど認められず、時期的には空白の状態となる。その後11世紀後半～12世紀前半の遺物がまとまり、この後廃絶されるという推移を辿るようである。空白となる9世紀前半～11世紀中頃迄の時期は道路としての使用が停止されたものと考えられる。

次にSX015について見てみたい。本遺構は切り合い関係・出土遺物から波板状遺構に先行する8世紀後半～9世紀初頭の遺構と考えられる。後に概要を記している板付遺跡の調査事例などからも9・10世紀の遺物が見られないことから、SX015は道路開設後一旦使用が停止される直前の遺構である可能性が高い。地鎮的性格もしくは道路廃棄に伴う祭祀的な遺構と考えておきたい。また遺構を構成する遺物は8世紀前半～中頃に造営されたとされる官衙的施設〔高畠廃寺〕に使用されたと考えられる瓦塼が転用されている。時期的に遺物を共有したとは考えにくく、瓦の使用状況などから施設廃絶後に現地で調達した瓦塼を用いたものと考えられる。なお現在の高畠廃寺の推定ライン(第2図)は道路との位置関係・主軸方位が整合しておらず、本来は官道の西側、現警察学校内に位置した可能性もある。

ここで周辺の調査事例について概観していきたい。

1) 那珂君体遺跡第3次調査(小学校建設)

東門ルートに関して市内で確認されている最も北側の調査である。磁北からN-42°-Wの方位をとる1号溝を検出し、この西側には人力では掘下げられないほどの硬化面が調査区境界まで幅8m確認されている。溝底から鴻臚館敷軒丸瓦、上面から白磁が出土している。なお硬化面からはの遺物はほとんどない。また出土遺物は8世紀代及び12世紀代に位置付けられるものが主体で、9・10世紀の遺物はほとんど認められない。

2) 板付遺跡第6次調査(市営住宅建設)

全容は明らかでないが、第4区-O-6aトレンチで溝状遺構が検出されている。位置的には那珂君体遺跡3次調査検出溝の延長部分にあたる可能性もある。出土遺物から古代以降に位置付けられるものと考えられる。この周辺のP-3a,bトレンチからは古代に位置付けられる須恵器が出土すると共にこの上層からは青磁が出土しているようである。

3) 板付遺跡第38次調査(G8a区)

SD02は41次調査のSD03につながるものと考えられ、8世紀代の須恵器が出土している。この溝の西側に沿うように明灰褐色砂質土を盛り上げて作られた道路状遺構SF01が確認されているが、全体の規模については明らかでない。

4) 板付遺跡第41次調査(G7d区)

38次調査区の北側に位置する。SD03は磁北からN-40°-Wの方位をとり、7世紀後半～末の水田(SX05)を切っている(SX05出土遺物は第40図11・12)。溝は8世紀末までには埋没しているようである。溝の東側に略南北の方位をとる道路(SF01)を確認しているが、今回官道との関連は不明である。復元ラインからの推定では溝の西側に官道の路面が存在していたものと考えられる。

3) 板付遺跡第56次調査

調査区の東側沿いに現況の道路には平行にS F 21を検出する。遺構は縁辺部分が乱れてはいるがおおよその方位をN-42°-Wにとり、遺構面から20cm程度掘下げられている。埋土は砂・シルト・粘質土が不規則に堆積したような状態であり、底面の凹凸は著しい。また硬化面は確認できていない。出土遺物は少量であるが、8世紀代の上部器・須恵器及び白磁破片が出土しており、9・10世紀に位置付けられる遺物は出土していない。本調査地点は丘陵の末端部分に位置し、高畠遺跡より始まる切り通しの北端にあたるものと考えられる。

4) 井相田C遺跡第1次調査

調査区南西隅でN-39°-Wの方位をとる溝群を検出した。溝は9世紀初頭埋没の溝に切られ、9世紀後半～10世紀初頭の溝群と考えられている。また12世紀後半～13世紀には水田が上層を覆っている。本調査では8世紀後半を主体とした建物群と墨書き土器・人面墨書き土器が出土している。同様の遺物が高畠遺跡17次調査（官道の東隣）などでも出土しており、その類似性が注目される。

最後に本調査及び周辺の調査事例から考えられる道路の消長について簡単にまとめておきたい。古代の交通制度については文献史学の立場から、駅制・伝馬制・伝制の三重構造を有するものと考えられている。本調査における道路は規模・直進性から駅路に相当するものと考えられる。駅路の整備については7世紀後半には多くの地域で整備が進められていたとし、また延暦14年（795年）に近江・若狭国における駅路廃止、翌15年に諸国地図の作成の記事が見られ、これ以降駅路・駅家の改廃記事が集中することから、この時期を画期として交通網の再編成が行なわれてきたと指摘されている。また考古学的な調査結果からも、平安時代に駅路の規模が縮小する等の事実が確認されている。今回調査を行なった東門ルートについてもこのような大きな流れを元に考えてみたい。ルート内の部分的な調査成果を元にすれば、道路出現の時期については板付遺跡41次調査のS X 0 5との切り合い関係が注目される。7世紀後半～末の水田遺構と考えられ、道路復活と考えられるS D 0 3はこれを切って構築されている。また「高畠廃寺」との関連を考えると、他地域で指摘されているような官道と官衙的施設建設の前後関係からの推定を重ねることが許されるならば、高畠廃寺建設以前に道路が開設された可能性が高いと考えられる。以上のことから道路開設を7世紀末～8世紀の早い段階に考えておきたい。各調査の出土遺物から8世紀段階では全面的に道路が使用されており、各調査地点において側溝と考えられる遺構からはこの時期の遺物が多く出土している。次に「高畠廃寺」廃絶後8世紀後半～9世紀初頭にS X 0 1 5が構築され、更にこれから近い時期には道路は一旦使用が停止されたものと考えられる。このような状況は全国的な駅路の形態変化にも整合している。その後中世前半期に再整備が行なわれたものの、12世紀中頃以降には完全に廃絶され水田化されたものと考えられる。なおこの間の遺物についてはほとんど出土例が見られないことから、道路としては形骸化しており維持・補修は行なわれていなかったものと考えられるが、建物その他の遺構は今までのところ認められていないことなどから、一定の空間としては認識されていた可能性は考えられる。なお以上の状況は板付～高畠遺跡間での状況をまとめたものである。前述の井相田遺跡の調査結果は、逆に9・10世紀の道路と考えられる遺構であり、ここでは参考資料としてとどめているが、空白の時期を埋めるものとして今後の検討課題としたい。

以上本調査例から東門ルートの消長について簡単に述べてきたが、交通制度を取り巻く問題は単に道路の消長のみならず、古代国家全般にわたる課題を提示するものといえる。今後周辺の調査事例を踏まえ、複視的に考えていく必要があろう。

○福岡県内の道路状遺構（古代から中世を中心に）

（續四）

一握りのよい瞬間は消路の儀である。また、() 内は数字、() 内は運と運の大小関の儀である。

当面は、この表は福岡県内で検出された道路状況標を報告書・論文などから収集したものである。原則に基づいて忠実に表記したつもりだが、作成者の読み間違いなどにより、誤った表記をしている場合がある。各道路の説明書などを詳しくは参照してください。

(如需文獻)

浙江廣雅1997-1999「道路第一集」「古代交通研究」第7-9号

大庭康時2001「福岡市内検出の古代・中世道路遺構について」『博多研究会誌』第9号
久松正則2000「古墳時代福岡「道場」の検出」『大同考古学報』第31号。

久住弘道「1959『源生時代新東京』『道路』の検出」『九州考古学』第4号
猪川嘉一「1963『大森御成之原の遺跡と遺物』『古代化縄縄』第30集

1995「大卒専修研究の現状と課題」、「大卒専修研究」

山村信重1993「大宰府西辺の古代官道」『九州考古学』第68号
日野尚志1996「豊後国西一幡原とその周辺の遺跡群について」『大正山地遺跡』

¹⁵⁹ 『日本書紀』1993：「帝吉安御」で釋田された古代の道筋放逐論について、「古代史遺跡研究」、久留米市歴史資料館編1993：「第2回吉井主多寡妻山古墳群の考古学的構成」；「上北・島主島

春日市議さん委員会編1995「春日市上巻」

久留米市図さん委員会編「久留米志第12巻資料編(考古)」
大庭町市史編纂委員会編「大庭町市史資料編」

太宰府市史編纂委員會編1991「太宰府市史考古資料編」
福岡縣立史編3-6 福岡市編2000「福岡縣立史研究資料編(上) 考古資料」

（二）考古遺物
臺北市文化局委託臺北市立博物館調查，於1993年1月進行「臺北市史考古資料庫」



写真1 SF002 作業風景(南から)



写真2 調査区全景（上空から）



写真3 調査区全景（北から 正面は大宰府方向）



写真4 SC001土層



写真5 SC001（北から）



写真6 SU010（西から）

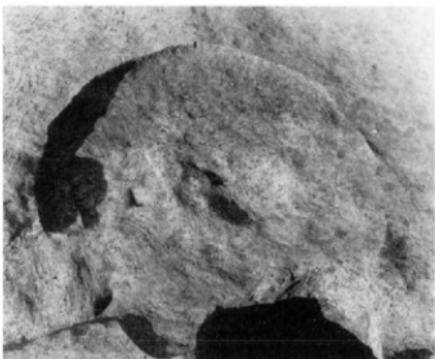


写真7 SU011（南から）



写真8 SU012（東から）



写真9 SU013（東から）



写真10 SK014（東から）



写真11 SD005・006（南から）



写真12 SD005・006土層 1



写真13 SD006土層 2



写真14 SD006土層 3



写真15 SD009（西から）



写真16 SF002南壁土層

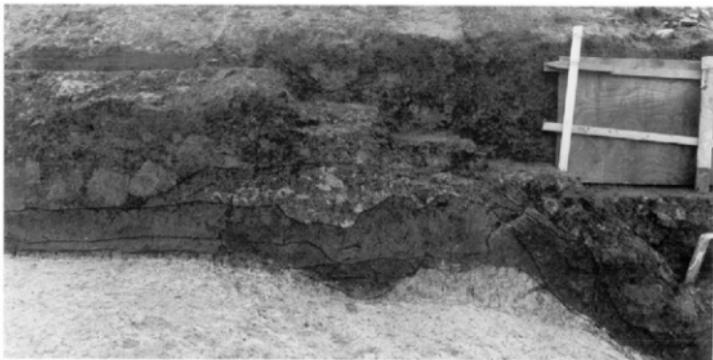


写真17 SF002土層内皺痕跡



写真18 SF002北壁土層



写真19 SF002波板状遺構掘削前全景（上空から）



写真20 SF002波板状遺構掘削後全景（上空から）



写真21 波板状遺構Ⅰ掘削前（東から）



写真22 波板状遺構Ⅰ掘削後（東から）



写真23 波板状遺構Ⅱ～Ⅵ掘削前（南から）



写真24 波板状遺構Ⅱ～Ⅵ掘削後（南から）



写真25 波板状遺構Ⅱ・Ⅲ掘削前（北から）



写真26 波板状遺構Ⅲ～Ⅵ掘削後（北から）



写真27 波板状遺構IV掘削後（北から）



写真28 波板状遺構VII掘削後（南から）



写真29 波板状遺構III南北土層中央部分



写真30 波板状遺構III南北土層南端部分

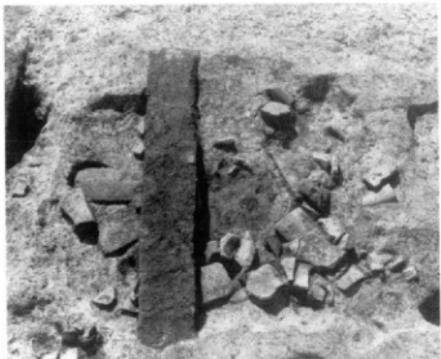


写真31 SX015検出状況（東から）



写真32 SX015上面（東から）



写真33 SX015中央筒部分掘削後（北から）



写真34 SX015中央筒部分（北から）



写真35 SX015筒部分木質除去後（東から）

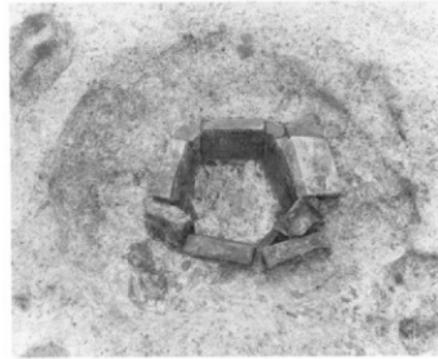


写真36 SX015瓦積み除去後（東から）

第三章 II・III区の調査

1. 調査の概要

II・III区は第18次発掘調査対象地内の西側に位置し、調査面積は2750m²である。当初、II区1750m²を調査した。その結果、遺構密度が予想以上に高く、II区北側にも遺跡が続いていることが確実になった。そのため、この部分1000m²を拡張しIII区とした。II・III区は連続しているので、遺構番号を連続してつけ、報告もまとめて行うことにする。

調査ではまず重機を使用して表土を除去した。層序の詳細については次項で述べるが、遺構検出面までの深さは東側で約40cm、西側で約180cmであり、調査区のほぼ中央に北西方向に軸をとる比高差80cmほどの段差が存在する。調査区東側の段差上には建物の基礎が格子状にはいる。

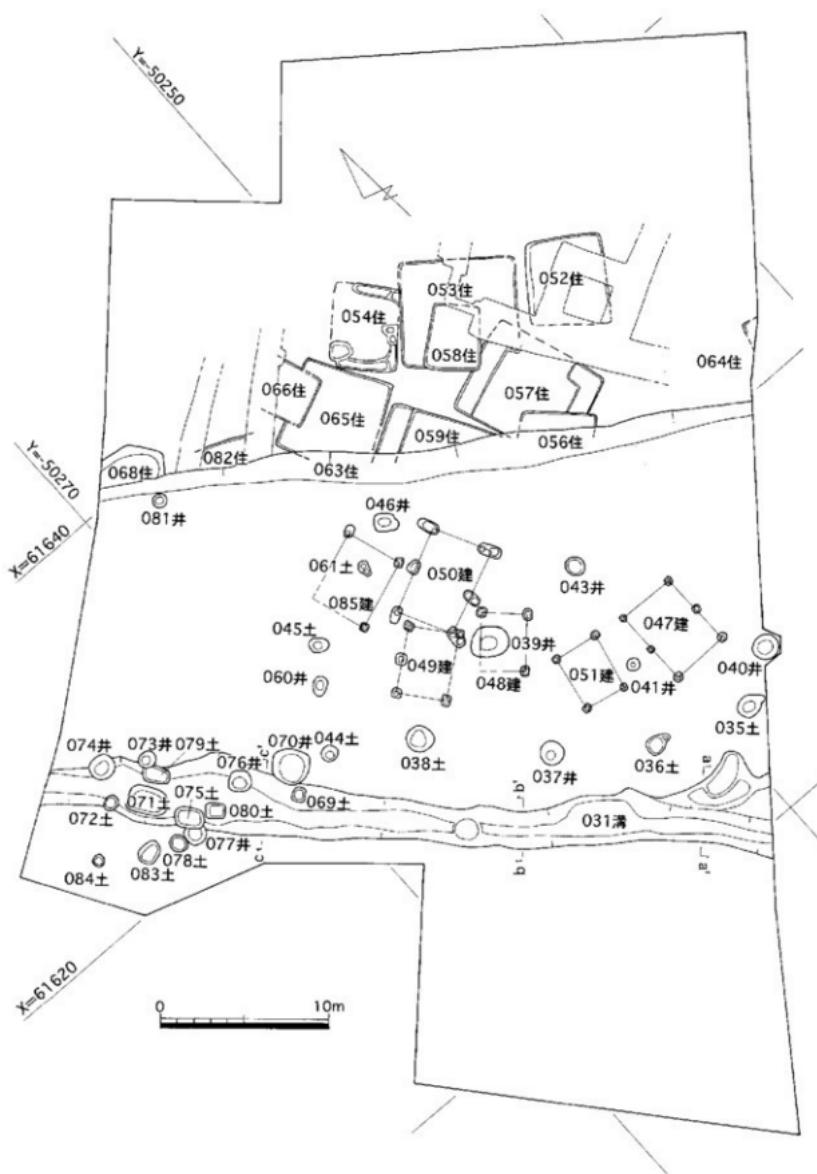
II・III区の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡を検出した（第41図）。東側の段差上では堅穴住居跡13軒を検出した。地形の削平および搅乱による破壊を受け、遺存状況はよくない。西側の段差下では掘立柱建物6棟、井戸13基、土壙15基、溝1条を検出した。古墳時代中期のS C 0 5 8号堅穴住居跡では、滑石製白玉、その未製品、滑石原石が出土し、滑石製品の製作工房であることを確認した。また、調査区西寄りのS D 0 3 1号溝周辺では、遺構検出面上に古墳時代から古代にかけての遺物包含層が堆積していた。包含層については調査期間の割約から重機で剥ぎ、その後遺物をその中から採集した。土師器・須恵器とともに半瓦・埠が出土している。

II・III区の調査ではコンテナ約200箱相当の遺物が出土した。主な出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器であり、ほかに陶質土器、古代の平瓦・埠、木製品、旧石器が少量出土している。木製品は整理作業中に紛失してしまい、現場作業中に実測していた数点を除いて報告していない。

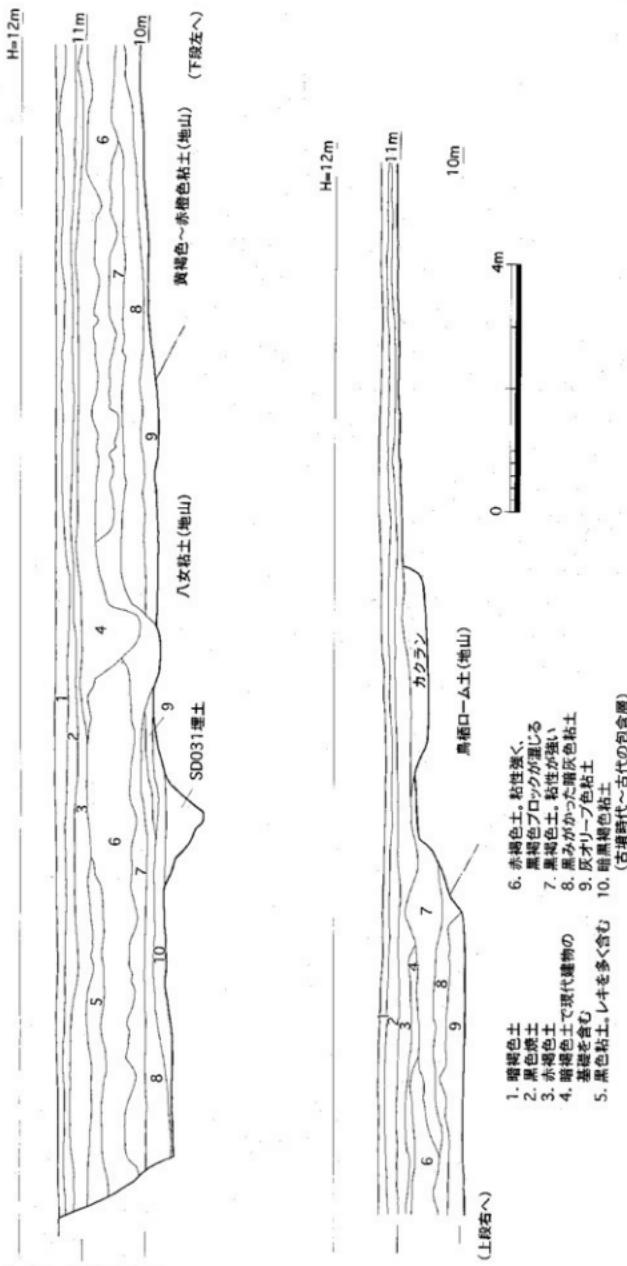
2. 基本層序

第42図はIII区北壁の上層図である。調査区の現況は九州管区警察学校の敷地で、標高11~12mの平坦な地形である。現地表下0.9~1.4mまで（1~7層）は盛土である。1~5層は現在の警察学校建設時の、6~7層は近代以降の造成部分である。8~9層は水田耕作土上で、20~50cmの厚さで堆積する。中世の李朝白磁が1点出土したが、ほかに時期を示す遺物がなく、その詳細な時期は明らかでない。その下、調査区西側に10層の暗黒褐色粘土がうすく堆積する。これは古墳時代から古代にかけての遺物包含層である。複数の井戸の埋土上面にも包含層が沈み込んでいるのを確認したので、この包含層の堆積は地形の削平を受ける前の1次的なものと考えるのが妥当であろう。

その下が遺構検出面であり、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構が検出された。中央に比高差約80cmの段差が存在する。段差上の遺構の遺存状態は悪く、地形はかなりの削平を受けている。本来は東側の丘陵部から西側の丘陵部に向かってなだらかに傾斜する地形であったものを、大規模な土木工事によって削平している。台地の削平を伴う土地造成は、その上面に水田耕作土が乗ることから、水田を造るためのものと考えられる。地山は、段差の東側の高い部分が鳥栖ローム、西側の段差下に鳥栖ロームから八女粘土への漸移層である黄褐色~赤橙色の粘土を部分的に挟み、その西側は灰白色で水を透過させにくい八女粘土である。



第41図 II・III区遺構配置図 (1/300)



第42図 北壁土層図 (1/80)

3. 遺構と遺物

1) 壊穴住居跡

調査区東側の段差上において、壊穴住居跡が集中・重複して13軒検出された。床面までの深さが浅いものや、貼床のみ残存する状態のものが多く、地形はかなりの削平を受けている。また、建物基礎による搅乱が縦横に走り、遺存状態をさらに悪くしている。住居群の西側は段差部分で大きく削平され完全に消失するが、住居分布域が続いていることは確実であろう。住居群の東側ではピットが少数検出されたのみで遺構密度は非常に低い。こちら側に台地の尾根が通っているので、ここも旧地形が削平されている可能性が高く、住居群が続いていると予想される。

S C 0 5 2号壊穴住居跡（第43図）

調査区東側の段差上に集中する住居跡群のうち南側に位置する。擾乱により中央部が大きくL字形に破壊されている。北壁は全長4.4m、西壁は南端が削られており残存長4.1mを測る。南壁は擾乱により完全に消失するが、正方形あるいはやや南北に長い方形プランを呈すると考えられる。床面までの深さは20~30cmで、西壁沿いに床面より10cm程度高い段が20cm幅で設けられている。4本柱の住居で、検出できた主柱穴P 1~P 3は深さ40~55cmを測る。北西隅で完形の椀、北東隅で壺が出土した。出土遺物より古墳時代中期後半~後期初頭に位置付けられよう。

出土遺物（第45図）

コンテナ3箱の遺物が出土した。土師器の椀・壺・壺片が多く、須恵器は2点のみ出土している。土器片はほとんど接合せず、個体の半分以上が遺存するのは完形品の椀1点のみである。

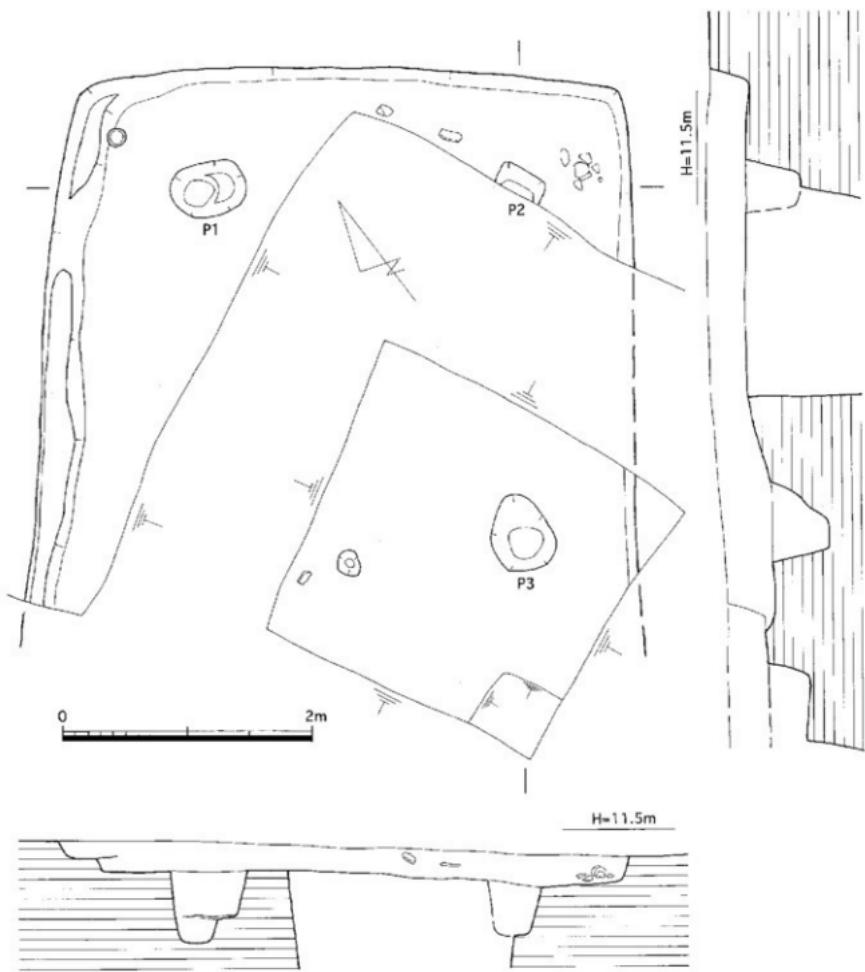
1は壺である。口縁部は短く直線的に外傾し、端部は丸くおさめる。復元口径14.4cm。磨滅が著しく調整は不明。2・3は椀である。2は完形品で、口径13.2cm、器高4.9cmを測る。外面はヘラ削り、内面は平滑にナデ調整を施す。3は復元口径13.8cm、器高4.7cmを測る。4は壺の口縁部である。復元口径24.4cm。口縁部は直立し、外面に粗い縦刷毛を施す。5は壺の把手である。6は須恵器の壺の胴部片である。外面には平行叩き、内面には同心円文の当て具痕がうすく残る。

S C 0 5 3号壊穴住居跡（第44図）

S C 0 5 2の北西に向きを揃えて隣接する。S C 0 5 4を切り、S C 0 5 8に切られる。また、南隅でS C 0 5 7と切り合うが、先後関係は確認できなかった。正方形プランを早し、擾乱により隅が削平されているが、復元長で北西壁4.7m、北東壁5.2mを測る。床面までの深さは10cmに満たず、とくに南隅は削平が床面下まで達しており壁溝も検出できなかった。そのため、S C 0 5 7との先後関係は不明である。主柱穴はP 1、P 2を検出した。深さは40cm程度である。南西側の2本は深い搅乱により完全に消失しているが、4本柱の住居であろう。住居の周囲には北東壁中央を除いて深さ5~10cmの壁溝がめぐる。住居北東壁側、主柱穴のすぐ外に、床面を区切るように高さ3~5cmの高まりが帯状に残っている。壁沿いに高坏が6点程度出土し、出土遺物のうち高坏の割合が非常に高い点が注目される。出土遺物より古墳時代前期前半に位置付けられる。

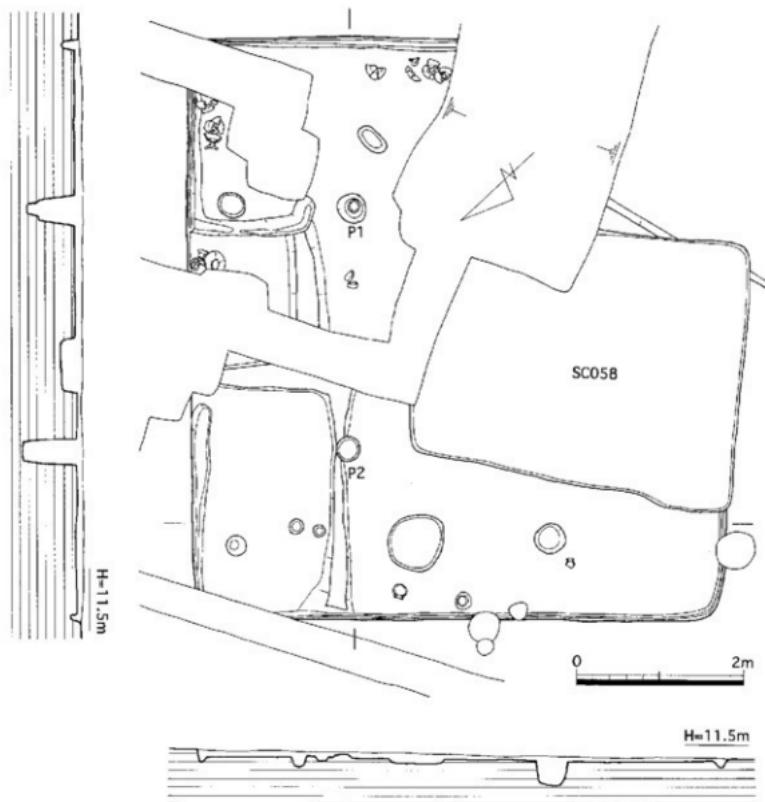
出土遺物（第45・46図）

コンテナ5箱の遺物が出土した。土師器がほとんどで須恵器はなく、弥生土器が少量混入する。高坏が多く出土しているのが特徴である。7は壺の口縁部である。復元口径14.0cm。口縁部は直線的に外傾する。体部外面に刷毛目、内面に削りを施す。8は壺である。復元口径13.0cm、器高15.3cmを測る。頸部のしまりは緩く、口縁部は直線的に外傾する。外面は体部上半を粗い縦刷毛、下半を細



第43図 SC052実測図 (1/40)

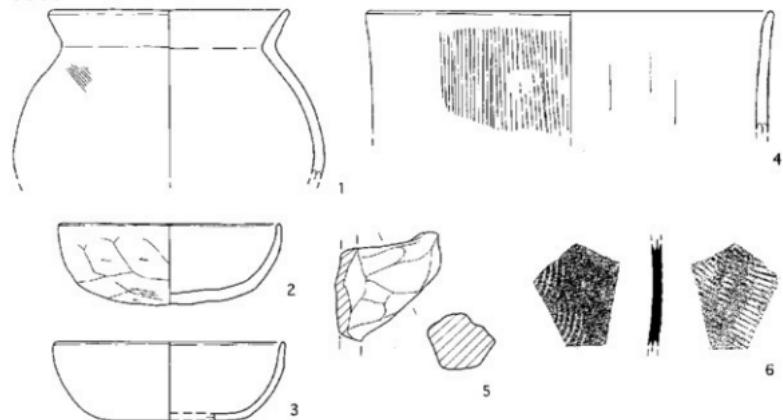
かな右下がりの刷毛目で調整する。内面は磨滅するが削りの痕跡はない。9は広口壺の口縁部である。復元口径21.4cmを測り、外湾して開く。内面に刷毛目が明瞭に残り、灰白色を呈する。粘床内から出土した。10は二重口縁壺の口縁部である。復元口径14.6cmを測り、屈曲部は稜が明確である。11は壺である。頸部がしまり胴部は張る。胴部最大径20.6m、頭部径10.4cmを測る。10の二重口縁壺と同一個体か。12は脚付壺である。球形の体部を持ち、ハの字形の短い脚がつく。復元底径7.6cmを測る。13は小型の壺である。内面は下半を削り、上半は指でなでる。14・15は小型丸底壺である。14



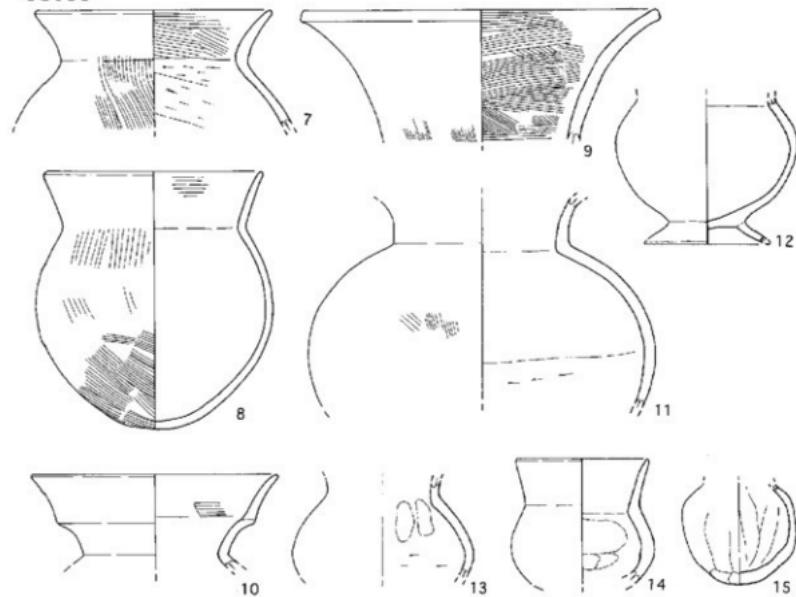
第44図 SC053実測図 (1/60)

は口径と胴部径がほぼ等しく、口縁部が外傾気味に立ち上がる。磨滅が著しいが内面は指で整形する。壁溝内から出土した。15は球形に近い胴部で頸部はしまる。調整は雑である。16~25は高坏である。坏部はやや外反気味に開くものと直線的に開くものがある。脚柱は短く中ほどで膨らみ、裾部で緩やかに折れ外に開く。坏と脚の接合部は坏底の粘土が突出している点で共通している。坏底に粘土を充填して脚の筒に押し込む接合法であろうか。24は小型の高坏である。坏部の屈曲は不明瞭で脚部はハの字に開く。口径11.6cm、器高8.6cmを測る。25は直線的に大きく開く脚部で、内面下半は刷毛目で調整する。

SC052

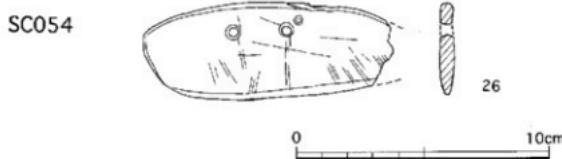
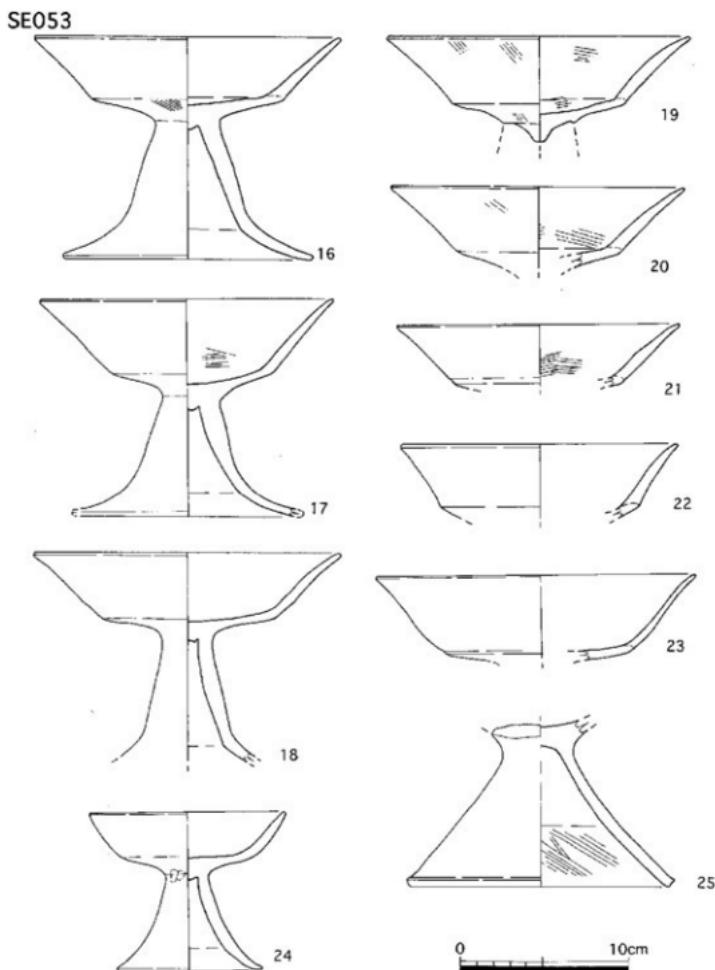


SC053



0 10cm

第45図 SC052・053出土遺物実測図 (1/3)



第46図 SC053・054出土遺物実測図 (1/3、26は1/2)

S C 0 5 4 号竪穴住居跡（第47図）

S C 0 5 3 の北東側に位置する住居で、貼床のみ残存していた。S C 0 5 3 に切られる。貼床は壁沿いにコの字形に検出され、その形状から方形住居である。西壁4.0m、南壁5.0mに復元できる。貼床は地山の烏柏ロームを埋め戻したもので、赤褐色で汚れている。深さは20~45cmを測る。南壁沿いの中央で柱穴を検出した。東北壁の貼床から石包丁が出土した。

出土遺物（第46図）

貼床のみの検出で遺存状況が悪く、土師器が20点程度と石包丁1点が出土したのみである。土師器には高壺、壺口縁部の小片が含まれるが図化できない。26は石包丁である。先端の一方が欠損し、残存長9.8cm、幅3.8cmを測る。紐を通す穴を2つ開けるが、右の穴の外側に穿孔しかけて途中で止めた穴がある。位置取りに問題があったためか。

S C 0 5 6 号竪穴住居跡（第47図）

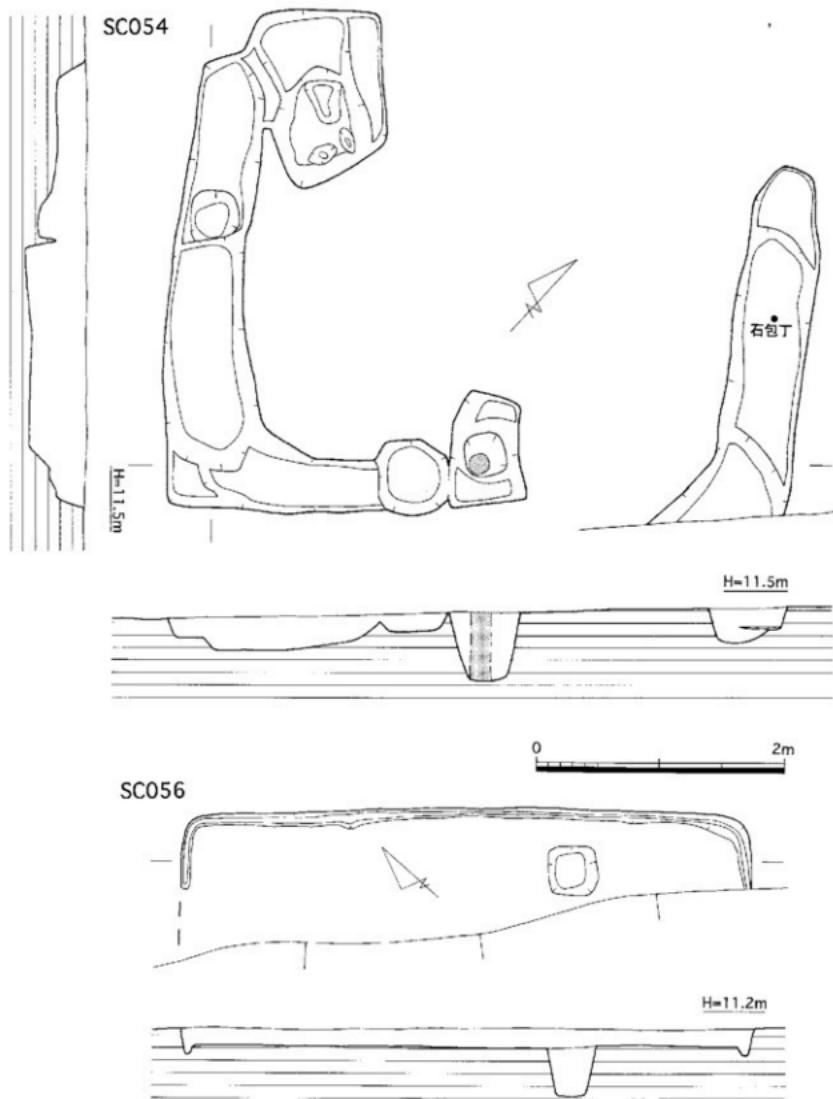
竪穴住居群の南端に位置する。大半が段差にかかるて消失し、東北壁沿いがわずかに残る。東北壁の長さは4.5m、床面までの深さは15cm程度を測り、深さ10cm弱の塗溝をもつ。S C 0 5 7 を切る。土器片15点ほどが出土したにとどまり、時期は特定できない。図化できる遺物はない。

S C 0 5 7 号竪穴住居跡（第48図）

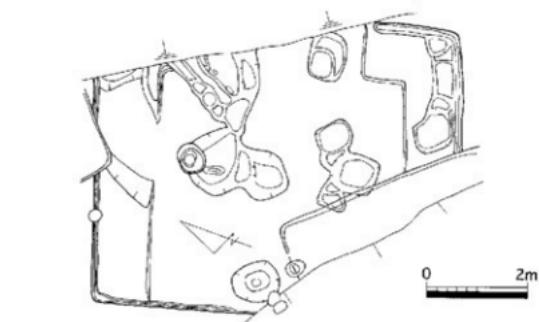
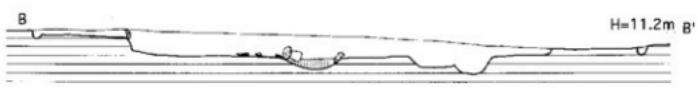
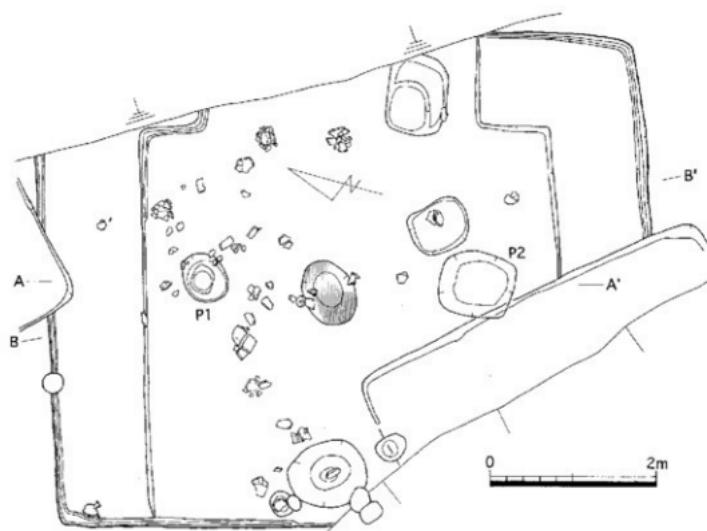
S C 0 5 3 の南側で検出された。S C 0 5 6、S C 0 5 8 に切られる。S C 0 5 3 とも切り合が先後関係は不明。また、北東隅と南西隅は搅乱・削平により消失する。方形プランで、長軸4.9m、短軸4.0m、床面までの深さ20cmを測る。南北の両壁沿いにL字形のベッド状遺構が設けられており、床向からの高さは約10cmである。全体に浅く、とくに南側ではベッド状遺構が検出段階すでに削られていた。周囲の壁沿いには浅い壁溝をめぐらせる。主柱穴はP 1、P 2 の2本であろう。住居中央で浅い炉跡を検出した。住居北半を中心として、床面直上で多くの土器が出土した。出土遺物から弥生時代終末に位置付けられる。

出土遺物（第49・50図）

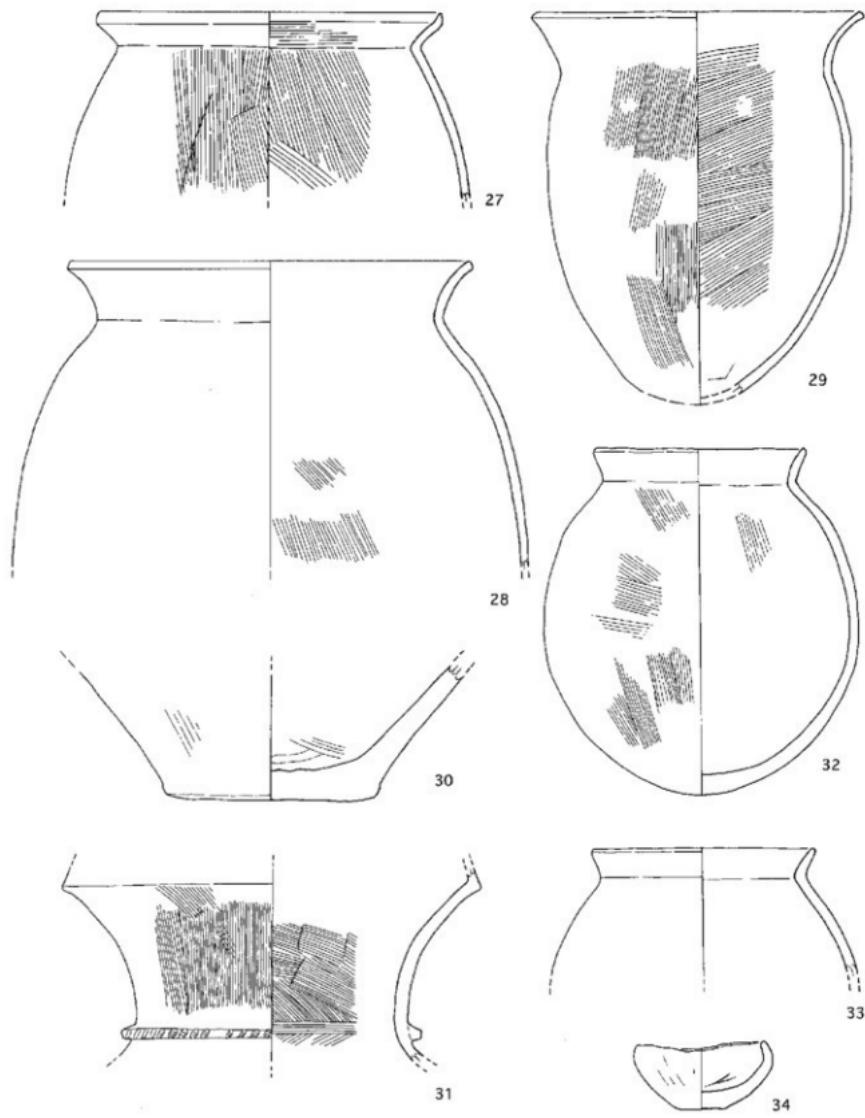
コンテナ7箱分の赤土器、古式土師器が出土した。27~29は甕である。27はく字状口縁で縁部が内溝する。復元口径20.6cmを測る。28は大型の甕で、口径24.0cmを測る。磨滅が著しいが内面は刷毛目を施す。口縁は外反し端部は面をもつ。器壁が非常に薄く作られている。29は小型甕でほぼ完存する。口径19.6cm、器高23.4cmを測る。薄手のつくりで外面に細かな縦刷毛、内面に横刷毛を施す。内面に黒漆を有し、外面下半には煤がうすく付着する。30は複合口縁甕の底部である。底径12.8cmを測る。31は複合口縁甕の口縁部である。頸部に刻目突蒂を1条巡らしている。口径24.8cmを測る。32・33は甕である。32はほぼ完存し、口径12.6cm、器高20.6cm、胴部最大径18.6cmを測る。体部は球形で、口縁部が短く直立する。内外面とも細かな刷毛目を施す。33は口径13.2cmを測り、口縁部は短く外に開く。磨滅が激しく調整は不明。34は手づくね土器である。口径7.7cm、器高4.1cmを測る。手づくねで成形した後、ヘラ状工具で表面をなめらかに仕上げる。35~37は器台である。35は完形品で受け部径13.9cm、器高20.3cm、底径15.4cmを測る。36は受け部径13.9cm、器高19.6cm、底径14.4cmを測る。外面は縦刷毛の後下間に叩きを施す。37は底径16.6cmを測る。内外面ともナデを施す。38・39は高壺の脚部である。長くまっすぐな筒状を呈する。38は胎土が精緻で器壁は一定して薄い。39は透かし孔があり、器壺は上にいくほど厚く内部にしほり痕をもつ。



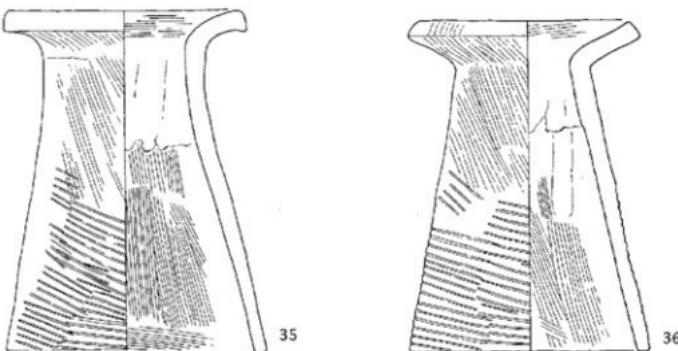
第47図 SC054・056実測区 (1/40)



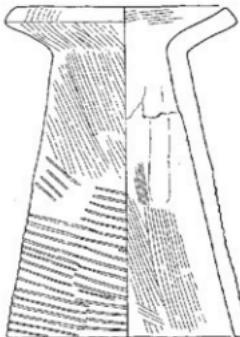
第48図 SC057実測図 (1/60)、同貼床除去後実測図 (1/100)



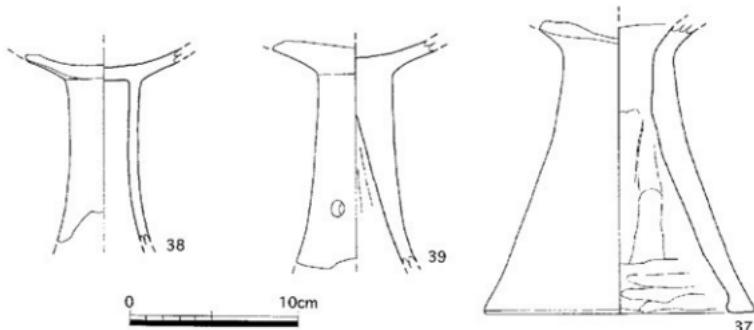
第49図 SC 057出土遺物実測図① (1/3)



35



36



38

39

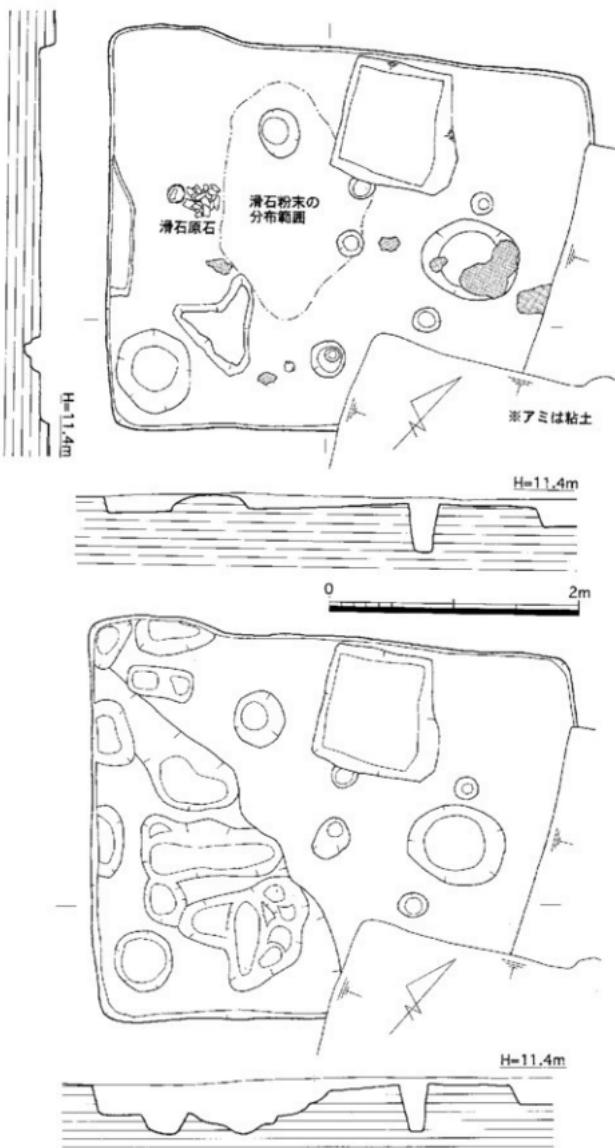
37

第50図 SC 057出土遺物実測図②(1/3)

S C 0 5 8 号竪穴住居跡 (第51図)

竪穴住居群の中央に位置し、SC 053・SC 057を切っている。長方形プランを呈し、東壁から東南隅にかけて搅乱により破壊され、北壁3.8m、西壁3.2m、床面までの深さ20cm弱を測る。柱穴をいくつか検出したが、主柱穴は不明である。住居の東寄りに焼土・黄褐色粘土が分布しており、その下の小土壤は炉跡であろうか。西壁の中央に一段高くしたステップを設けている。住居の西側半分には貼り床を施し、深いところで25cmに達する。出土遺物より古墳時代中期末に位置付けられる。

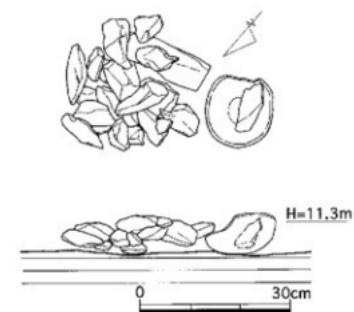
特筆すべきはこの遺構が滑石工房であったことである。埋土中から大量の滑石製白玉およびその未製品、チップが出土した。住居床面の中央から西寄りにかけて滑石の粉末が分布しており、その西側には滑石の原石20個がまとめて置かれた状況で出土した(第52図、第2表)。そのうちの1つは碗に入れられていた。その南側には黄褐色土を台状に盛り固めた部分があり、作業台として使用したものと推定する。滑石や作業台の配置より、建物の中央からやや西寄りにかけての位置に腰を下ろして、滑石製品の製作をおこなったのであろう。面積が小さいこと、主たる生活関連器種である壺・壺の出土が少ない点から、住居としては使用せず、滑石工房としての用途に限って使用されたものと考える。



第51図 SC058実測図、同貼床除去後実測図(1/40)

第2表 SC058出土滑石原石計測表

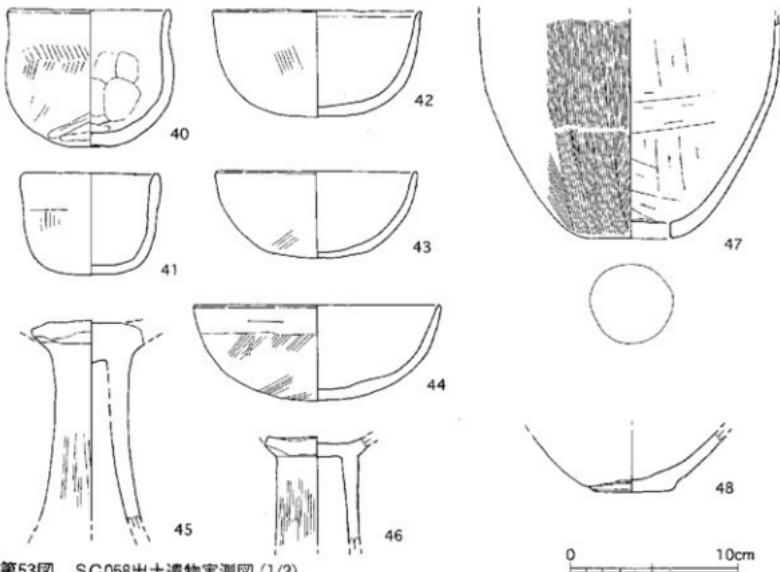
	重量	長さ	幅	厚み		重量	長さ	幅	厚み
原石1	180	10.5	5.5	2.0	原石11	110	9.5	3.0	2.5
原石2	100	7.0	3.0	2.3	原石12	10	3.0	2.8	1.0
原石3	50	8.7	3.6	1.0	原石13	110	6.5	5.5	2.8
原石4	130	6.5	4.5	3.3	原石14	50	7.0	5.5	1.0
原石5	70	7.0	3.5	2.0	原石15	150	6.8	3.0	2.5
原石6	190	7.0	4.0	3.0	原石16	60	5.5	3.8	2.0
原石7	260	6.5	6.0	3.4	原石17	40	3.5	3.8	1.6
原石8	200	9.5	4.0	3.0	原石18	340	10.0	9.0	2.2
原石9	200	9.5	4.0	3.4	原石19	720	17.1	6.2	3.2
原石10	20	5.0	2.5	1.5	原石20	140	10.0	4.6	2.5



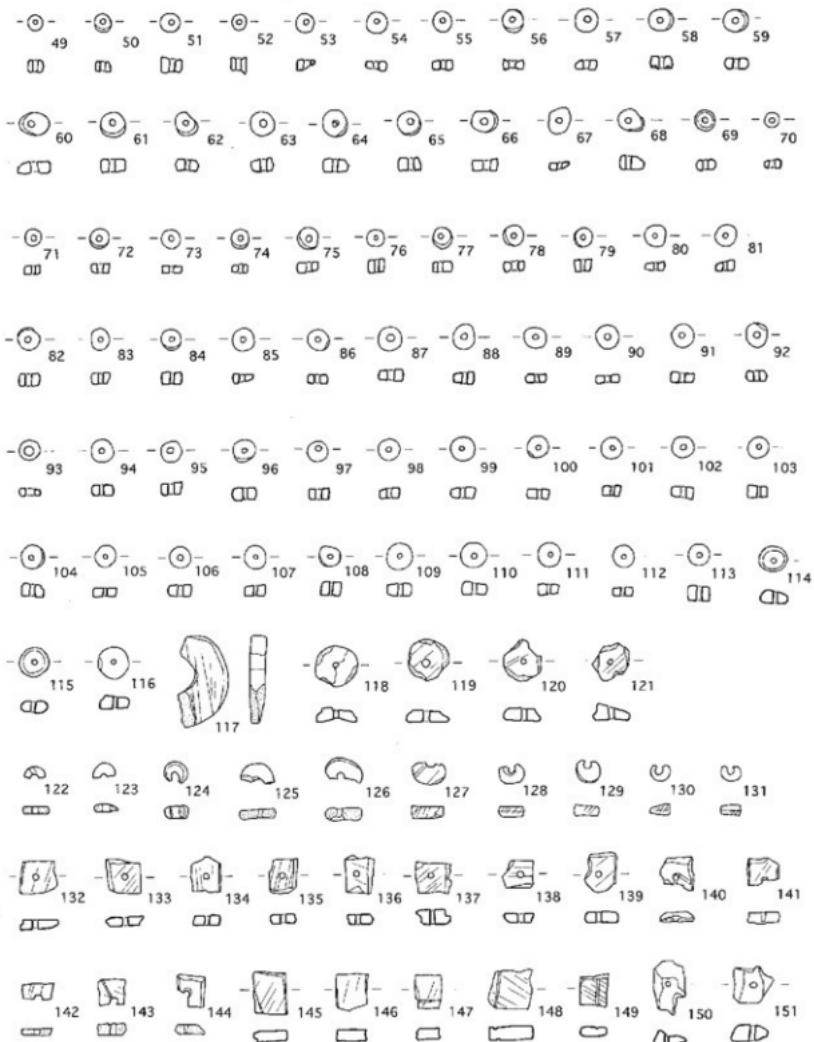
第52図 SC058滑石原石の出土状況 (1/10)

出土土器 (第53図)

コンテナ2箱の土師器が出土した。遺物が一定量出土しているにも関わらず、壺・壺の良好な破片がない。40は小型の壺である。口径9.6cm、器高8.2cmを測る。外面は上半に粗い刷毛目を施し、下半をヘラ状工具で削る。内面は指で整形する。41は小型の鉢である。平坦な底から強く屈曲してまっすぐ立ち上がる。復元口径8.2cm、器高6.1cmを測る。42~44は碗である。口径・器高は42が12.4cm・6.3cm、43が12.0cm・5.2cm、44が14.6cm・5.7cmを測る。42は深い器形で口縁端部は外に短く折れる。



第53図 SC058出土遺物実測図 (1/3)



0 2cm

第54図 SC 058出土滑石製品実測図 (1/1)

44はほぼ完存し、外面は刷毛目の後口縁部を横ナデ、内面はナデで調整する。椀の中に滑石原石が入れられていた。45・46は高杯の脚部である。脚柱は長い簡状を呈し、外面に継刷毛を施す。47は単孔の甌である。底径5.6cmを測る。外面は細かい継刷毛、内面は雑な削りを施す。48は甌の底部である。平底で底径5.3cmを測る。

滑石製品（第54図）

滑石製白玉、未製品、原石およびチップが相当量出土した。その製作工程を復元できる良好な資料である。その詳細についてはまとめにおいて後述したい。

49～116は白玉である。製品は68点すべて固化した。径3～5mm、厚さ1.5～3mmを測る。117は勾玉の未製品である。両面を研磨し、側面も研磨の途中である。118～151は白玉製作工程の各段階の未製品、欠損品である。量が多いため代表的なものを数点ずつ示す。118～121は側面を研磨整形する段階の未製品である。122～131は円形、穿孔の欠損品である。132～139は方形チップを穿孔した段階の未製品である。140～144は方形、穿孔の欠損品である。145～149は方形チップである。147～149には筋目が入る。150・151は板状に研磨していない不整形チップに穿孔したものである。固化した事例のほかに、滑石原石20点、製作工程で出た屑約600gが出土した。

S C 0 5 9号竪穴住居跡（第55図）

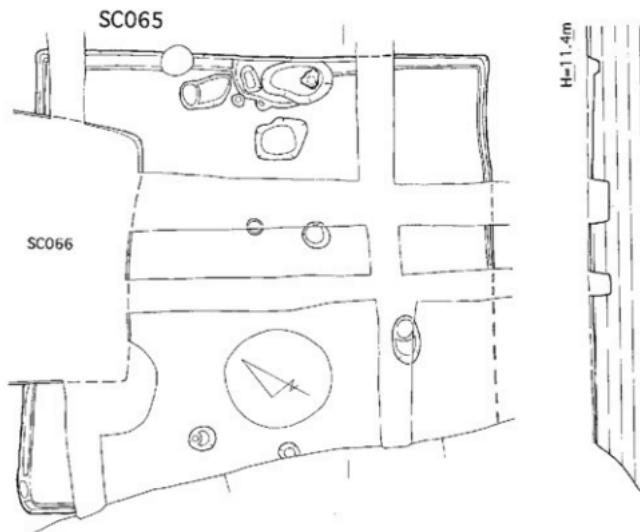
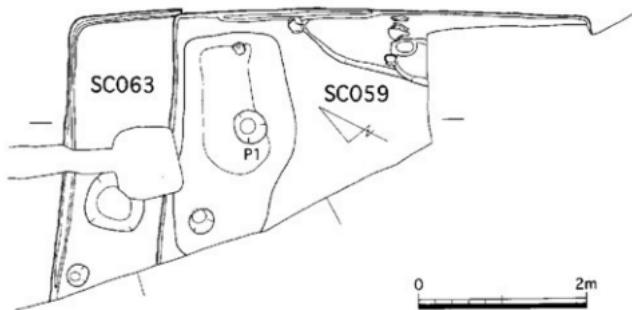
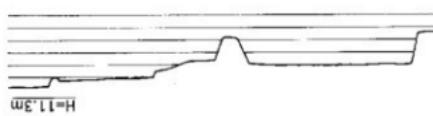
S C 0 5 7の西側に隣接し、住居の東壁と北壁の中程まで、面積にして全体の1／3が残存し、残りは段差にかかり消失する。S C 0 6 3を切る。東壁が全長5.0m、北壁の残存長3.0m、床面までの深さ20cmを測る。床面は平坦ではなく、壁際が5cmほど低くなっている。P 1を主柱穴の1つとする4本柱建物であろう。50cm程度の深い貼床を確認した。出土遺物より弥生時代後期後半～終末に位置付けられる。

出土遺物（第56図）

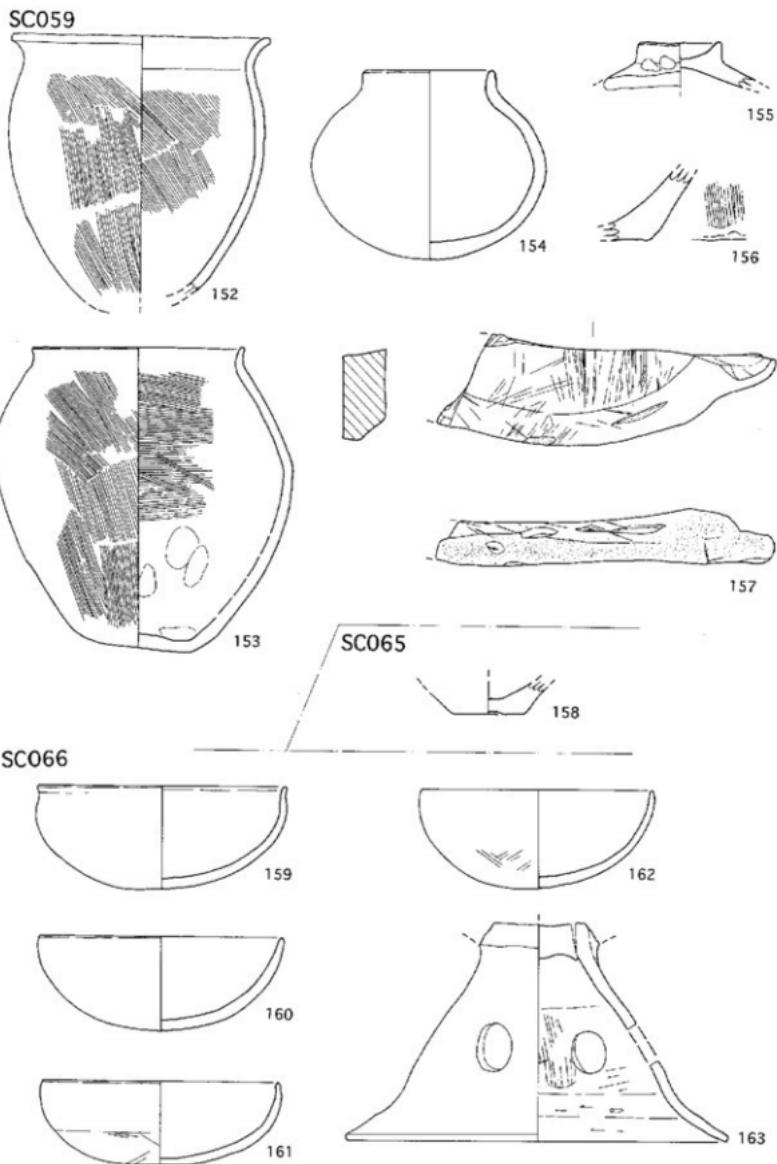
コンテナ2箱の遺物が出土した。152は小型の甌である。ほぼ完存し口徑15.2cm、残高15.4cmを測る。口縁はゆるく外反し端部は角張る。内外面ともに細かい刷毛目で調整し、橙色を呈する。153は無頬甌である。ほぼ完存し口徑12.6cm、器高18.1cmを測る。ひずみが大きい。平底で、外面は細かな右下がりあるいは継方向の刷毛目で調整した後、口縁部を横ナデする。内面は上半に細かな横刷毛を施し下半は指で整える。橙色を呈し、底部付近に黒斑を有する。154は甌である。復元口徑7.8cm、器高11.3cm、胴部最大径14.0cmを測る。丸底で体部は横長の偏球形である。器壁は厚く、磨滅により調整は不明。橙色を呈する。155は蓋であろう。156は平底の底部片である。157は砥石である。細長い弧状を呈したものが半ばあたりで折れた状態である。側面の一方は丸みを帯びた自然面であるが、残りの面はすべて研磨し、上下の面は特に平滑である。研ぎ痕は上の面に集中する。形状と研ぎ痕の方向から、当初円形に近い大きな砥石であったものが割れて、その割れ口を研磨し再利用したものと推定する。

S C 0 6 3号竪穴住居跡（第55図）

S C 0 5 9に切られた状態で検出した。方形住居で北壁3.4m、東壁1.3mが残存する。床面までの深さは3cmで、上部が削平を受けている。深さ5cm弱の周溝をめぐらし、30cm程度の貼床を施す。遺物は出土しなかった。



第55図 SC059・063・065実測図 (1/60)



第56図 SC059・065・066出土遺物実測図(1/3)

SC 064号竪穴住居跡（第57図）

竪穴住居の集中する部分から南東に10m離れた調査区の南東端に位置する。床面まで5cm以下と浅く、搅乱による破壊も受けるが、形状より方形住居のコーナーと考えられる。浅い周溝がめぐる。遺物は出土しなかった。

SC 065号竪穴住居跡（第55図）

SC 054の西に隣接する。SC 066に切られ、西壁は段差にかかり消失する。床面にも縱横に搅乱の溝が入る。方形プランをなし、東壁5.4m、北壁5.6mを測る。埋土は黒褐色土で、床面までの深さは10cmに満たない。幅広で浅い周溝が周囲を巡り、東壁中央に土壌状の掘り込みがある。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第56図）

コンテナ1箱の土器が出土した。弥生土器が主で土師器も含まれるようだ。158は壺の底部か。底径4.2cmを測り底の中央がわずかに窪む。胎土は砂粒を多く含み、橙色を呈する。

SC 066号竪穴住居跡（第57図）

SC 065の北西側で検出した。SC 065を切っている。方形プランをなすが、北西側が搅乱により消失、遺存部分も格子状の現代建物基礎によって破壊される。南壁の復元長3.0m、東壁の残存長2.5mを測り、本遺跡で検出した住居群のなかではSC 058とともに著しく小さい。東壁側の中央で焼土が充填された炉跡を検出し、焼土内上層で大型壺の胴部と高壺の脚部が出土した。床面上にピットが点在するが、搅乱が激しいため、どれが主柱穴になるのか分からぬ。出土遺物より古墳時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物（第56図）

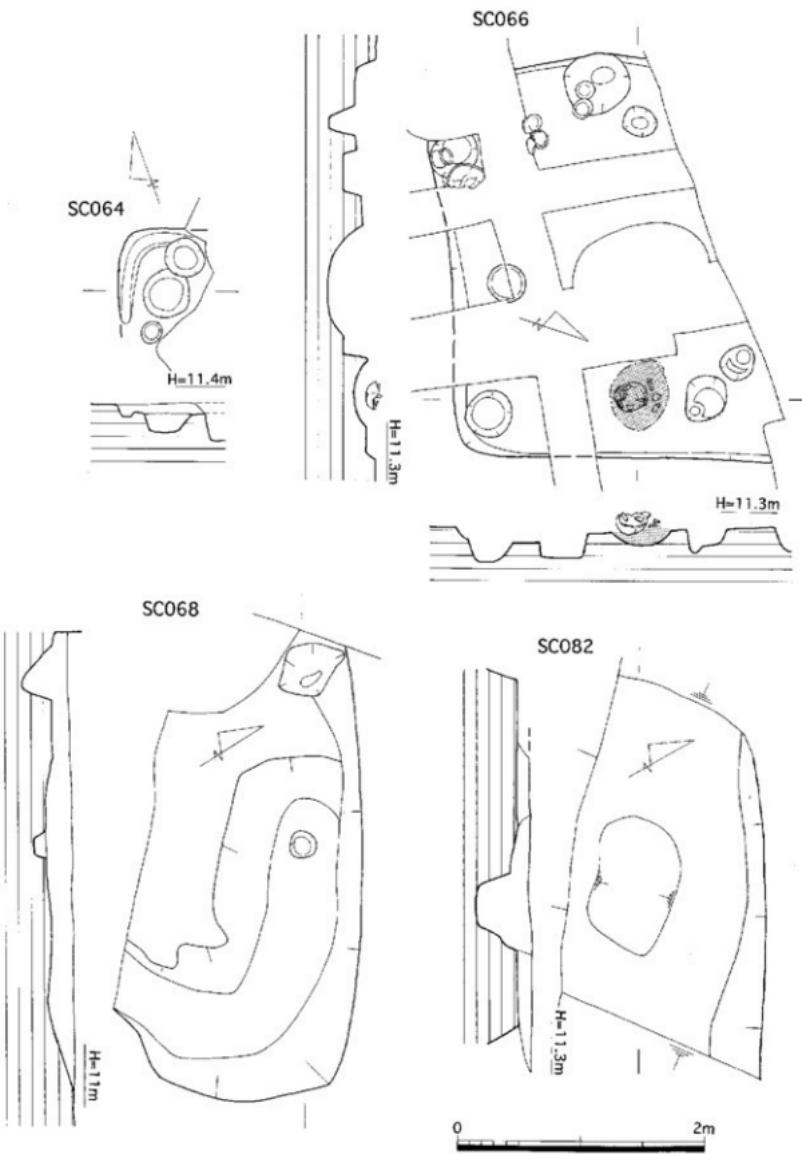
コンテナ2箱の土師器が出土した。須恵器は出土していない。159～162は碗である。159・162は完形品で、160・161も3/4が残存する。いずれも底が広く浅い器形である。口径・器高は159が14.8cm・6.2cm、160が14.6cm・5.6cm、161が14.2cm・5.0cm、162が14.0cm・5.9cmを測る。外面は削りのちナデ、内面はナデで調整する。163は高壺の脚部である。底径22.8cmを測る。背が低く中ほどで膨らみながらハの字に大きく開き、裾部で外に屈曲する。大きな透かし孔を4つ有する。外面はナデ、内面は刷毛目その後、裾部を削る。炉跡の焼土内から出土したが、被熱していない。炉跡焼土内出土の大型壺は、胴部のみの残存で傾きが正確に出せなかったので図化していないが、胴部は球形に近く、肉厚で内面は削る。

SC 068号竪穴住居跡（第57図）

調査区中央の段差上、調査区の北端で検出した。住居の床面は削平により完全に消失し、貼床のみを確認した。貼床の埋土は、他の竪穴住居の貼床と同じくよごれた赤褐色ローム土で、10～20cmの深さが残存する。住居のコーナーが確認でき、北壁の残存長は3.5mである。遺物は出土しなかった。

SC 082号竪穴住居跡（第57図）

SC 066の東側に位置する。地形の削平および搅乱により破壊され、北壁のみが一部確認できた。辺の残存長2.5m、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。



第57図 SC064・066・068・082実測図 (1/40)

2) 掘立柱建物

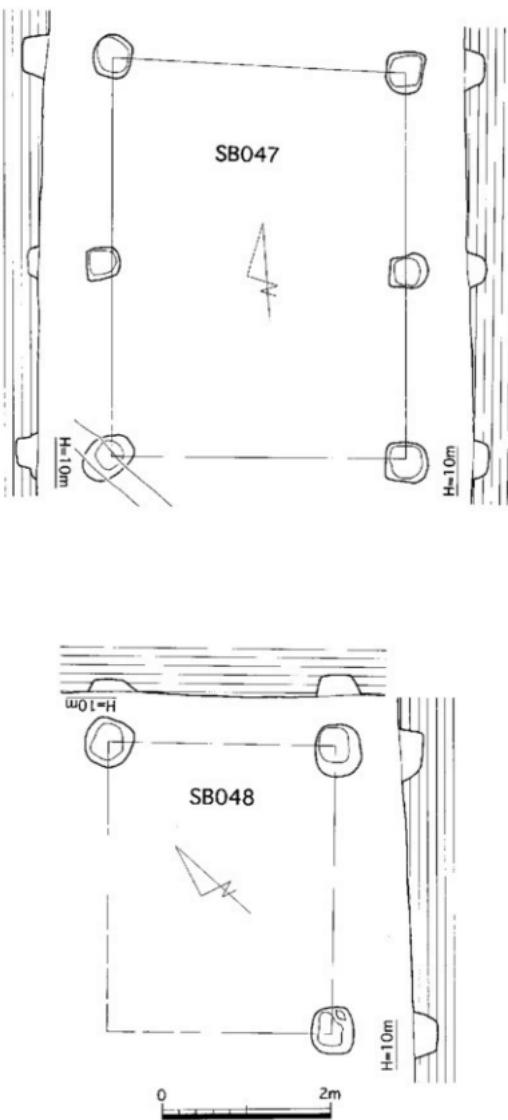
掘立柱建物は調査区中央の段差下で6棟検出した。全般に柱穴は浅く、旧地面は明らかに削平を受けている。1間×1間の4本柱の建物については竪穴住居の柱穴のみが削平を免れた可能性もなくはないが、掘立柱建物と考えるのが妥当であろう。

S B 0 4 7 号掘立柱建物 (第57図)

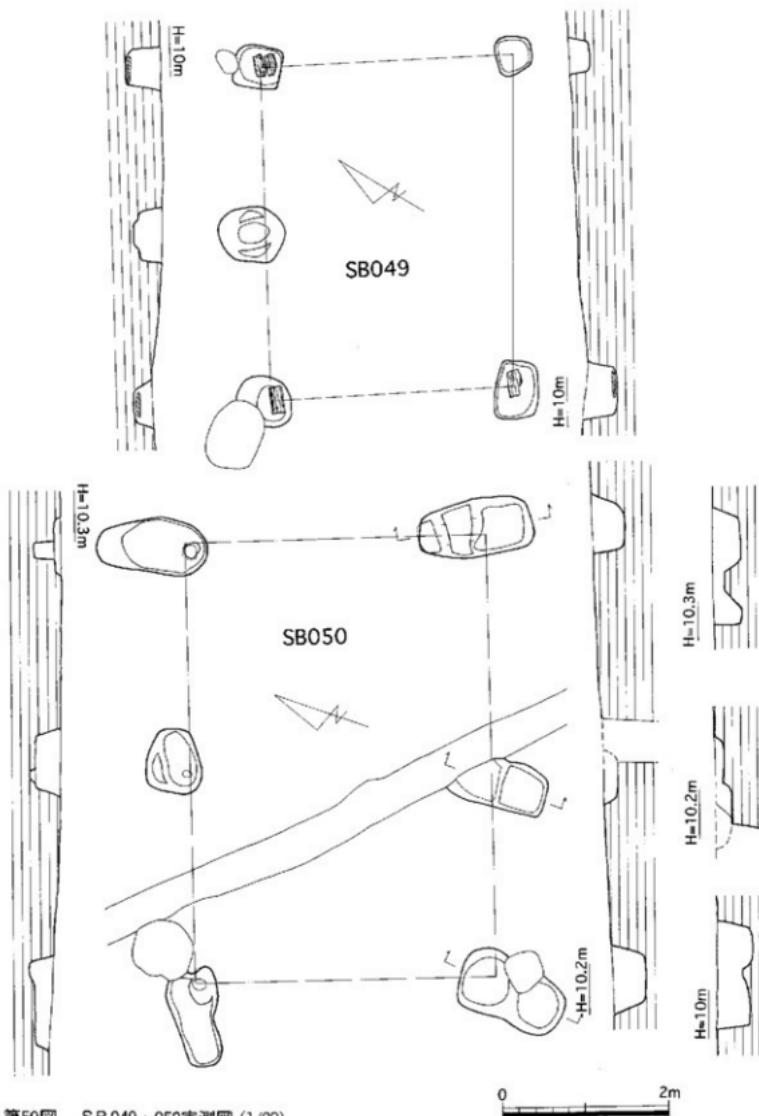
掘立柱建物群のうち、最も南東側で検出した。梁行1間(3.5m)、桁行2間(西側4.8m、東側4.7m)で、主軸方位はほぼ真北(N-3°-E)を向く。柱穴は隅丸方形で径40~60cm、深さ15~25cmを測る。弥生時代後期~終末頃の土器片が少量出土した。

S B 0 4 8 号掘立柱建物 (第58図)

S B 0 4 7 の北西5mのところで検出した。梁行1間(2.7m)、桁行1間(3.5m)の掘立柱建物と考えられるが、西隅の柱穴が検出できなかった。完全に削平されたか。主軸方位は49°東偏する。柱穴は隅丸方形で径50~60cm、深さ15~25cmを測り、相当削平を受けているようだ。13点の土器片、おそらく弥生土器が出土したが図化できるものはない。



第57図 SB 047・048実測図 (1/60)

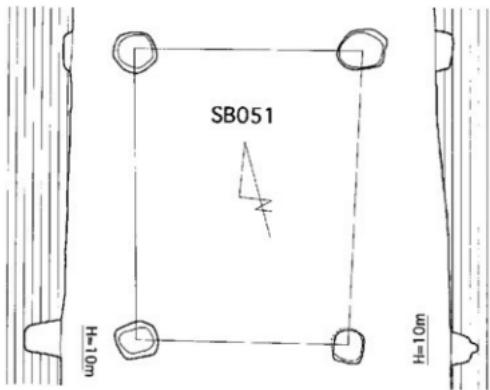


第59図 SB049・050実測図 (1/60)

S B 0 4 9 号掘立柱建物

(第59図)

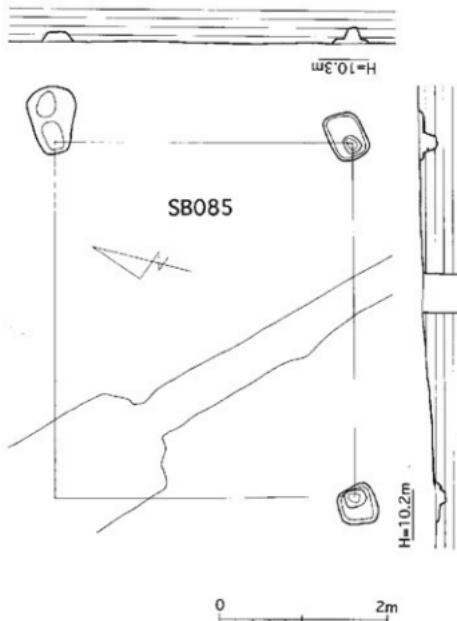
S B 0 4 8 の西側に隣接する。梁行1間 (3.0m)、桁行は西側2間 (4.0m)、東側1間 (4.0m) で、主軸方位は58° 東偏する。東隅の柱穴の切り合いから S B 0 5 0 よりも新しい。柱穴は方形または隅丸方形で径50~70cm、深さ25~40cmを測り、3つの柱穴から礎板が出土した。須恵器の壺胴部片が出土し、遺構の時期は古墳時代中期~後期か。



S B 0 5 0 号掘立柱建物

(第59図)

S B 0 4 9 の東側に隣接する。梁行1間 (3.6m)、桁行2間 (5.3m) で主軸方位は70° 東偏する。柱穴は長方形のものが多く、とくに南側の柱穴はいずれも下場が2つに分かれている。深さ20~40cmを測る。少量の弥生土器片が出土したが同化できるものはない。壺の肩で突帯を有する破片がある。



S B 0 5 1 号掘立柱建物

(第60図)

S B 0 4 7 の西隣で検出した。梁行1間 (北側2.7m、南側2.5m)、桁行1間 (3.5m) で主軸方位は15° 東偏する。柱穴は径40~50cm、深さ10~40cmを測る。弥生土器の小片が6点出土したが同化できるものはない。

第60図 SB 051・085実測図 (1/60)

S B 0 8 5 号掘立柱建物（第60図）

掘立柱建物群のうち、最も北に位置する。柱穴のひとつが搅乱によって消失しており、整理段階で新たに発見した。梁行1間（3.5m）、桁行1間（4.2m）で主軸方位は75°東偏する。柱穴は方形で径50～60cm、深さ10～20cmを測る。土器小片5点が出土したが、図化できない。

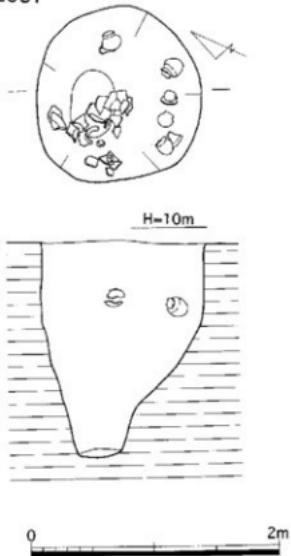
3) 井戸

調査区の西側の段差下からS D 0 3 1付近にかけての範囲で13基の井戸を検出した。井戸底面のレベルは一定しない。多くの井戸は八女粘土層を掘り抜いた深い井戸である。ほかに少數ながら鳥栖ローム土と八女粘土の境界部分の湧水点まで掘った浅めの井戸がある。

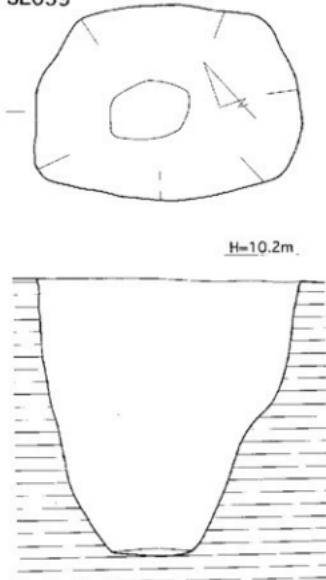
S E 0 3 7 号井戸（第61図）

S B 0 5 1の西側に位置する井戸である。検出面におけるプランは径1.3～1.4mの円形で、深さは170cmを測る。70cmの深さまでは垂直に掘り下げ、それ以下は狭まり底面では径0.4×0.5mの楕円形になる。検出面より100cm下の標高9.1mで湧水した。埋土は上層（60cm下まで）が粘性の強い黒色土でレンズ状に堆積、最上面には10cm程度の厚さで茶褐色土層がのる。この層は上面の包含層が沈み込んだものと考えられる。当井戸のほかにも、複数の井戸で遺構の最上面に同様の包含層の沈み込みが見られた。下層は粘性の強い黒色土で八女粘土ブロックを少量含む。上層において甕、高壺、小壺等がまとまって出土した。下層においても多量の土器片と木製品、自然木が出土した。出土遺物から古墳時代中期前半～中頃に位置付けられる。

SE037



SE039



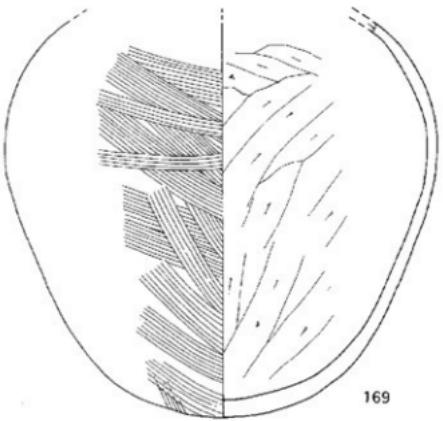
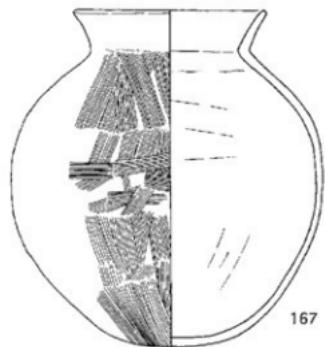
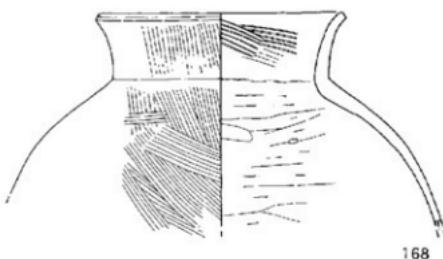
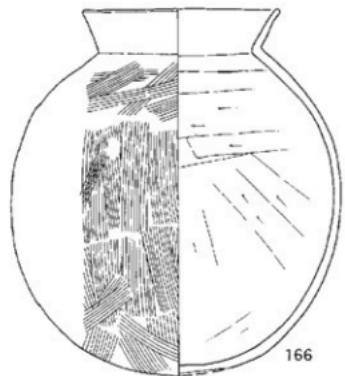
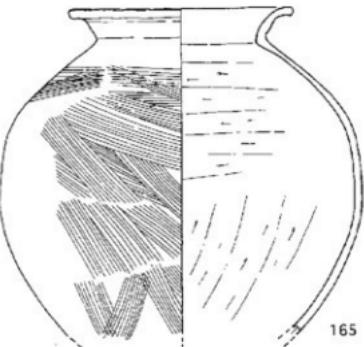
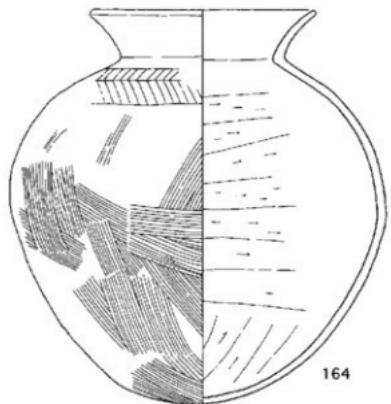
第61図 SE 037・039実測図 (1/40)

出土遺物（第62～65図）

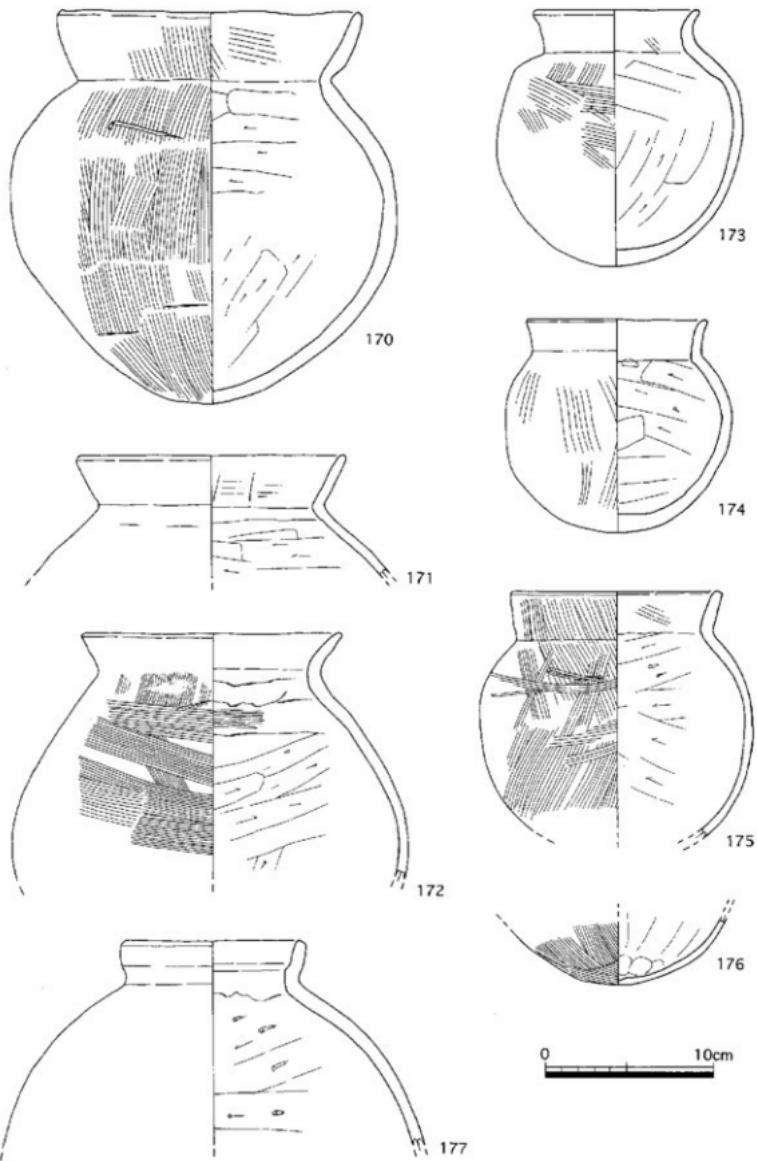
コンテナ11箱分の大量の土師器が出土し、完形品が多く存在する。初期須恵器も数点出土している。164～172は大型または中型の壺である。164はほぼ完存し口径18.0cm、器高31.3cm、胴部最大径29.7cmを測る。最大径が高い位置にある肩の張った器形で、口縁部は外反し端部は面をもつ。肩に矢羽根状の線刻を有する。165は復元口径18.0cmを測る。球形に近い体部で肩がすぼまり、短い口縁部は外湾する。外面は全体に刷毛目を施した後、肩より上を横ナデする。内面は上半を横に下半を縱に削る。166はほぼ完存し口径15.7cm、器高29.2cm、胴部最大径26.0cmを測る。体部はやや縱長の球形で、口縁部は直線的に外傾する。体部外面に刷毛目、内面に削りを施す。焼成時の器面の剥落がみられる。167は完形品で口径15.4cm、器高26.7cm、胴部最大径24.7cmを測る。球形の体部をもち、口縁部が直線的に開く。頸部の屈曲はなだらかである。体部外面は全体に刷毛目を施し、内面は削り。底部から最大径部にかけて煤が付着する。168は口径20.0cmを測る。頸部はしまり、口縁部は外反する。外面は全体に刷毛目を施した後、頸部を横ナデ。内面は体部を横方向の削り、口縁部は条痕状の横刷毛で頸部には接合痕が残る。169は168と同一個体であろう。最大径部が上位にある縱長の不整球形をなす。外面は横あるいは右下がりの刷毛目、内面は削りで調整する。170はほぼ完存し口径18.1cm、器高23.4cm、胴部最大径23.8cmを測る。最大径部はほぼ中央にあり、底部に向かってすぼまっている尖底にちかい。口縁部は内湾する。全体に凹凸が目立ち、口縁部は大きくひずむ。外面は全体を縱刷毛、内面は上半に横方向の、下半に縱方向の削りを施した後、口縁部を横ナデで仕上げる。外面は肩を中心として全体に煤が濃く付着する。171の口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。復元口径16.0cmを測る。172は口径15.4cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、頸部から最大径部へすらりと落ちていく撫で肩の器形を呈する。外面は縱刷毛のち横刷毛、内面は右上がりの削りで調整する。頸部内面には粘土絆積上げの痕跡が明瞭に残る。

173～176は小型の壺である。173は完形品で口径9.9cm、器高15.3cm、胴部最大径14.5cmを測る。外面は上半に粗い刷毛目を施し、下半はナデ。内面は削り。内外面に煤が付着する。174はほぼ完存し口径10.8cm、器高12.7cm、胴部最大径13.4cmを測る。外面は粗い刷毛目、内面は横方向の削りで調整し、口縁部を横ナデする。つくりが粗雑で器壁も厚い。175は口径12.5cmを測る。外面全体に刷毛目を密に施し、内面は削り。内外面ともに煤が付着する。176は小型壺の底部である。器壁が非常にうすく、外面は細かい刷毛目、内面は放射状に削り上げ、底には指頭痕が残る。177は大型の壺である。口径11.0cmを測る。頸部径が非常に小さく、口縁部は短く内湾する。

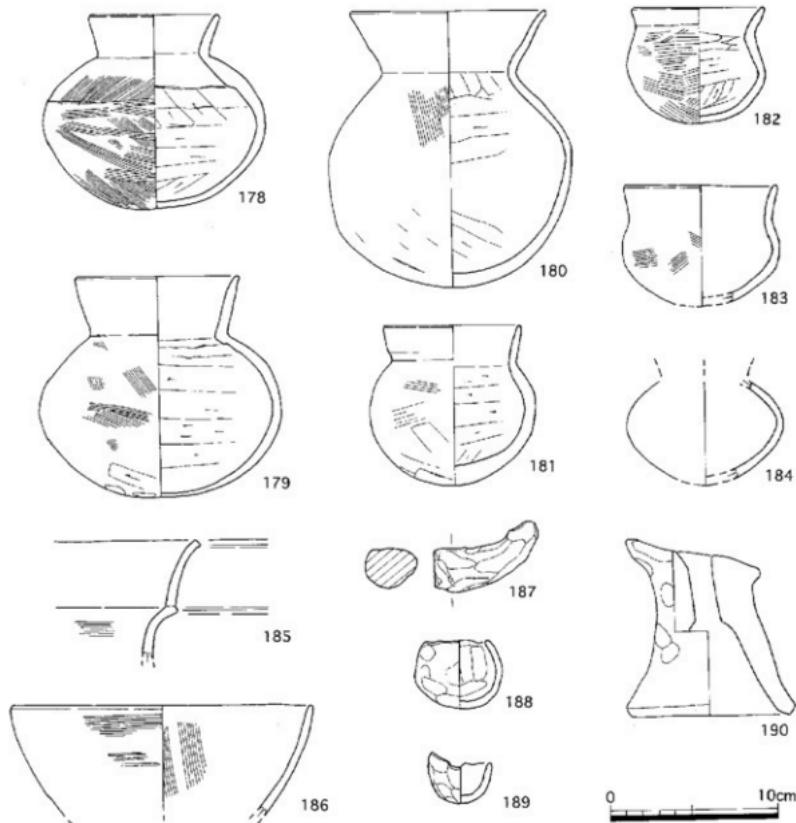
178～180は中型壺である。178は復元口径7.8cm、器高11.6cm、胴部最大径13.2cmを測る。体部は横長の楕円形を呈し、口縁部は短い。体部外面に細かい刷毛目、内面に削りを施す。179はほぼ完存し、口径9.8cm、器高13.2cm、胴部最大径14.3cmを測る。外面は上半に刷毛目を施し、下半は削りのあと指でなで、指頭痕が残る。底が非常に薄い。180は球形の体部で、頸部がしまり口縁部は直線的に外傾する。復元口径11.6cm、器高16.4cmを測る。外面は肩に刷毛目、底部はなめらかになる。内面は削り。焼成がややあく灰白色を呈する。181～184は小型丸底壺である。いずれもつくりが粗雑である。181は完形品で口径8.1cm、器高9.5cmを測る。外面は横刷毛。内面は削りで、口縁部を横ナデする。全体に調整が雑で肉厚、胎土は砂礫を多く含む。182は完形品で口径8.0cm、器高6.9cmを測る。外面は細かい刷毛目、内面は削りを施す。183は復元口径9.2cm、器高7.2cmを測る。外面に煤が付着する。184は胎土が精良である。器面が磨滅し調整は不明。185は二重口縁壺の口縁部である。屈曲部は外に突出し、口縁端部は面をもち稜が明瞭である。186は鉢あるいは鉢形の壺である。焼成時の器面の剥落がみられる。復元口径17.8cmを測る。187は壺の把手である。小型で細長い。188・189



第62図 SE 037出土遺物実測図① (1/4)



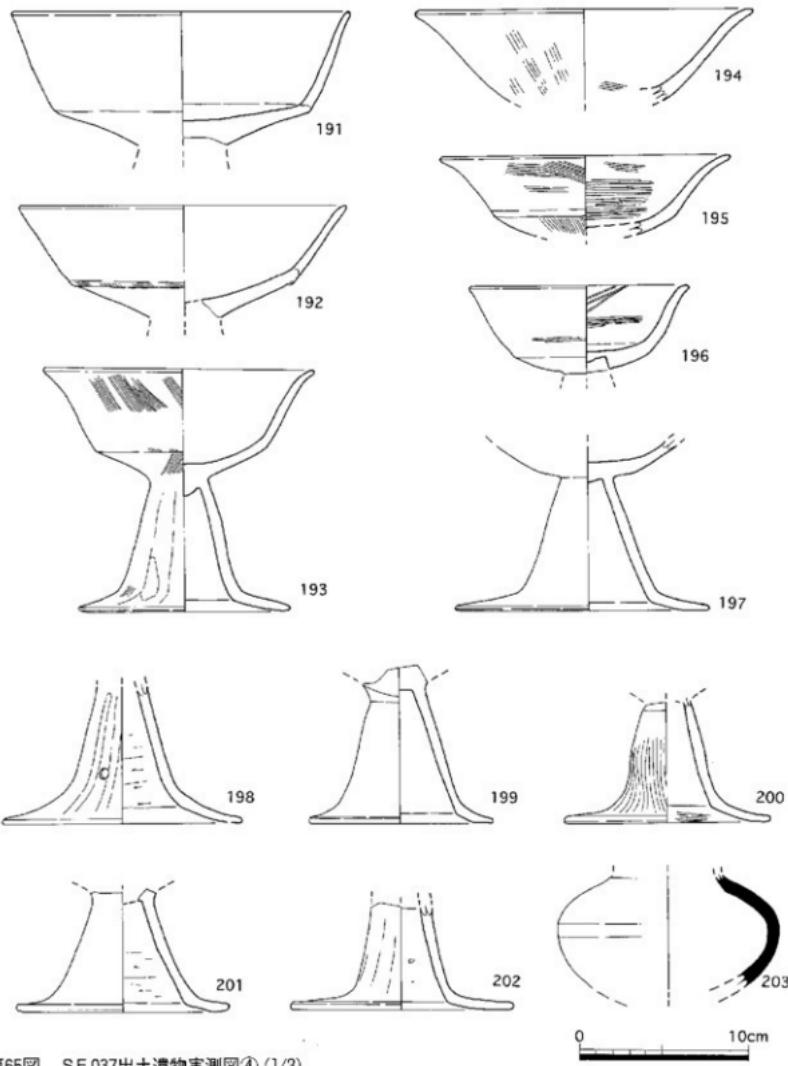
第63図 SE 037出土遺物実測図② (1/3)



第64図 SE 037出土遺物実測図③(1/3)

は手づくねのミニチュア土器である。190は支脚である。いわゆる舟形器台で、頂部に円孔をもつ。突起部周辺に煤が付着する。器高10.5cm、底径10.0cmを測る。

191～202は高坏である。坏底と口辺部との境は稜が明確で、口辺部が直線的なもの（191・192）と外反するもの（193・194）がある。191は坏部が深く、口辺部の傾斜が垂直にちかい。口径20.2cmを測る。192は復元口径19.8cmを測る。器面が磨耗し調整は不明である。193は口径16.2cm、器高14.5cm、底径12.8cmを測る。坏部は深く、口辺部は外反する。脚部はやや膨らみながら広がり裾部で強く折れる。坏部外面に刷毛目を施す。194は復元口径20.2cmを測る。195は精製高坏である。口径17.2cm。胎土は精良で、外面に横刷毛のち横ナデ、内面に横位の細い磨きを密に施す。灰白色を呈する。196は小型精製高坏である。口径13.0cmを測り、内外面に磨きを施し、胎土も精緻である。坏底に窪みがあり、脚を差し込む接合法をとっている。197～202は高坏の脚部である。脚部は全般に短く、裾部で強く屈曲し、裾が水平に広がるもの（202）もある。底径は197が15.0cm、198が14.4cm、



第65図 SE 037出土遺物実測図④(1/3)

199が11.0cm、200が12.4cm、201が12.8cm、202が13.6cmを測る。198は透かし孔3つを有する。203は初期須恵器の壺である。周径の1/4が残存する。

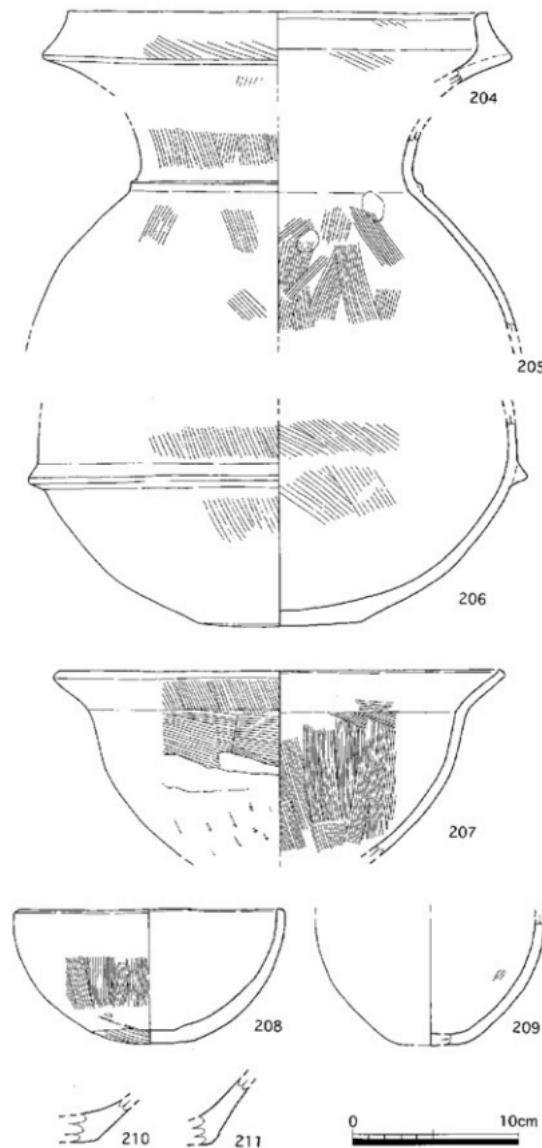
SE 039号井戸 (第61図)

S B 048の付近に位置する。検出面で長軸2.2m、短軸1.6mの長方形プランをなし、深さ220cmを測る。深さ100cmまで垂直に掘り下げ、それ以下は狭まっていき、底面では65×50cmの楕円形になる。底から40cmの高さまでの壁面に水鉢が付着しており、この高さまで湧水しているものと考えられる。出土遺物より弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第66図)

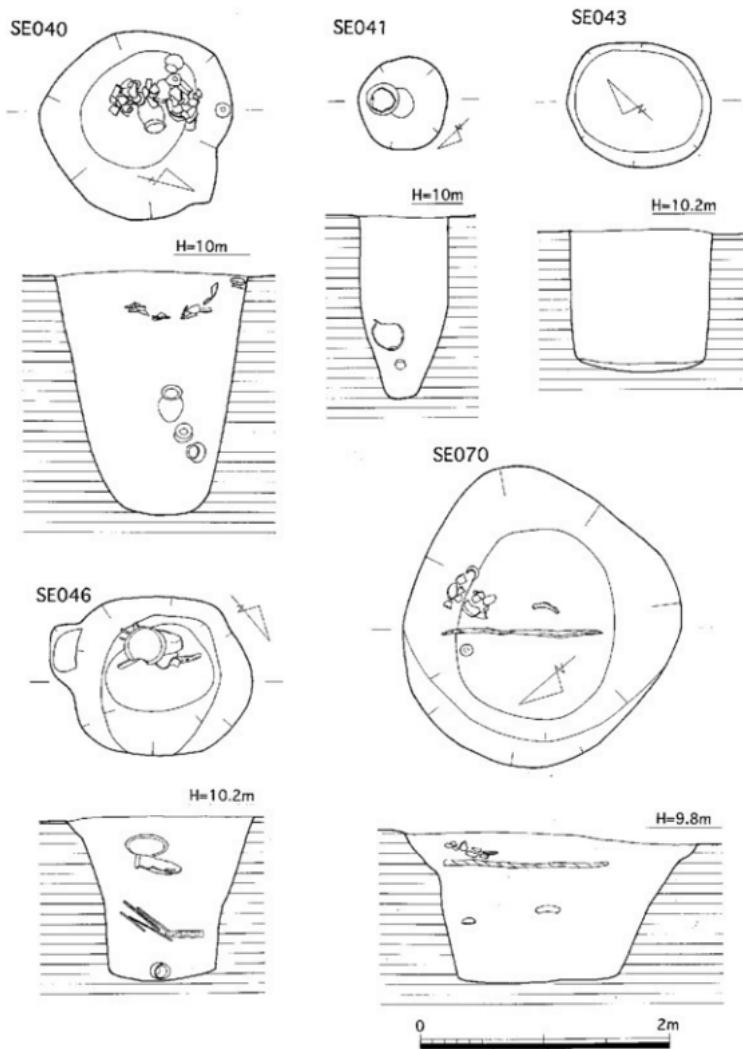
コンテナ2箱の遺物が出土した。弥生時代後期の土器が主体で、土師器少量、須恵器・瓦各1点が含まれる。

204～206は複合口縁壺である。おそらく同一個体であるが、接合できない。204の口縁部は屈曲後短く内傾するが、端部は上を向く。外面に丹塗りを施す。205は胴部から頸部にかけてある。断面三角形の突帯を頸部にめぐらす。206の底部は、まだ平底の特徴をはっきりと残しており、断面台形の突帯を胴部下位にめぐらす。底径9.6cmを測る。207は高杯である。復元口径27.0cmを測る。椀形の杯部は口縁付近で屈曲し外傾する。外面は上半に刷毛目、下半に削り、内面は細かい縦刷毛で調整する。208は鉢である。完形品で口径16.0cm、器高8.0cmを測る。凸レンズ状の底部から内湾しながら立



第66図 SE 039出土遺物実測図 (1/3)

ち上がる。外面は細かい刷毛目、内面はナデ調整。209は小型壺の底部か。210・211は平底の底部片である。底部と体部の境には稜をもつ。



第67図 SE 040・041・043・046・070実測図 (1/40)

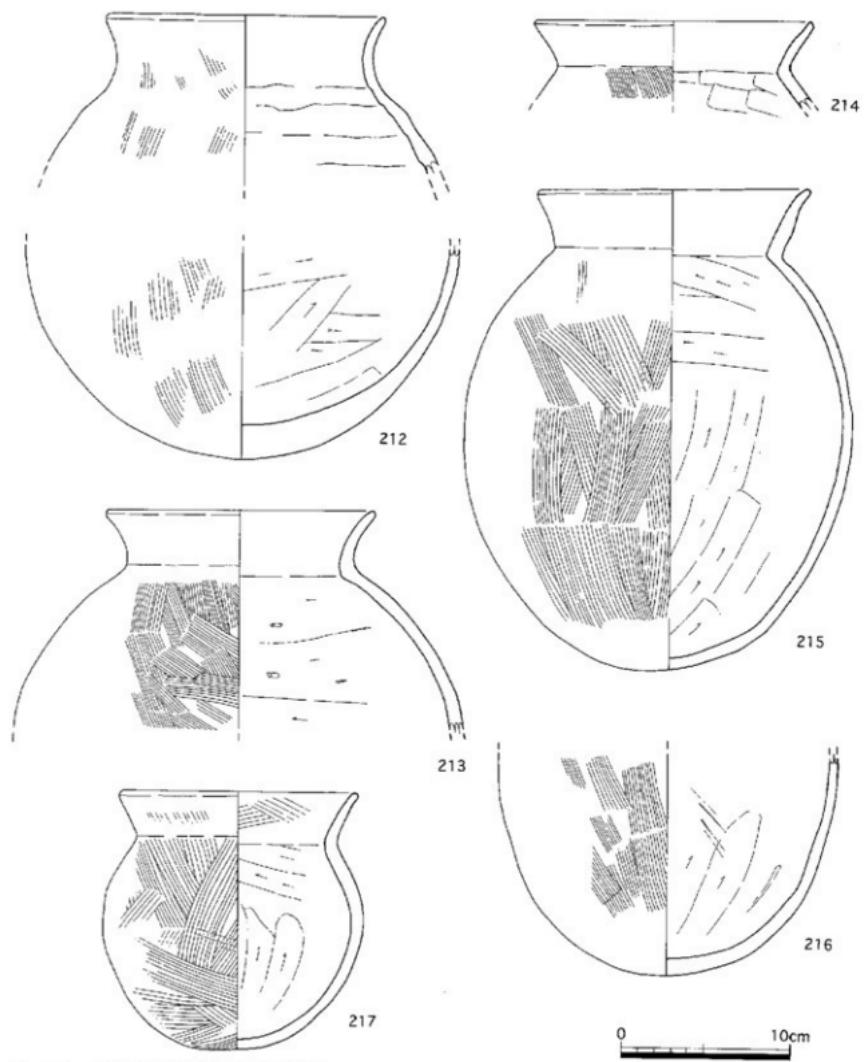
S E 0 4 0 号井戸（第67図）

調査区南壁沿いの中央に位置する。検出面の径1.5m、深さ190cmの略円形の井戸である。埋土は粘性の強い黒褐色土で、その上に古墳時代包含層の暗黒褐色土が深さ10cm程度のレンズ状に沈み込む。上層、中層、下層の3段階に分けて上器を取り上げたが、各層とも多量の土器が出土した。上層において壺、高杯等の破片が面的にまとまった状態で検出された。一方、下層においては完形の壺、壺、須恵器の甌が出土した。出土遺物より古墳時代中期後半に位置付けられる。

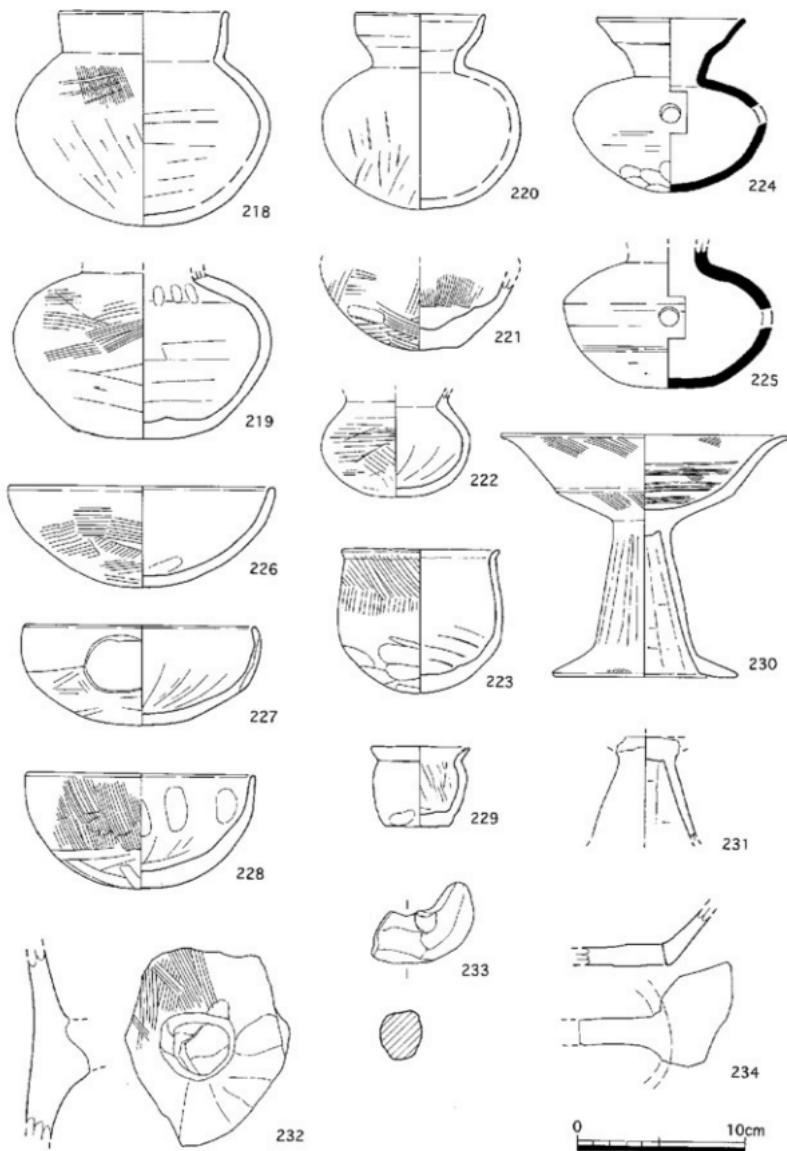
出土遺物（第68・69図）

コンテナ5箱の土師器と少量の初期須恵器が出土した。212～216は中型壺である。212は胴部で接合できず口上復元をしている。体部は球形で、頸部はなだらかに屈曲し口縁部は外反し端部を丸くおさめる。内面の肩付近に粘土紐の積上げ痕が明瞭に残る。復元口径16.6cmを測る。213は頸部がしまり、口縁部は外反する。口径16.0cm。外面に刷毛目、内面に横方向の削りを施す。214の口縁部は直線的に開き、口縁端部は面をもつ。復元口径16.6cmを測る。215はほぼ完存し口径16.2cm、器高28.5cm、胴部最大径22.9cmを測る。口縁部は外反気味で、頸部内面の稜がしっかりしている。頸部は長胴化し、外面に縱刷毛、内面に削りを施す。外面の下2/3と内底に煤が付着する。216は長胴化した壺の体部下半で、外面全体に煤が付着する。217は小壺壺である。完形品で口径14.2cm、器高15.3cmを測る。外面に粗い刷毛目、内面に削りを施す。外面は底部を除いて煤が付着する。

218・219は中型壺である。218は完形品で口径10.2cm、器高12.8cmを測る。頸部は広く短い口縁部が直立する。胎土は精良。外面は上半に細かい刷毛目、下半に削りを施す。219は平坦な底部をもち、外面上半に横刷毛、外面下半と内面に削りを施す。220は直口壺である。完形品で口径7.8cm、器高11.7cm、胴部最大径11.8cmを測る。頸部はしまり、口縁部は直立後内湾気味に外に開く。外面は下半を削り、上半を横ナデ調整する。221は壺の底部である。外面は板で難に整形しており、凹凸が目立つ。内面は刷毛目。底が非常に厚い。焼成時にできた器面の剥落がある。222は小型壺である。外面は刷毛目、内面は底に向て放射状になでおろす。223は小型の無颈壺である。復元口径9.4cm、器高8.5cmを測る。丸底から直立する体部を経て、口縁部は短く外湾する。外面は上半に刷毛目、下半に指ナデを施す。内面はナデ調整で、底についた条痕はナデの際に爪が当たったもの。224・225は須恵器の甌である。224は頸部の半分を欠き、口径9.0cm、器高10.4cmを測る。頸部が小さくしまり、口縁部は途中で一度屈曲しながら大きく開く。体部は最大径部で強く屈曲し、底部に向かってすぼまる。稜はナデ消しており底には指頭痕が残る。焼成は良好で青灰色を呈する。中村編年I-1・2段所に位置付けられる初期須恵器である。225は体部が完存する。頸部径は小さく、体部は平底気味で安定した形である。回転ヘラ削りの後、上半を横ナデする。底にはへそ状の小さな窪みがある。焼成は良好でやや黒っぽい青灰色を呈する。初期須恵器である。226～228は椀である。226は口径15.8cm、器高6.1cmを測る。外面に刷毛目を施す。227は完形品で口径14.2cm、器高5.9cmを測る。口縁部は内湾し、外面に焼成時にできた器面の剥落が認められる。内外面ともに削りを施す。228は復元口径13.6cm、器高6.8cmを測る。外面は上半を縱刷毛、下半を削り、内面は指ナデで調整する。器壁が厚い。229は手づくねのミニチュア土器である。平底の鉢形で復元口径5.8cm、器高4.9cm、底径4.0cmを測る。230・231は高杯である。230は復元口径17.2cm、器高14.4cm、底径11.1cmを測る。杯部は口辺が外反し、細かい刷毛目の後、杯底付近に細い磨きを施す。直線的な脚部は幅で折れて短く開き、外面は細かく面取りする。硬質に焼け灰色を呈する。232～234は甌である。232は把手の付け根である。233は把手である。234は底部で、蒸気孔は半円形の2孔である。



第68図 SE 040出土遺物実測図① (1/3)



第69図 SE 040出土遺物実測図② (1/3)

S E 0 4 1 号井戸 (第67図)

S B 0 4 7 と S B 0 5 1 の間に位置する円形の井戸である。検出面での径70cm、深さ150cmを測る。深さ70cmまで垂直に落ちたあと狭まり、底面での径は25cmを測る。埋土は黒褐色土で、最上面に古墳時代包含層の暗黒褐色土が深さ5cm程度のレンズ状に沈み込む。深さ70cm付近で湧水はじめ、深さ90cmで甕と完形の小型壺が出土した。出土遺物より古墳時代中期に位置付けられる。

出土遺物 (第70図)

コンテナ1箱の遺物が出土した。**235**は甕である。頸部径12.0cm、残高25.5cm、胴部最大径22.9cmを測る。体部は長削化し、外面は上半を横刷毛のち右下がりの刷毛目、下半を削りで調整する。内面は上半を横方向の削り、下半は底から削り上げるが雑で削られていない部分もある。外底に黒斑を有する。**236**は小型壺である。口縁部は内湾する。体部は底が平坦で安定し、胴部はひずんでいる。胎土は精緻である。

S E 0 4 3 号井戸 (第67図)

調査区中央の南寄りに位置する。検出面の径100~110cm、深さ130cmを測る円形の井戸である。壁はほぼ垂直に立つ。埋土は黒褐色で周囲に白色粘土が幅5cm程度の輪状にめぐっていた。出土遺物より弥生時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (第70図)

コンテナ1箱の弥生土器が出土した。上層で須恵器2点が混入する。**237**は甕である。復元値で頸部径9.6cm、胴部最大径20.2cm、残高17.9cm、底径7.2cmを測る。頸部に断面三角形の突帯が1条めぐり、胴部外面には幅広の磨きを施す。**238**は複合口縁壺の底部である。底径8.8cm、残高15.0cmを測る。厚い平底で胴部下方に断面台形の突帯がめぐる。外面に縦刷毛、内面に横刷毛を施し、内底に指頭痕が残る。**239**は小型壺の底部か。復元底径6.0cmを測る。

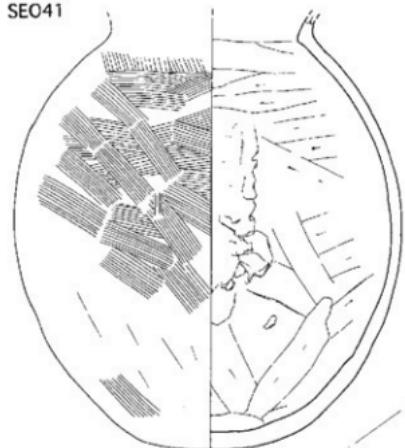
S E 0 4 6 号井戸 (第67図)

調査区中央の段差下で検出した。長軸1.6m、短軸1.3mの不整形プランをなし、深さ130cmを測る。埋土は黒褐色で八女粘土の小ブロックが混じる。深さ30cmで、大型精製高坏の坏部完形品が正置された状態で出土、その直下で甕が出土した。中層で自然木5本、底面からは壺が出土した。出土遺物より弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第71図)

コンテナ6箱の遺物が出土した。弥生土器が主であるが、上面出土遺物には古代瓦や須恵器が混入する。**244**は大型甕である。復元口径25.8cm、器高39.0cm、底径8.0cmを測る。長胴で、く字状口縁は端部を面取りし、内側に稜をもつ。外面とともに細かい刷毛目を施し、薄手のつくりである。外面に煤が付着する。**245**は甕の口縁部である。復元口径19.0cmを測る。く字状口縁で内外面とも刷毛目のち横ナデを施す。**246**は広口壺である。外反しながら高く立ち上がり、口縁端部は面を持つ。復元口径19.6cm。**247**は壺である。口径13.9cm、器高13.6cmを測る。凸レンズ状の底部で、胴部外面に細かい横刷毛を施し、内面には指頭痕が残る。外底に黒斑を有する。**248**は小型壺か。口径14.0cmを測る。口縁部は直立する。外面は刷毛日の後、下半に縦方向の磨きをまばらに施す。内面は刷毛目と指ナデで調整する。**249**は大型精製高坏である。坏部のみが完形で出土した。口径33.1cmを測る。坏底から内湾しながら立ち上がり、屈曲した後、口縁部は外湾する。内外面に放射状の磨きを施す。とくに外面の磨きは密である。**250・251**は底部片である。**250**はレンズ状の底部で、底径8.2cmを測る。

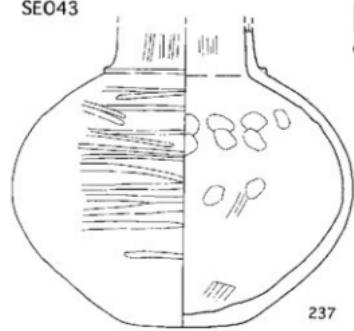
SEO41



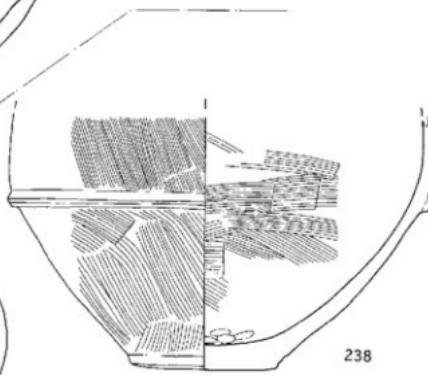
236



SEO43



237



238



239

SEO60



240



242



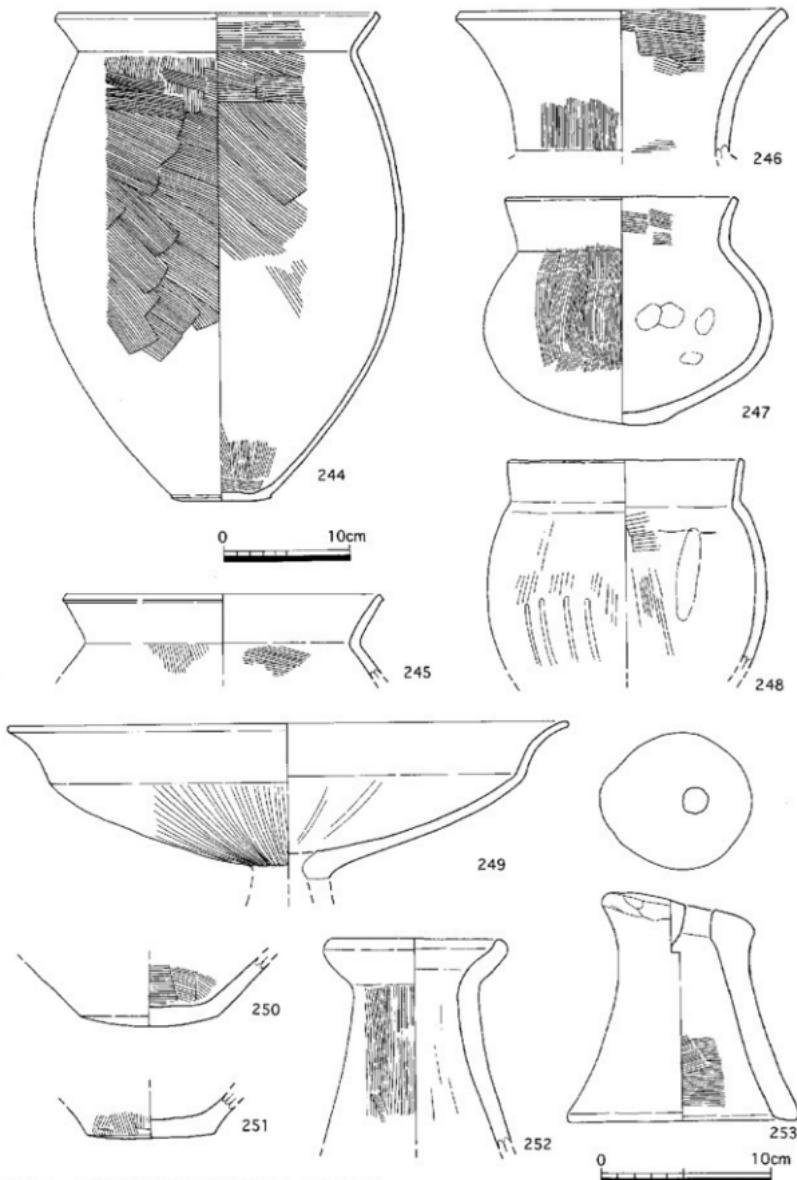
241



243

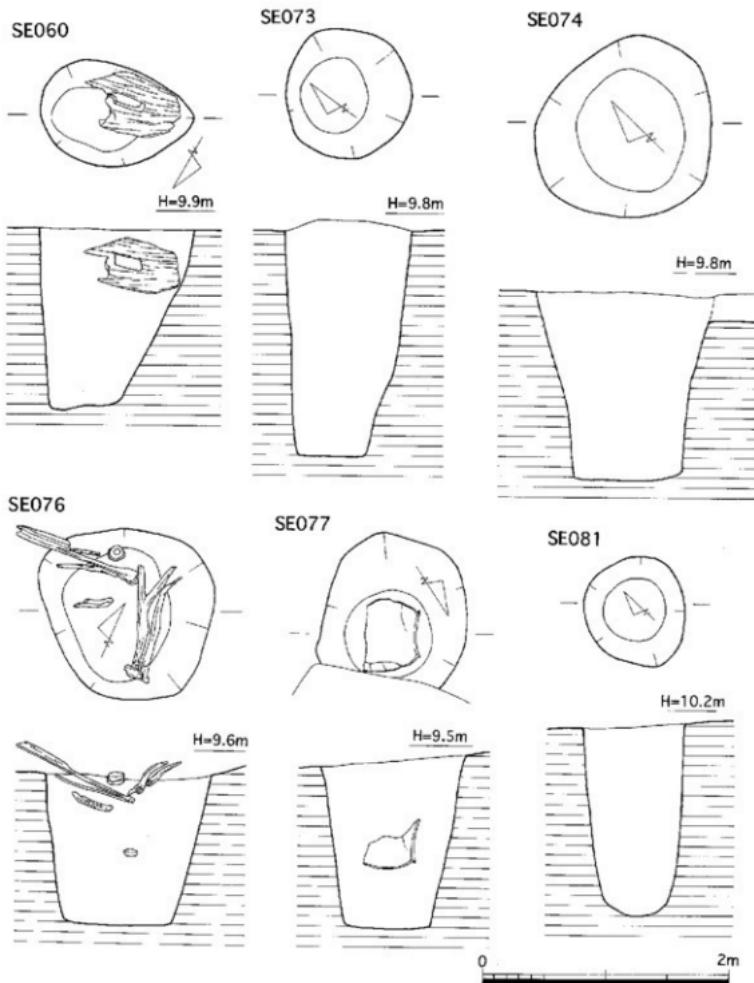


第70図 SEO41・043・060出土遺物実測図(1/3)



第71図 SE 046出土遺物実測図 (1/3, 244は1/4)

内底に簾状刷毛を施す。251は平底でやや外湾しながら立ち上がる。外底に煤が付着する。252は器台である。受け部は内湾し、口径10.8cmを測る。253は支脚である。底径13.6cm、器高13.6cmを測る。いわゆる舟形器台で頂部の突起は発達せず、中央に円孔を穿つ。内面に横刷毛を施す。頂部の突起周辺に煤が薄く付着する。



第72図 SE 060・073・074・076・077・081実測図 (1/40)

S E 0 6 0 号井戸（第72図）

S E 0 4 5 の南西に接する。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ1.4mの楕円形の井戸である。西壁がやや傾斜しており、底面は0.8m×0.5mの楕円形プランを呈する。埋土は黒色土。1.1mの深さで湧水する。上層からネズミ返し状の建築材が出土した。80cm×50cm程度で中央に長方形の穴を開ける。整理作業の段階で紛失してしまった。また、底から二重口縁壺が出土した。出土遺物より古墳時代初頭に位置付けられよう。

出土遺物（第70図）

コンテナ2箱分の遺物が出土した。弥生土器・古式土師器が主で、土師器・古代瓦が少量混入する。**240**は二重口縁壺の口縁部で、口径15.4cmを測る。屈曲後やや外傾して立ち上がる。**241**は壺の底部で底径4.6cmを測る。外面に縱刷毛、内底に簾状刷毛を施す。畿内V様式系統の土器。**242**は壺もしくは壺の底部である。底径7.8cmを測る。**243**は高坏である。脚部が大きくハの字に開く。

S E 0 7 0 号井戸（第67図）

S E 0 6 0 の西側に位置する。検出面の径2.2m、深さ1.2mを測る略円形の井戸である。上層の北側で土器が集中して出土。自然木1本も出土した。中層でも若干の土器が出土したが、下層からは出土していない。出土遺物より弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物（第73図）

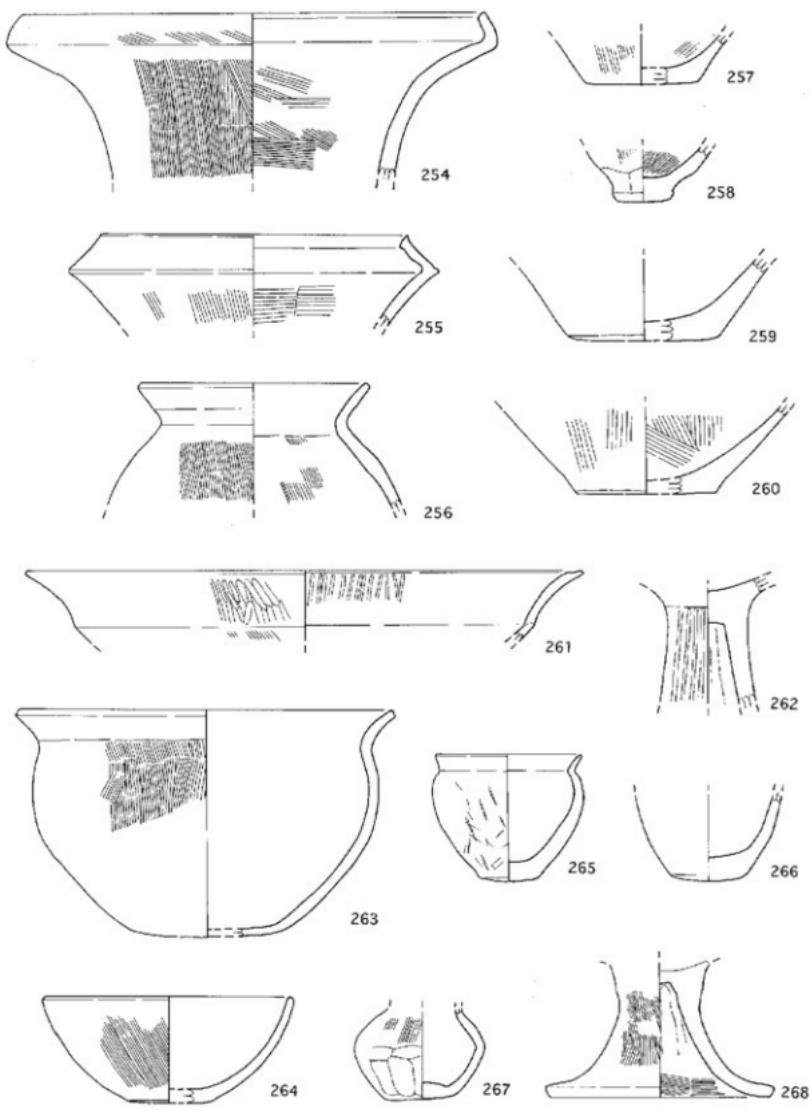
コンテナ2箱の土器が出土した。**254**・**255**は複合口縁壺である。いずれも口縁部は内傾する。外面は縱刷毛、内面は横刷毛を施した後、横ナデする。**254**は復元口径29.0cmを測り、屈曲部は丸みを帯びる。**255**は復元口径22.0cmを測る。**256**は壺である。口縁部は直線的に外に開き、胴部は内外面とも刷毛目を施す。復元口径13.8cmを測り、外面に煤が付着する。**257**～**260**は壺もしくは壺の底部片である。**258**は底部から立ち上がる部分を指で強く押されており、この部分が内側にへこむ。**261**は大型精製高坏の口縁部である。口縁部は屈曲後外溝し、内外面ともに縱方向の磨きを施す。復元口径33.0cmを測る。胎土は精緻で焼成はやや硬質、浅黄色を呈する。**262**は高坏の脚部である。外面に磨きを施す。**263**は大型の鉢である。平底で、口縁部は外反し端部は面をもつ。復元口径22.4cm、器高13.5cm、底径9.0cmを測る。外面上半に細かい刷毛目を施し、他の部分はナデ調整で仕上げる。**264**は鉢である。平底の底部から内湾しながら立ち上がりそのまま口縁にいたる。復元口径14.8cm、器高6.3cm、底径5.0cmを測る。外面に縱刷毛、内面にナデを施す。**265**・**266**は小型の鉢である。**265**は復元口径8.6cm、器高7.5cm、底径3.6cmを測る。外面に砂粒の動きが認められるが、面ではなく線的で、棒状のT工具で削ったものか。内面はナデ調整。**267**は手づくねの小壺である。手づくね成形後、外面上半に縱刷毛を施す。**268**は脚付土器の脚部である。

S E 0 7 3 号井戸（第72図）

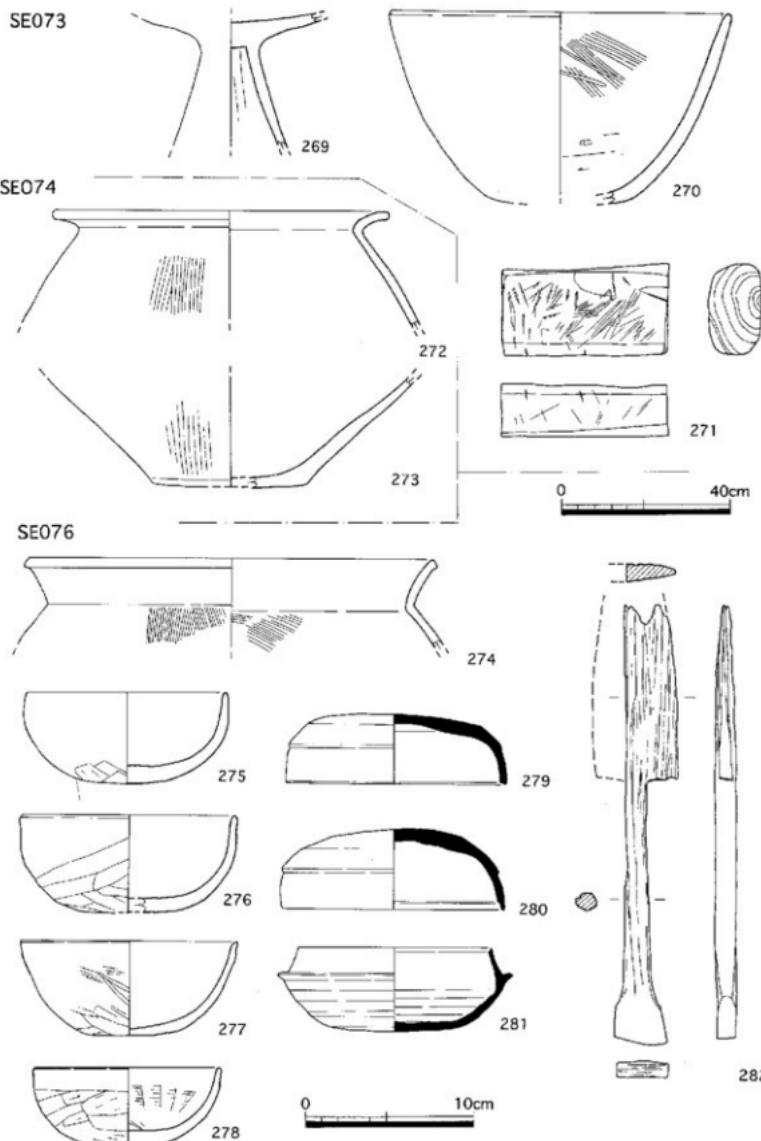
調査区北壁沿いに位置し S D 0 3 1 と接する。検出面の径1.0m、深さ1.9mを測る円形の井戸である。底面での平面形は50cmを測る。

出土遺物（第74図）

コンテナ1箱の土師器が出土した。**269**は高坏である。脚柱は直線的に開く。器壁は薄く、灰白色を呈する。**270**は鉢である。復元口径20.2cm、器高11.5cmを測る。外面は磨減し調整不明。内面は上半に刷毛目、内面に横方向の削りを施す。**271**は枕形木製品である。上面に集中して、鋭利な刃物でつけた線状の傷がつく。裏面には全く傷がついていない。



第73図 SE 070出土遺物実測図 (1/3)



第74図 SE 073・074・076出土遺物実測図 (1/3、271・282は1/12)

S E 0 7 4 号井戸（第72図）

S E 0 7 3 の西側に隣接し、S D 0 3 1 を切る。検出面での径1.4~1.5m、深さ1.5mを測る円形の井戸である。壁は途中まで狭まっていくが、底面から60cmほどの高さまでは垂直に近い。底面では径1.0mを測る。

出土遺物（第74図）

少量の弥生土器が出土した。272は甕の口縁部である。短い口縁部は強く外湾し、逆L字状になる。復元口径20.0cmを測り、胎土は精良で薄手のつくりである。273は甕の底部で、復元底径9.2cmを測る。薄い平底で外面は縱刷毛、内面はなめらかになれる。

S E 0 7 6 号井戸（第72図）

S E 0 7 0 の西に隣接し、S D 0 3 1 を切る。検出面で径1.4mの不整形プランを呈し、検出面からの深さは120cmを測る。上層で土器・木製鋤・自然木が出土した。須恵器坏蓋を逆置して、その中に土器師椀を入れ込んだ状態で土器が出土した。中層でも須恵器坏蓋が1点出土した。出土遺物より古墳時代後期前半に位置付けられる。

出土遺物（第74図）

コンテナ1箱の土器師、須恵器、弥生土器が出土した。須恵器・弥生土器はごく少量である。

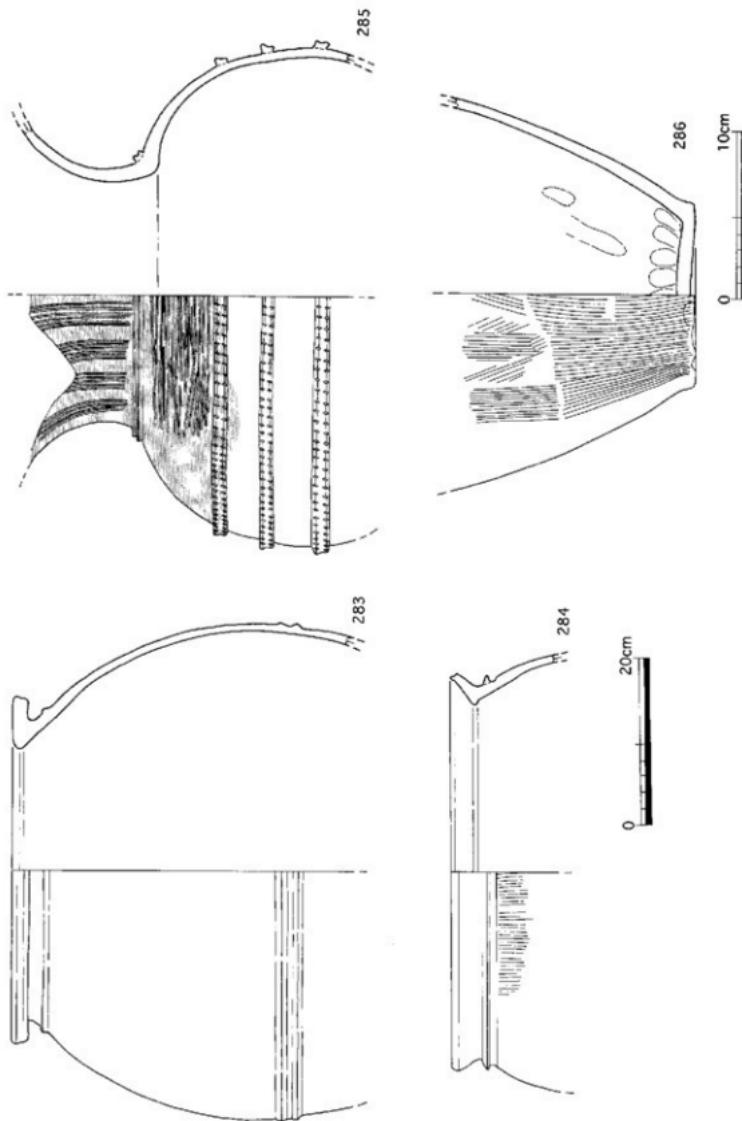
274は弥生土器の甕の口縁部である。く字状口縁で口縁端部を小さく外につまみ出す。内面に横刷毛を施す。275~278は土器師の椀である。275・278は完形品である。口径は11.1~12.8cm、器高5.4~5.8cmを測る。外面は下半を削った後口縁部を横ナデ、内面は横刷毛あるいはナデで調整する。279~281は須恵器である。279は坏蓋である。完形品で口径13.0cm、器高4.1cmを測る。天井部は平坦で、口辺部との境に稜を持つ。L口縁端部内側にも稜をもつ。天井部に自然釉が付着する。280は坏蓋である。ほぼ完存し、口径13.2cm、器高4.8cmを測る。天井部はやや丸みを持ち、口辺部との境に稜を有する。口縁端部内面にも稜をもつ。天井部に自然釉が付着する。281は坏である。口径13.8cm、器高5.0cmを測る。底部は平坦で、回転ヘラ削りによる稜がはっきりと残る。立ち上がりは長くやや内傾し、端部内側に稜を有する。これらの蓋坏は中村編年II-2段階にあたる。282は木製の鍬である。柄の部分は円形で、鋤の刃の部分は半分が欠損する。残長104.6cmを測る。

S E 0 7 7 号井戸（第72図）

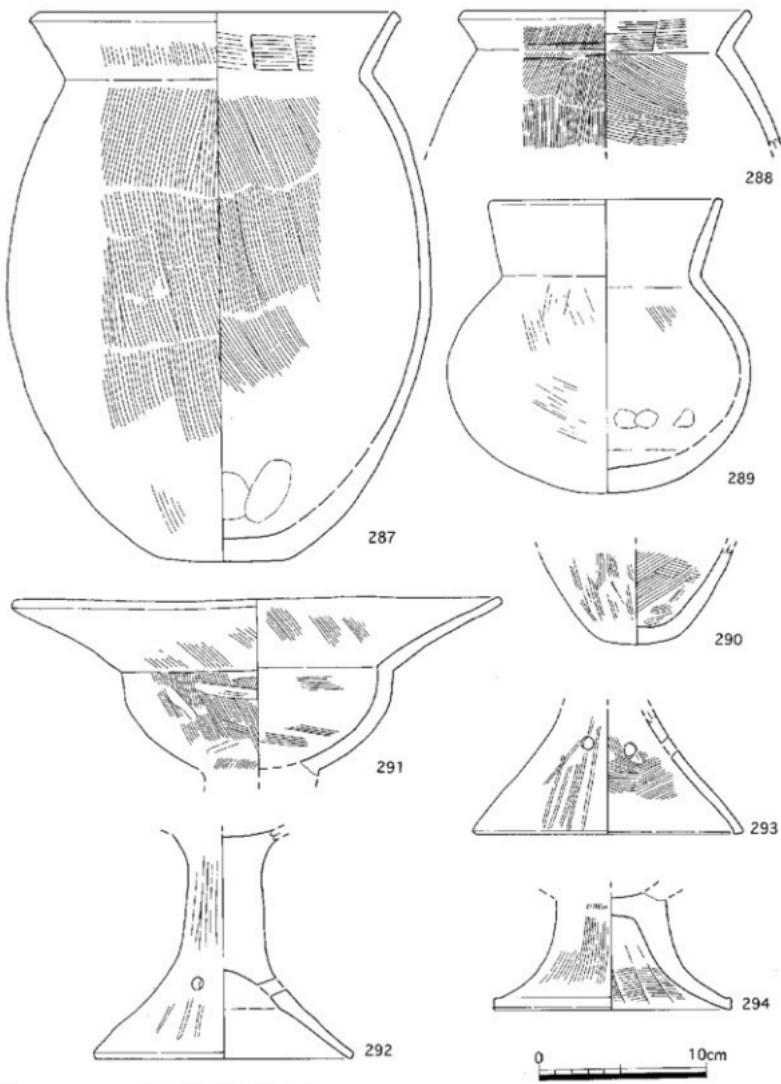
S D 0 3 1 の北西部分と重複する井戸・土壤群の1つである。S K 0 7 5 に切られ、S D 0 3 1 とも切り合っているが、こちらの先後関係は不明である。検出面で長軸1.2m以上、短軸1.1mの不整形プランを呈し、検出面からの深さは1.4mを測る。埋土は灰色がかかった黒色粘質土である。深さ70cmで大量に湧水し、ほぼその高さで甕棺の破片が出土した。更にその下層から大型精製壺、甕棺片が出土したが、湧水が激しく回復できなかった。甕棺、大型精製壺は破片が揃わず、二次的な投棄によるものであろう。

出土遺物（第75図）

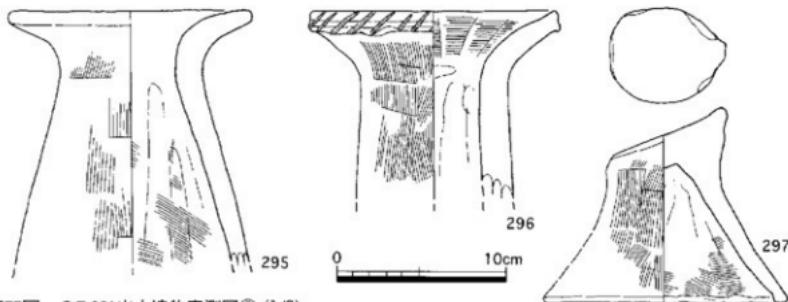
283は甕棺である。口縁部は逆L字状で上面は水平である。頭部に1条、胴部に2条の断面三角形の突帯があげぐる。口径が小さいため、体部は丸みを帯びる。復元口径40.6cm、胴部最大径59.2cmを測る。口縁部形態、突帯は弥生時代中期後半の立岩式の特徴をもつ。284は甕棺の口縁部である。く字状口縁の内側がやや突出し、外側には細く高い突帯が1条めぐる。復元口径47.4cmを測る。弥生時代後期前半の桜馬場式である。外面に縫が付着する。285は大型丹塗精製壺である。頭部は直立後外



第75図 SE 077出土遺物実測図 (1/4、286は1/3)



第76図 SE 081出土遺物実測図① (1/3)



第77図 SE 081出土遺物実測図②(1/3)

湾していく。頭部の付け根に1条、体部に3条の断面M字形の突帯をめぐらす。体部の突帯は指で強くなれて凹面をつくった後、板で刻目を入れる。凹部には板が当たらず図のような刻目を呈する。頭部には5、6本単位の縦磨きを等間隔で施し、暗文をつくる。体部の1番上の突帯より上に細かい横磨きを密に施し、頭部からこの部分まで丹を塗っている。それ以下は横ナデで仕上げる。内面はなめらかになでている。弥生時代中期後半のもの。286は壺の底部である。外面には縦刷毛を施し、内面底部からの立ち上がりには指頭痕が残る。

S E 0 8 1 号井戸 (第72図)

調査区中央の段差の下、北寄りに位置する。検出面での径0.8~0.9m、深さ1.5mの円形の井戸である。壁は直立し、底面は径50cmの円形を呈する。出土遺物より弥生時代終末に位置付けられる。

出土遺物 (第76・77図)

コンテナ3箱の弥生土器が出土した。287は壺である。ほぼ完存し口径22.0cm、器高32.8cm、底径8.0cmを測る。底部は平坦面をもつが体部との境は明瞭ではない。胴部は長胴化し内外面とも縦刷毛調整をおこなう。外面上に濃く煤が付着するが、胸部の下1/3にはまったくつかない。この部分は煮炊きのとき土中に埋めていたのか。288は壺の口縁部で、復元口径17.6cmを測る。胴部外面に縦刷毛、内面に右下がりの刷毛目を施し、頭部内面の稜がしっかりしている。外面に煤が付着する。289は直口壺である。完形品で口径14.0cm、器高17.6cmを測る。外面は細かい刷毛目、内面は上半を刷毛目で調整し、下半に指頭痕が残る。底に黒斑を有する。290は壺の底部である。内外とも刷毛目を施すが、難で器面の凹凸が目立つ。底に黒斑を有する。291は高杯である。半球形の杯部から口縁が外に大きく開く。復元口径29.0cmを測り、内外面とも刷毛目を施す。292は高杯の脚部である。底径15.4cmを測る。脚柱は中実で裾がハの字に開く。透かし孔を3つ有する。293は高杯の脚部である。ハの字形に開き、透かし孔を有する。外面に縦方向の磨き、内面に刷毛目を施す。胎土は砂粒をまばらに含むが焼成は良好である。294は脚付土器の脚部である。底径14.2cmを測る。内外面とも刷毛目を施す。295・296は器台である。295は復元口径14.4cmを測り、受け部はゆるやかに外反する。外面は縦刷毛、内面は指で整えた後、下半に刷毛目を施す。296は受け部に板の小口で斜め方向の刻目をつける。復元口径15.0cmを測る。外面にうすく煤が付着する。297は支脚である。復元底径14.6cm、器高11.6cmを測る。頂部は円形で傾斜は急である。先端に小突起がつく。

4) 土壙

調査区西側の段差下において15基の土壙を検出した。

S K O 3 5 号土壙 (第78図)

調査区南壁沿い、S E 0 4 1 の西で検出した。長軸180cm、短軸130cmの椭円形を呈し、深さは約60cmを測る。東側壁面に1段ステップがつく。埋土は黒褐色の粘質土である。

出土遺物 (第79図)

コンテナ1箱分の遺物が出土した。弥生土器と土師器、須恵器4点出土した。**298**～**301**は弥生土器である。**298**は壺の口縁部片である。外反し端面はナデにより中央が窪む。内面は横刷毛、外面は横ナデで調整し灰白色を呈する。**299**・**300**は平底の底部片である。**301**は脚付壺の脚部ある。**302**～**305**は土師器である。**302**は鉢である。復元口径23.8cm、器高10.7cmを測り、底部は削る。**303**は高壺の壺部である。復元口径19.2cmを測る。平坦な壺底から屈曲し、口辺部は外反する。脚との接合部に粘土が突出する。**304**は壺の口縁部片である。**305**は丸底の底部片。**306**は小型器台の脚部である。内外面とも細かい磨きを密に施し、復元底径9.0cmを測る。

S K O 3 6 号土壙 (第78図)

S K O 3 5 から西へ4m、S D 0 3 1溝の東側に隣接する。1.1m四方の隅丸方形で、その西壁に幅0.6m、奥行き0.5mの張り出し部がつく。深さは20cm（張り出し部は15cm）である。埋土は粘性の強い黒色土で、検出段階で遺構上向に高壺を含む土器片が面的に広がるのを確認した。埋土の土質から当初井戸かと予想されたが、実際には浅く土壙であった。

出土遺物 (第79図)

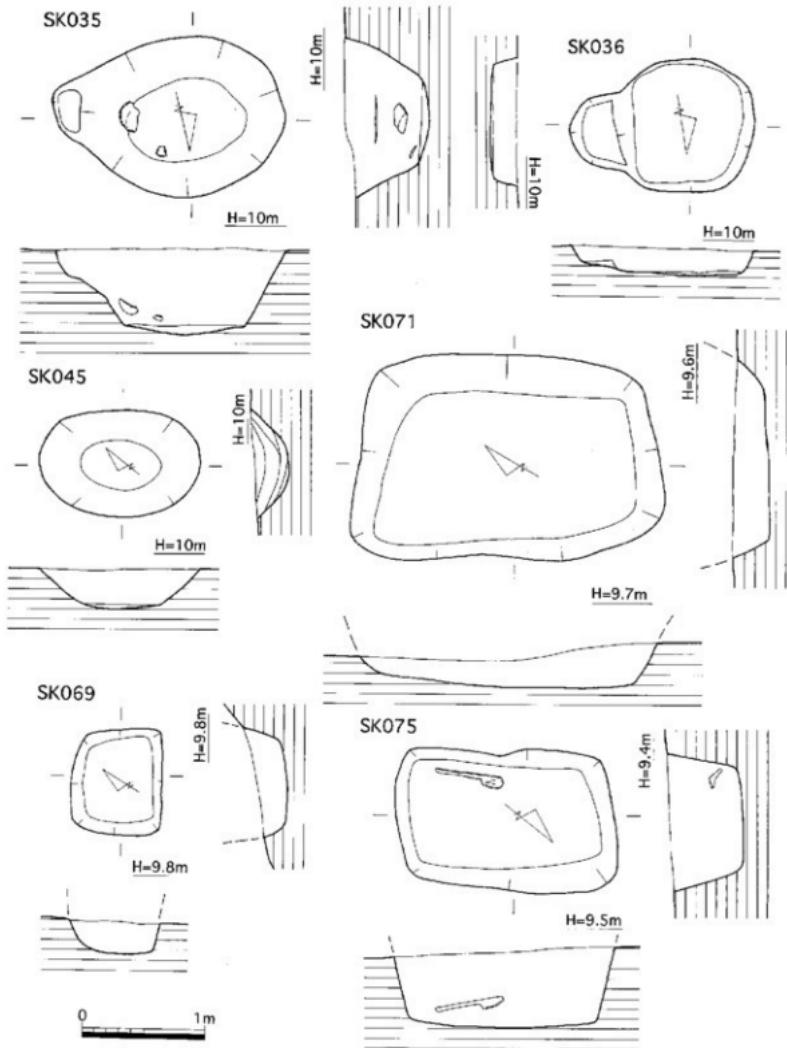
コンテナ2箱分の遺物が出土した。土師器がほとんどで須恵器が3点含まれる。**307**は壺の口縁部である。口径15.8cmを測り、口縁部は直線的に開き、端部を平坦に面取りする。内面は口縁に右下がりの刷毛目を施し、頭部に指頭痕が残る。灰白色を呈する。**308**は小型丸底壺である。外面に刷毛目、内底に指圧痕が残る。つくりは粗雑である。**309**は単孔の瓶である。**310**は碗である。ほぼ完存し、口径13.4cm、器高4.8cmを測る。**311**・**312**は高壺の壺部である。平坦な壺底から口辺部が内湾して立ち上がる。**311**の口縁は端部を丸くおさめるのに対し、**312**の口縁端部は外反する。**313**は高壺の脚部である。底径14.0cmを測る。脚柱は直線的に開き裾部で折れ、透かし穴を有する。

S K O 3 8 号土壙 (第80図)

S B 0 4 9 の西に位置する。径1.3m、深さ105cmの円形土壙である。埋土はローム小粒および八女ブロックを少量含む黒色土である。底面からやや浮いた高さで壺、高壺、小壺がまとまって出土、また、検出面-10cmのレベルでガラス小玉1点が出土した。出土土器から古墳時代前期後半に位置付けられる。

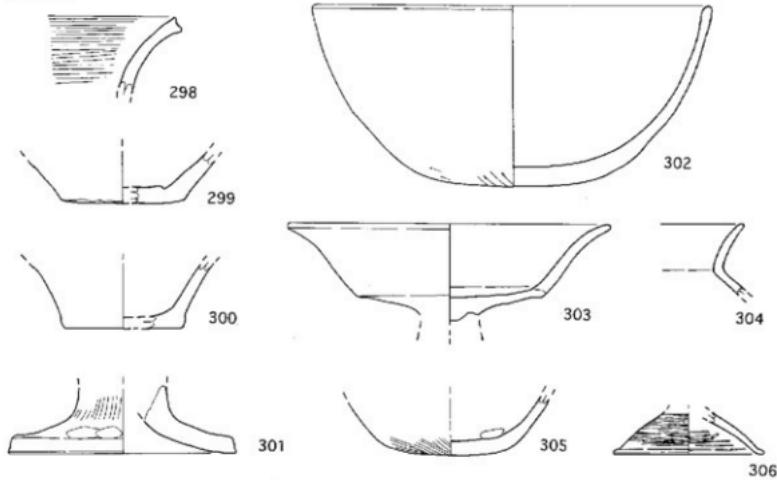
出土遺物 (第81図)

コンテナ2箱の土師器が出土した。古代瓦3点が混入する。**314**～**317**は壺である。**314**は口縁部を欠く。最大径部が高い位置にある長胴のもので、底は凸レンズ状をなす。内外面とも刷毛目を施し、外面底部付近を削り上げる。**315**は復元口径12.8cmを測る。口縁部は直線的に外傾し端部は面をもつ。胴部は球形で、胴部外面は綫および斜めの刷毛目のあと、肩を横ナデする。胴部内面は下半を削るが、上半には粘土紐積上げの痕跡が残る。外面に煤が付着する。**316**は布留壺である。完形品で口径11.8cm、

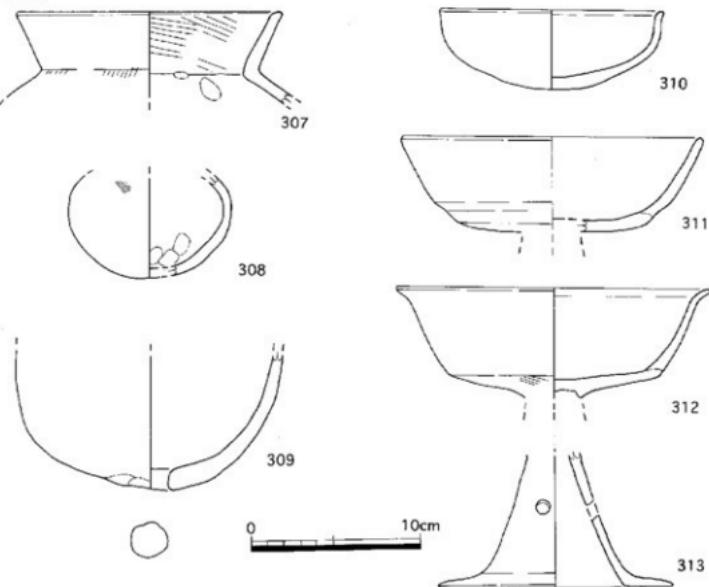


第78図 SK 035・036・045・069・071・075実測図 (1/40)

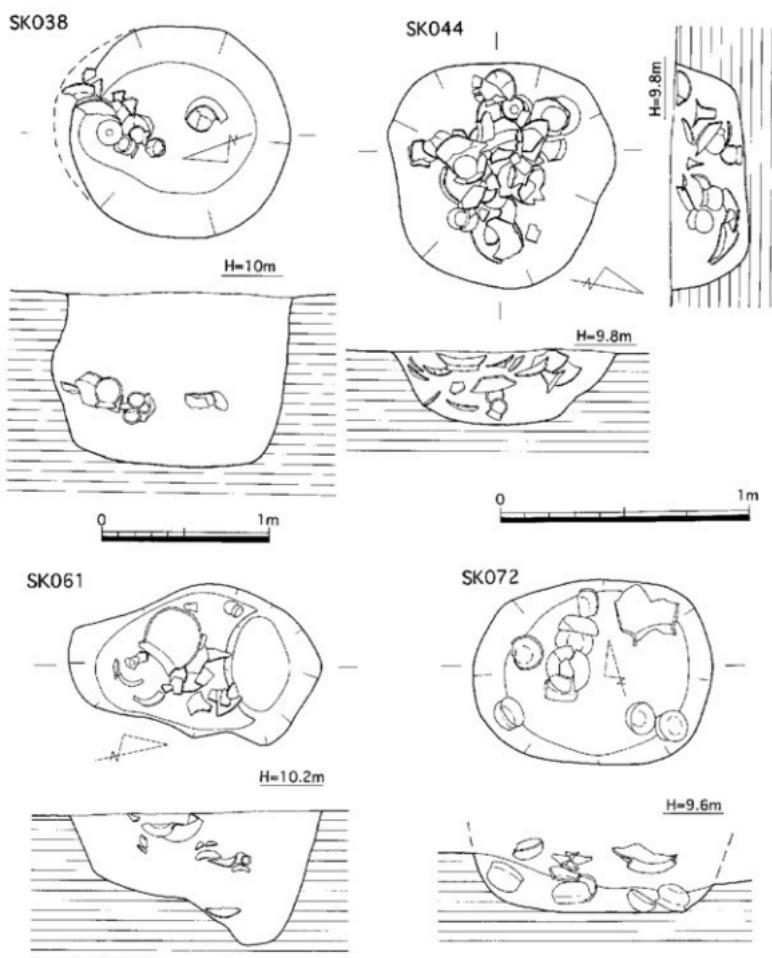
SK035



SK036

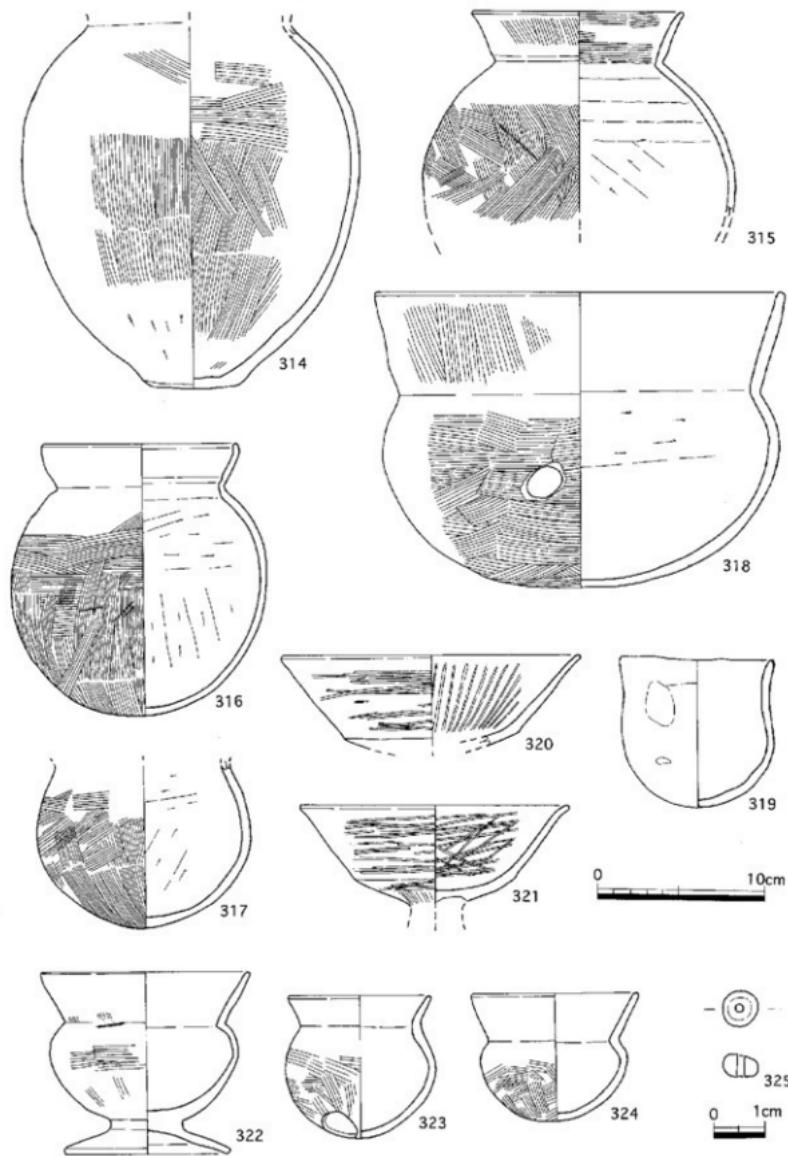


第79図 SK 035・036出土遺物実測図 (1/3)



第80図 SK 038・044・061・072実測図 (038は1/30、ほかは1/20)

器高16.1cmを測る。胴部は球形で、口縁部は内湾する。器壁はうすく、外面は全体に細かい刷毛目を施した後、肩を横ナデ、内面は削りで調整する。外面と内底に煤が付着する。317は布留甕である。球形の胴部で、外面は継刷毛の後、肩に横刷毛、内面は削り調整する。内外面に煤が付着する。318は鉢である。完形品で口径24.4cm、器高17.5cmを測る。丸底で横長の胴部から口縁が外傾して立ち上がる。外面は口縁を継刷毛、胴部を横刷毛、内面は胴部を削りで調整し、口縁部を横ナデして仕上げる。胴部に1箇所内側から穿孔する。319は小型鉢である。手づくねで成形している。丸底で、口



第81図 SK 038出土遺物実測図 (1/3、325は1/1)

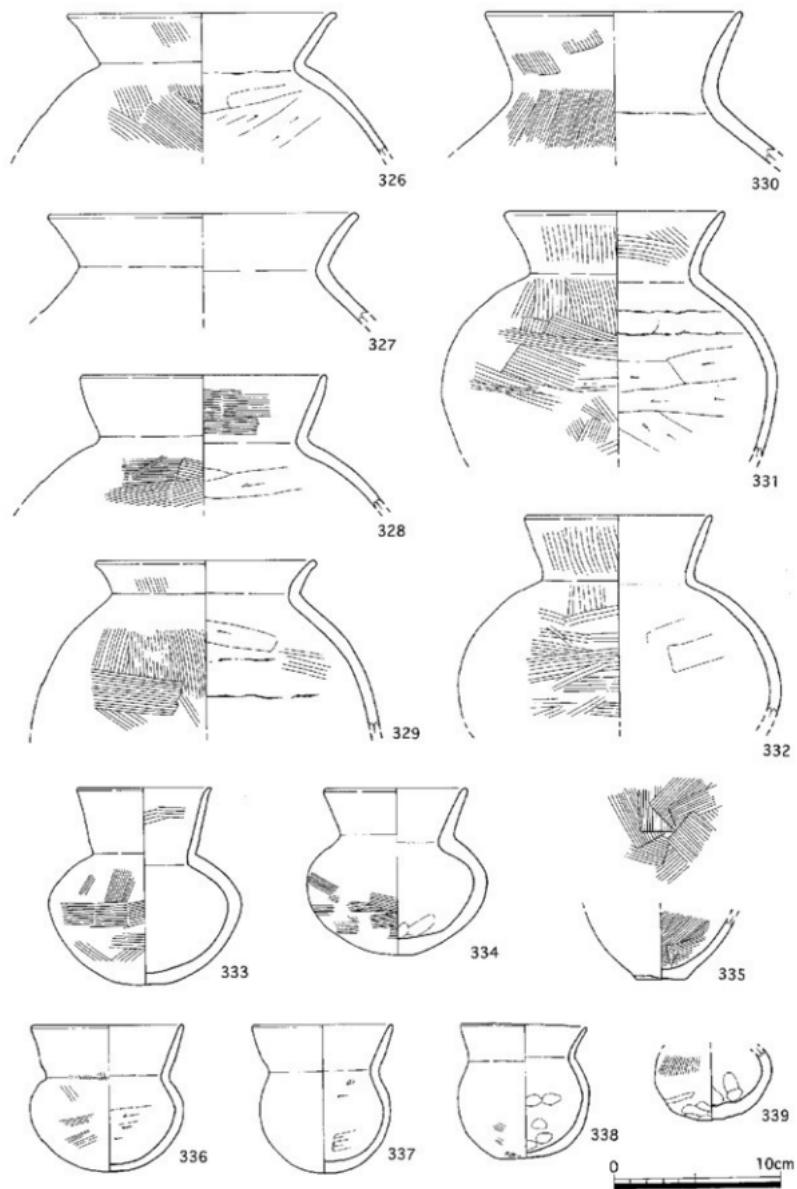
縁はわずかなくびれを経てそのまま直立する。口径9.2cm、器高8.9cmを測る。器表は磨滅する。320・321は高坏の坏部である。口辺部が直線的に開く器形である。内外面に細い磨きを施す。320は口径17.8cmで、内面は放射状の磨きで暗文を呈する。321は口縁部がひずんでおり16.0～16.4cmを測る。内面の磨きは方向がでたらめで、器表面に砂粒が多く残っている。磨きにしては精製品の感じがしない。322は脚付壺である。口径12.4cm、器高10.8cm、脚径9.8cmを測る。脚部は低く外にハの字に開く。外面に煤が付着する。323・324は小型丸底壺である。323は完形品で口径8.4cm、器高8.5cmを測る。胸部は球形で、口径と胴部径がほぼ等しい。外面は刷毛目、内面は削り。胎土は砂粒が多く含まれる。底部に穿孔する。324は完形品で口径10.0cm、器高7.6cmを測る。口縁部径が胴部最大径よりも大きい。体部外面は刷毛目、内面はなめらかになれる。325はガラス玉である。径7mmを測り、色はコバルトブルーを呈する。

SK 0 4 4号土壤 (第80回)

SK 0 3 8の北西4mに位置する。径0.9m、深さ30cmの不整円形の土壤である。埋土は黒褐色を呈する。埋土中から大量の甕、壺、高坏等が出土した。小さく浅い土壤にも関わらず、図化できる土器だけでも17点を数える。土器は無秩序に投げ入れられている。完形に接合できる土器も複数あり、使用できなくなった土器の廃棄土壤とも考えにくい。土壤の性格は不明。出土遺物から古墳時代中期前半に位置付けられる。

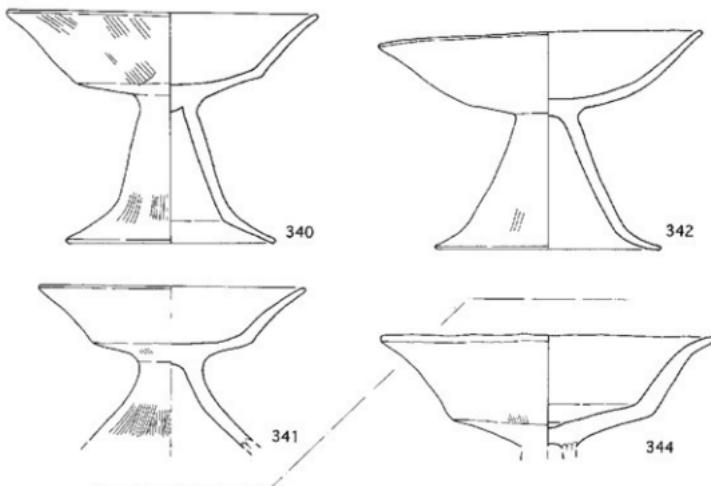
出土遺物 (第82回)

コンテナ4箱の土器器が出土した。須恵器は出土していない。甕の口縁部が多く出土しているが、胸部の破片が少量しかない。326～330は甕の口縁部である。326は頸部で鋭く屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。復元口径16.0cmを測り、体部外面は刷毛目、内面は削りで調整する。327も口縁部が直線的に開き、復元口径18.4cmを測る。328は頸部がすぼまり、口縁部はやや内湾気味である。復元口径14.6cmを測り、肩部外面は横刷毛、内面は削り。外面に煤が付着する。329は頸部径が胴部最大径の半分ほどにすぼまり、口縁部は短く外反する。復元口径13.2cmを測る。胴部外面は綾刷毛のち横刷毛、内面は横方向の削りと刷毛目を施し、肩に粘土組積上げ痕が残る。330は頸部がゆるやかに緩く屈曲し、口縁部は外傾する。口径15.4cmを測る。331・332は中型壺である。331は口径13.2cm、胴部最大径20.0cmを測る。頸部がすぼまり口縁部は外反する。胴部外面は綾刷毛のち横刷毛、内面は削りを施す。332は復元口径11.2cm、胴部最大径19.4cmを測る。胴部外面は粗い刷毛目、内面は削りで調整する。333・334は小型の直口壺である。333は復元口径8.0cm、器高11.8cmを測る。体部は横長の偏球形を呈し、口縁部は長く直立する。334は復元口径8.5cm、器高10.0cm、胴部最大径10.7cmを測る。器壁が厚く外面に刷毛目を施す。335は畿内V様式系の壺の底部片である。内底に簾状刷毛を施す。336～338は小型丸底壺である。336は偏球形の体部で、口径と胴径がほぼ等しい。ほぼ完存し口径9.0cm、器高8.7cmを測る。337は体部が球形で、口径と胴径がほぼ等しく、口辺部の長さは胴部より短い。完形品で口径8.4cm、器高8.8cmを測る。338は体部が球形に近く底は平坦で、口縁部は短い。ほぼ完存し口径7.5cm、器高8.0cmを測る。339は手づくね土器である。外面上半に刷毛目を施す。340～342は高坏である。340は完形品で口径18.5cm、器高13.7cm、底径12.4cmを測る。中膨らみの脚部で、脚付け根の内部は突出する。坏部の口辺は外反し、外面を右下がりの刷毛目、内面を横刷毛で調整する。341は坏部が外反し、脚部は大きくハの字に開く。復元口径15.8cm。342はハの字に大きく開く脚部を持ち、坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部でやや外反する。坏部は大きくひずみ、口径19.2cm、器高13.0cm、底径13.4cmを測る。

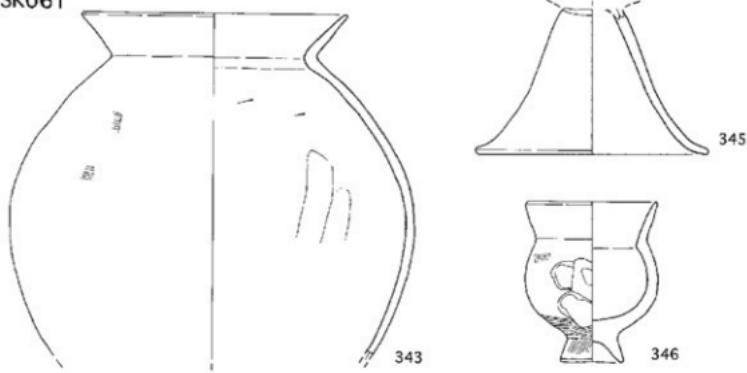


第82図 SK 044出土遺物実測図① (1/3)

SK044



SK061



第83図 SK044・061出土遺物実測図 (1/3)

S K 0 4 5 号土壙 (第78図)

S B 0 8 5 の西に位置する。長軸1.3m、短軸0.85m、深さ30cmの楕円形の土壙で、埋土は暗褐色を呈する。9点の土器片が出土したのみである。須恵器の甕あるいは壺の破片1点と、甕の口縁部片1点が含まれるが、図化できるものはない。

S K 0 6 1 号土壙 (第80図)

S B 0 8 5 付近で検出された。平面形は長軸1.0m、短軸0.6mの不整形プランである。30cm程度の深さで平坦面を形成し、北側が更にそこから一段落ちて深さ55cmの楕円形の底面に至る。埋土は

黒褐色を呈する。上層で土師器の壺、小型丸底壺、高坏等がまとまって出土した。下層からの土器の出土は少ない。出土遺物より古墳時代中期に位置付けられる。

出土遺物（第83図）

コンテナ2箱の土師器が出土した。**343**は壺である。復元口径15.8cmを測る。頸部がしまり口縁部は短く外に開く。器面の磨滅が著しい。内面は上半に削り痕、中程に指ナデによる縱方向の窪みがみられる。**344**は高坏の坏部である。口径19.8cmを測り、肉厚で口辺部は外反する。**345**は高坏の脚部である。ハの字に開き裾部でゆるく外反する。**346**は脚付の小型丸底壺である。ほぼ完存し、口径7.8cm、器高9.5cmを測る。脚は非常に小さく、胴径と口径はほぼ等しい。胴部に焼成時に出来た器表の剥落がみられる。

SK069号土壙（第78図）

SE070の南側に隣接し、SD031を切る。長軸0.95m、短軸0.7m、深さ30cmを測る隅丸方形の土壙である。遺物は出土しなかった。

SK071号土壙（第78図）

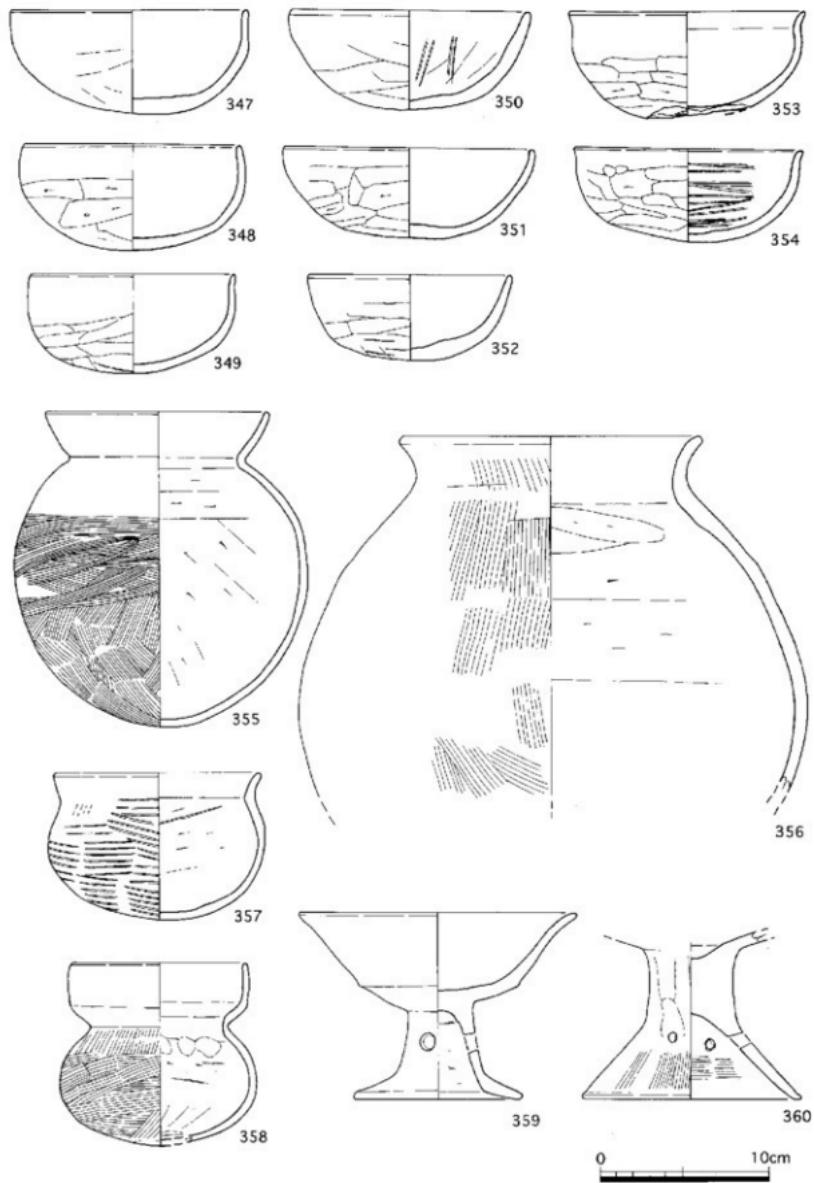
調査区西部でSD031と重複あるいは隣接して検出された井戸・土壙群のひとつで、その中心に位置する。SD031の掘り下げ中に存在を確認した。SD031を切っている。長軸2.4m、短軸1.5mの方形土壙である。検出レベルからの深さは35cmで、遺物は出土していない。

SK072号土壙（第80図）

SK071の北西側に隣接し、SD031を切る。長軸95cm、短軸75cm、深さ30cm以上の楕円形の土壙である。埋土中から土師器の椀、壺、高坏、壺が出土した。とくに椀は8点出土し、そのほとんどが完形品である。古墳時代前期の布留壺が含まれるが、全体的に新しく古墳時代中期後半に位置付けられよう。

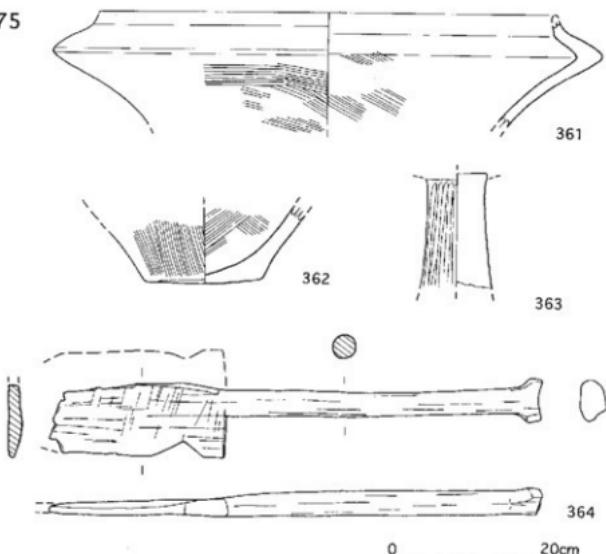
出土遺物（第84図）

コンテナ4箱の土師器が出土した。須恵器は出土していない。**347**～**354**は椀である。丸底で口縁部はまっすぐなもの（**347**～**352**）と端部で軽く外に曲げるもの（**353**・**354**）とがある。**351**が口縁部を1／3欠く以外はすべて完形品である。口径12.2～15.0cm、器高5.1～6.3cmを測る。外面は口縁部付近までヘラ削りをした後、口縁部を横ナデする。内面はナデ調整で、**354**は横方向の細い磨きを施す。**353**は底部に焼成時にできた器面の剥落がみられる。**355**は布留壺である。口縁部は内湾し、体部は球形。器壁はうすく、体部外面は胴部に横方向、底部に縱方向の細かい刷毛目を施した後、肩部を横ナデする。内面は肩部を横方向の削り、それより下は削り上げる。内外面に煤が付着する。**356**は壺である。復元口径18.0cm、胴部最大径30.0cmを測る。頸部がすぼまり、口縁は短く外反する。最大径部が下位にあるので、なで肩ですんぐりした器形になる。外面は粗い縱刷毛、内面は横方向の削りで調整し、外面に煤が付着する。**357**は鉢である。完形品で口径12.2cm、器高8.7cmを測る。丸底で口縁部は短く外傾する。外面に粗い叩き、内面に削りを施す。外面には煤が付着する。**358**は壺である。口縁部は二重口縁状を呈し、体部外面は縱刷毛のち横刷毛、内面は削りで肩部に指頭痕が残る。復元口径10.4cm、器高10.8cmを測る。**359**・**360**は高坏である。**359**は完形品で口径16.4cm、器高11.0cmを測る。脚部は非常に小さく、透かし孔を1つ有する。**360**は中実の脚柱部から裾が外に開く。透かし孔を4つ有する。

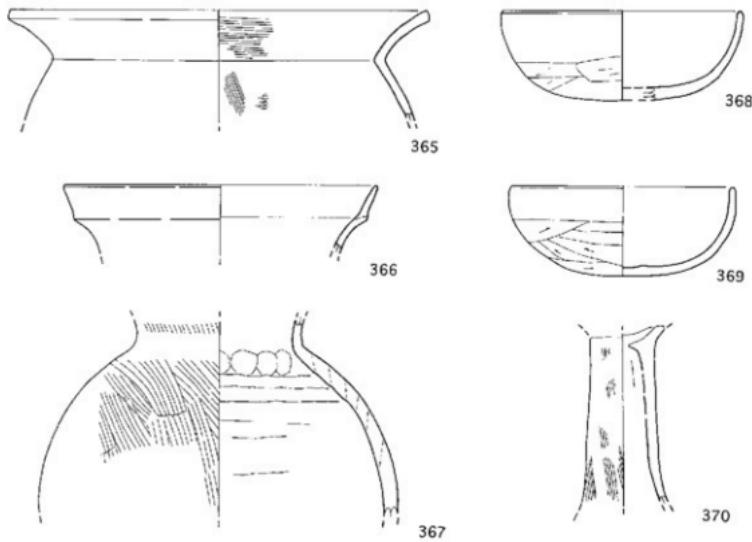


第84図 SK 072出土遺物実測図 (1/3)

SK075



SK079



第85図 SK 075・079出土遺物実測図 (1/3、364は1/6)

SK075号土壤 (第78図)

SK071の南側に隣接し、SD031、SE075を切る。長軸1.7m、短軸1.1m、深さ60cm以上の方形土壤である。埋土は灰色がかった黒色粘土で、底から木製の鏁が出土した。

出土遺物 (第85図)

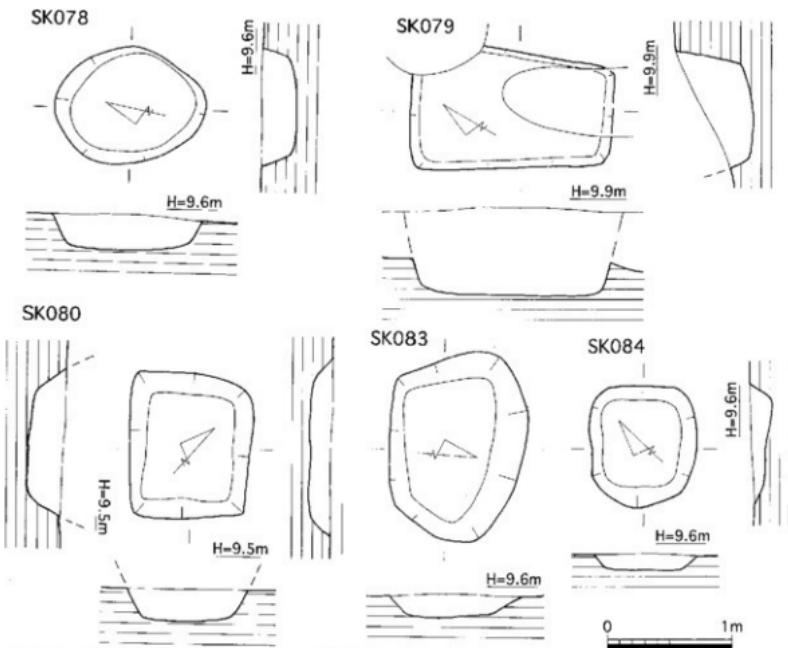
コンテナ1箱の弥生土器が出土した。須恵器2点が混入する。361は複合口縁壺の口縁部である。反転後内側に強く折れる。362は甕あるいは壺の底部片である。平底で底径7.2cmを測る。底面にも刷毛目がつく。363は高环の脚部である。中実で縱方向の磨きを施す。364は木製の鏁である。鏁先は半分が欠損する。残長58.6cmを測る。

SK078号土壤 (第86図)

SK075の西側に隣接する。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ25cmの楕円形の土壤である。遺物は出土しなかった。

SK079号土壤 (第86図)

SK071の東側に隣接する。SE073に切られ、SD031を切る。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ70cmの方形土壤である。



第86図 SK078・079・080・083・084実測図 (1/40)

出土遺物（第85図）

コンテナ3箱の土師器・弥生土器が出土した。365は甕の口縁部である。く字状口縁は端部に面をもち、頸部内面に明瞭な稜をつくる。復元口径24.8cmを測る。外面は磨滅し、内面は刷毛目を施す。366は二重口縁甕である。復元口径18.6cmを測る。367は壺である。外面に粗い継刷毛を施す。内面は横ナギ、肩には粘土紐積上げの痕跡、頸部に指頭痕が残る。368・369は椀である。口径13.4～14.4cm、器高5.3cmを測る。外面下半はヘラ削り。370は高坏の脚部で、細長い筒状を呈する。

SK080号土壤（第86図）

SE076の南西に隣接して検出された。SD031に切られる。長軸1.1m、短軸0.9m、SD031底面からの深さ30cmを測る方形土壤である。遺物は出土しなかった。

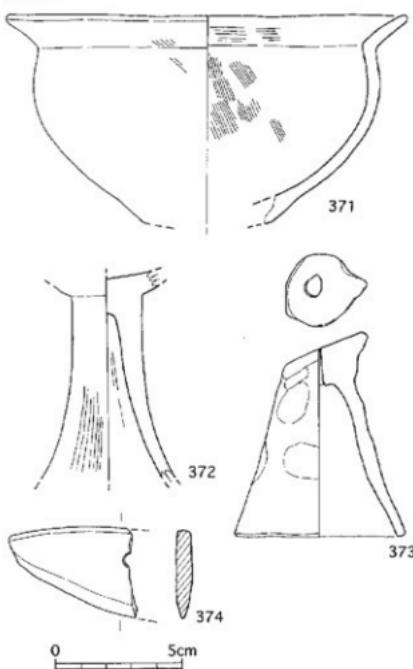
SK083号土壤（第86図）

調査区の北西隅に位置する。長軸1.5m、短軸1.1m、深さ20cmの方形土壤である。石包丁が出土した。出土遺物より弥生時代後期に位置付けられる。

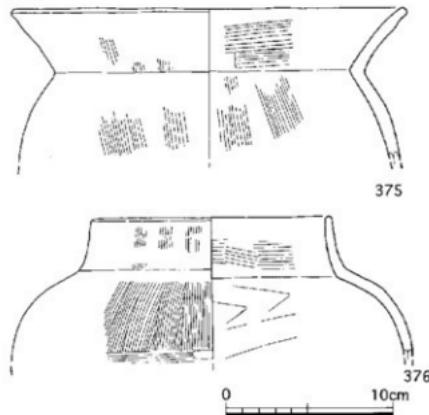
出土遺物（第87図）

コンテナ2箱の弥生土器が出土した。371は鉢である。半球形の胴部から口縁部が外に折れる。底部は凸レンズ状になりそうである。外面は磨滅が著しい。内面は継刷毛で調整し、復元口径24.0cmを測る。372は高坏の脚部である。長脚で筒状の脚柱は裾部でゆるやかに広がっていく。器面は磨滅する。373は支脚である。ほぼ完存し底径10.2cm、器高12.2cmを測る。頂部に円孔を有する。374は石包丁である。紐通し穴の部分で欠損し、1／3が残存する。

SK083



SK084



第87図 SK083・084出土遺物実測図(1/3、374は1/2)

SK 084号土壌 (第86図)

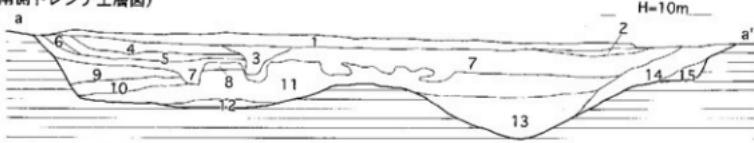
SK 083の北西に位置する。長軸0.9m、短軸0.8m、深さ10cmの方形土壌である。

出土遺物 (第87図)

コンテナ1箱の土器が出土した。375は甕の口縁部である。く字状口縁は頸部内側に明瞭な稜を有し、口縁端部は丸くおさめる。胴部は内外面とも縦刷毛を施す。復元口径23.6cmを測る。376は甕である。肩が張り、短く直立する口縁部はやや内傾する。外面に細かい刷毛目を施す。

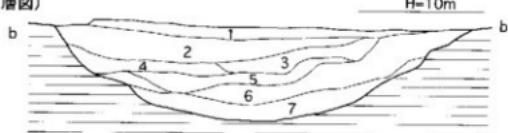
5) 溝

(南側トレンチ土層図)



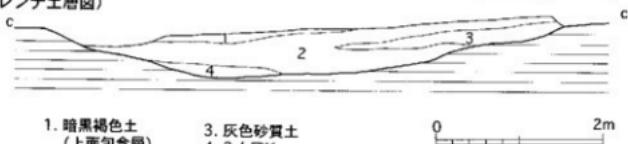
- | | | |
|---------------|----------------|------------|
| 1. 赤味をおびた暗褐色土 | 6. 暗灰色粘質土 | 11. 暗灰色シルト |
| 2. 暗灰色土 | 7. 黒色粘質土。粘性つよい | 12. 粗砂 |
| (1,2.は上面包含層) | 8. 暗灰色粘質土 | 13. 黒灰色粘質土 |
| 3. 黑褐色砂質土 | 9. 暗灰色シルト | 14. 暗灰色シルト |
| 4. 黒色粘質土 | 10. 暗灰色粘質土。 | 15. 灰色砂質土 |
| 5. 黒～黒褐色砂質土 | 八女粘土ブロックを含む | |

(中央部トレンチ土層図)



- | | |
|--------------------------|--------------|
| 1. 赤味をおびた暗褐色土
(上面包含層) | 5. 暗灰色砂質土～粗砂 |
| 2. 黒灰色土 | 6. 暗灰色粘質土 |
| 3. 黒色粘質土 | 7. 灰色砂質土～粗砂 |
| 4. 暗灰色土 | |

(北側トレンチ土層図)



- | | |
|---------------------|----------|
| 1. 暗黒褐色土
(上面包含層) | 3. 灰色砂質土 |
| 2. 黒色粘質土 | 4. 3.と同じ |

第88図 SD 031土層図 (1/60)

S D O 3 1 号溝（第88図）

調査区西側を南東から北西方向に向かって流れる溝である。幅は2.5~4.0m、検出面からの深さ約80~120cmを測り、なだらかな崖面から幅広の底面に至る。底面には凹凸があり、底面への粗砂、シルトの堆積は、水が流れていったことを示している。南側トレンチ近辺では溝が東側に抉られる。溝の北側ではこれを切る古墳時代中・後期および弥生時代後期の土壙、井戸が10基ほど検出された。溝の埋土は黒色粘土を主とし、その上面には古墳時代後期から古代にかけての暗黒褐色土遺物包含層がうすく堆積する。埋土中からは大量の土器が出土し、上面包含層、上層、下層に分けて取り上げた。上層および下層出土遺物は弥生時代後期~終末にかけての土器が主体を占め、古墳時代の遺物も混入する。整理の結果、上層と下層では遺物に顯著な時期差が認められなかった。

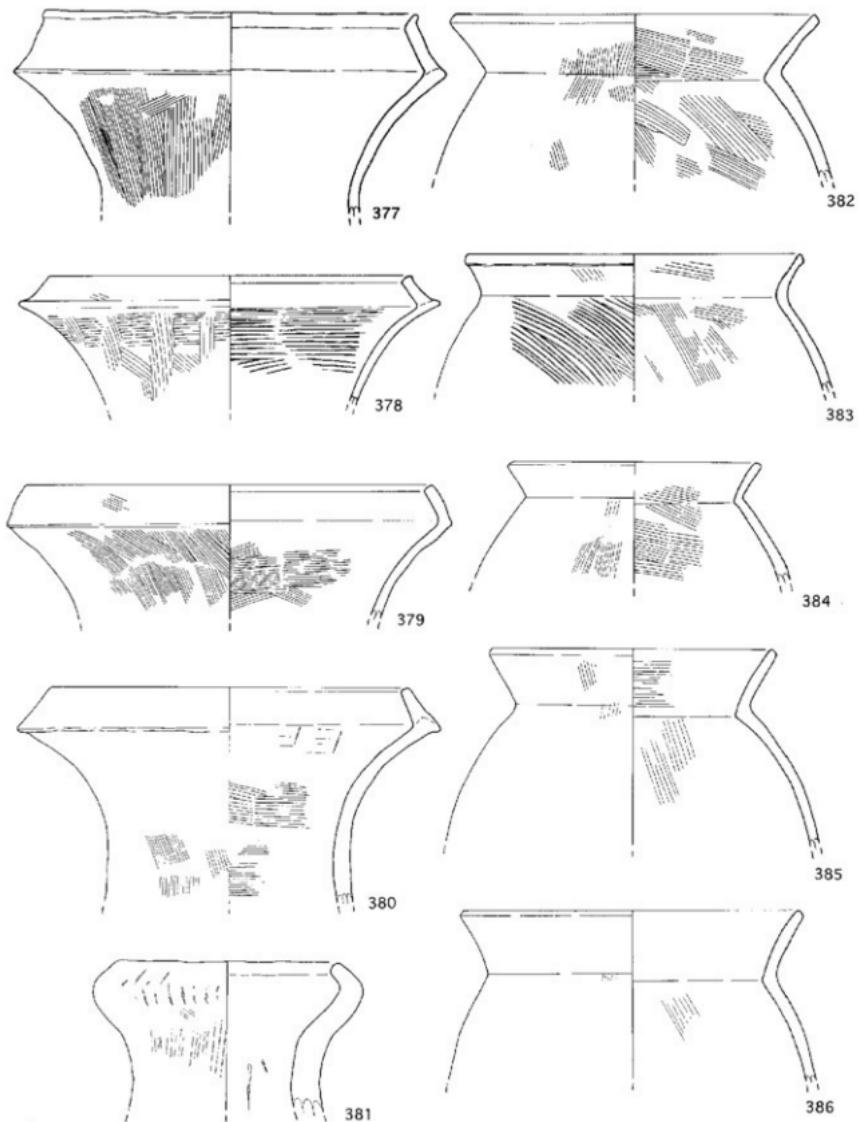
溝の存続期間は弥生時代終末頃の遺構に確実に切られているので、弥生時代後期から終末までのごく短期間だけ機能し、古墳時代にはすでに埋没している。また、この溝は明治末年の地図にある高畠丘陵の西裾の方向ともほぼ一致し、この溝の西側には遺構がほとんど存在していない。以上のことから、溝は丘陵上の集落の外縁につくられ、その周囲を画する機能を与えられていたと推測する。

出土遺物（第89~93図）

コンテナ92箱の遺物が出土した。

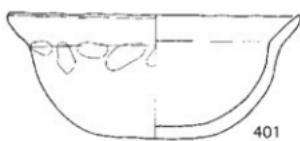
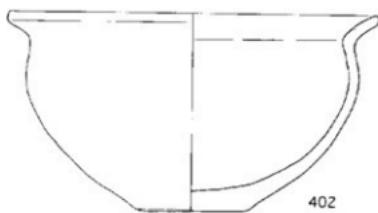
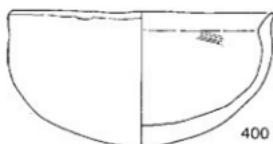
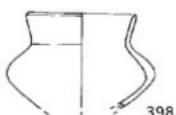
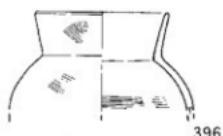
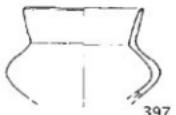
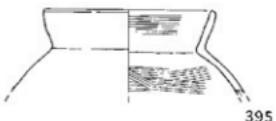
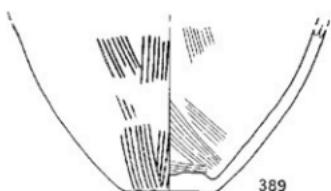
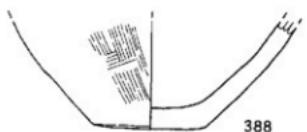
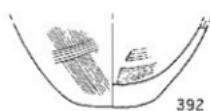
上層および下層出土の遺物（377~426）は、弥生時代後期から終末にかけて、とくに後期後半の土器が主体である。377~381は複合口縁壺の口縁部である。377~380は口縁反転部が内傾ないし内湾する。復元口径21.2~24.0cmを測り、頭部の内外面に綿刷毛を施し、口縁反転部は横ナデする。378の外面調整は横刷毛後に綿刷毛を等間隔で施しており、装飾的である。381は弥生時代中期の袋状口縁壺の形態を残すもので反転部には粘土の受け目が筋状に入っている。後期初頭のもの。382~386は甕の口縁部である。く字状口縁で復元口径14.2~21.8cmを測る。387~394は甕・壺の底部である。凸レンズ状の底部が多いが、平底のものも少量出土している。395・396は直口壺である。397・398は小型短頸壺である。399は長頸壺である。長頸壺の出土は珍しく、調査全体でこの1点のみである。400~402は鉢である。浅くて口縁部が外反する。口径・器高は、400が $15.8 \cdot 8.0\text{cm}$ 、401が $17.4 \cdot 7.4\text{cm}$ 、402が $22.2 \cdot 11.7\text{cm}$ を測る。403~405は高壺の脚部である。403・404は細い筒部が裾でラッパ状に開き、透かし孔を3つ有する。405は中実で透かし孔を有する。406~408は器台である。406は受け部の端部が強く内傾する。407は受け部端面に刻み目を施す。408は脚部の中央から上位にかけて6つの透かし孔を不規則に穿っている。409~413は脚付土器である。体部は長胴の甕形と浅い鉢・壺形があるようだ。414は脚付鉢で口径18.8cm、器高11.0cm、底径9.6cmを測る。415~417は杓子である。418は土製紡錘車である。419は支脚である。器高13.2cm、底径12.0cmを測り、頂部はほぼ水平で突起が上方に伸び、中央に孔を穿つ。外面は叩き、内面は指ナデで調整する。420は砥石である。細長く中央部がくびれた形状を呈し、両端を除く4面は平滑に研磨されている。上面の片側には細長い窪みがあり、鉋（やりがんな）等を研いだ痕跡であろう。長さ34.6cm、幅8.8cm、厚さ4.4cmを測る。中ほどで半分に折れ、大きい方の破片がSDO 3 1から、小さい方の破片が溝から遠く離れた井戸SE 0 8 1から出土し整理段階で接合するのを確認した。421・422は石包丁である。423・424は石製紡錘車である。425は指輪状石製品である。材質は礫石で、全体をきれいに研磨している。穴の内径は10mmを測り、成人的指はとても入らない。糸を通して玉として使用したものか。426はガラス玉である。径7mmを測り、色はコバルト-ブルーを呈する。

上面包含層からは古墳時代の土師器、須恵器、陶質土器や古代の平瓦が出土した。427は畿内V様



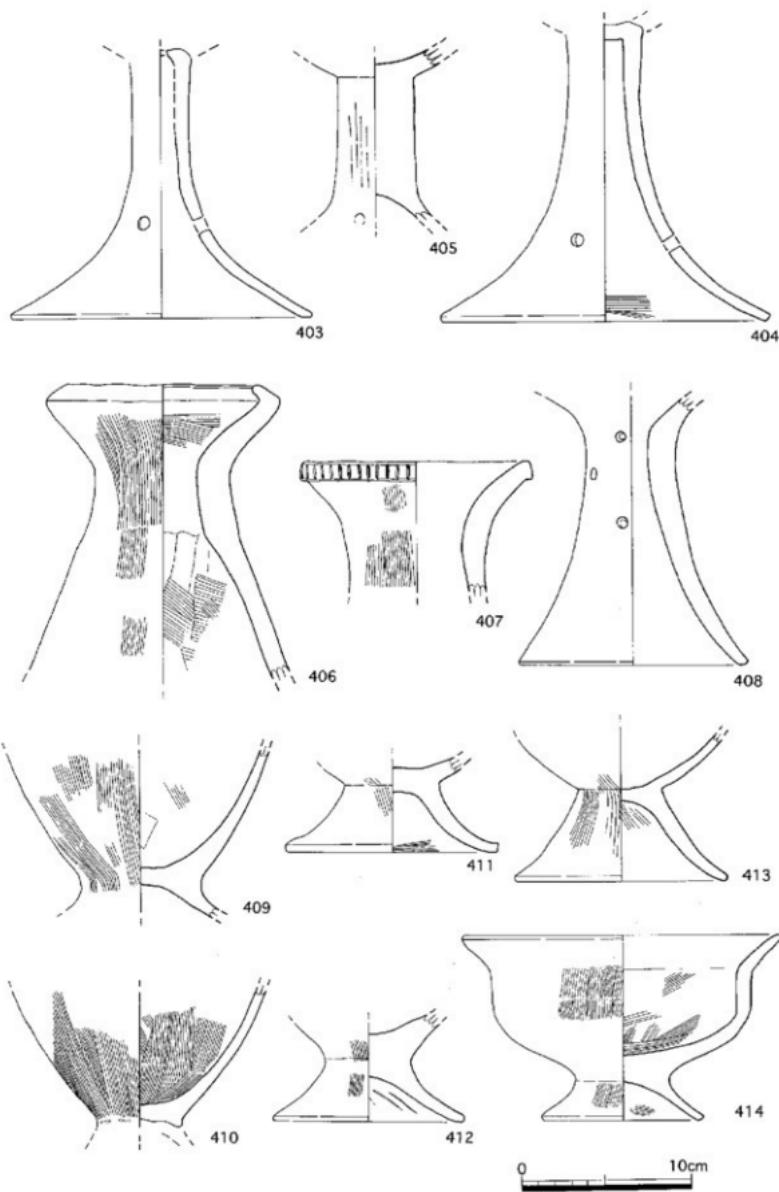
0 10cm

第89図 SD 031出土遺物実測図① (1/3)

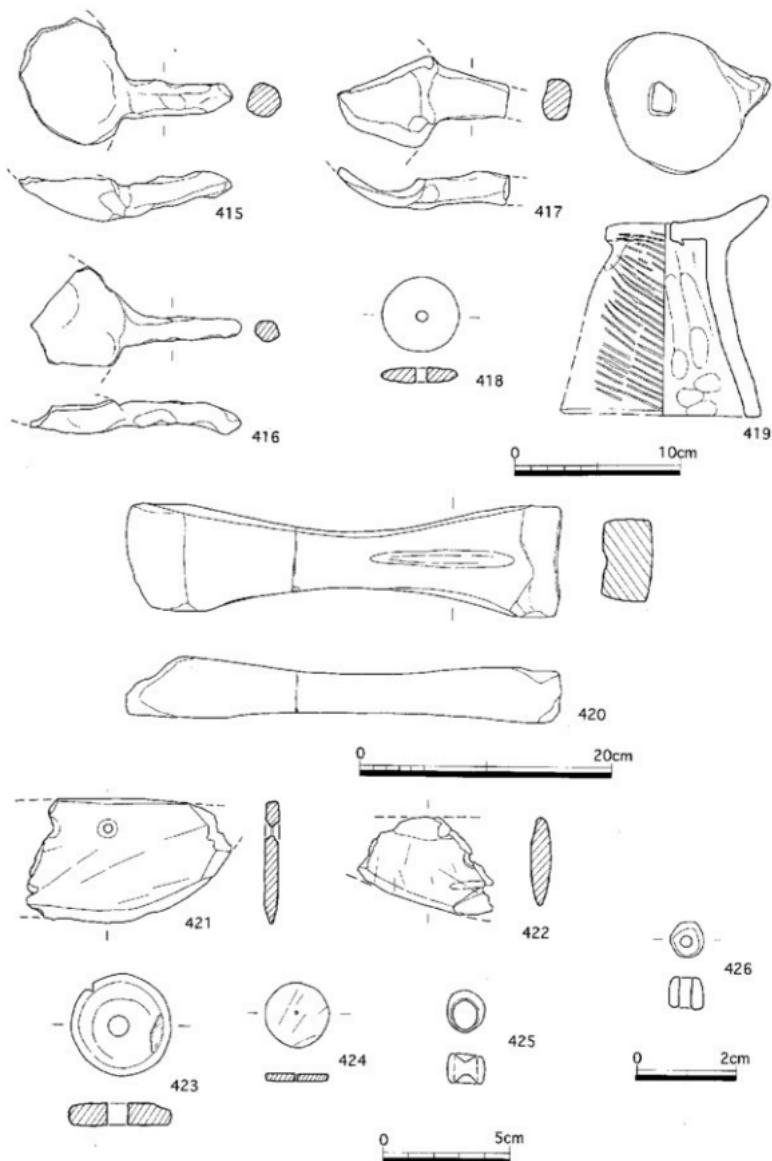


0 10cm

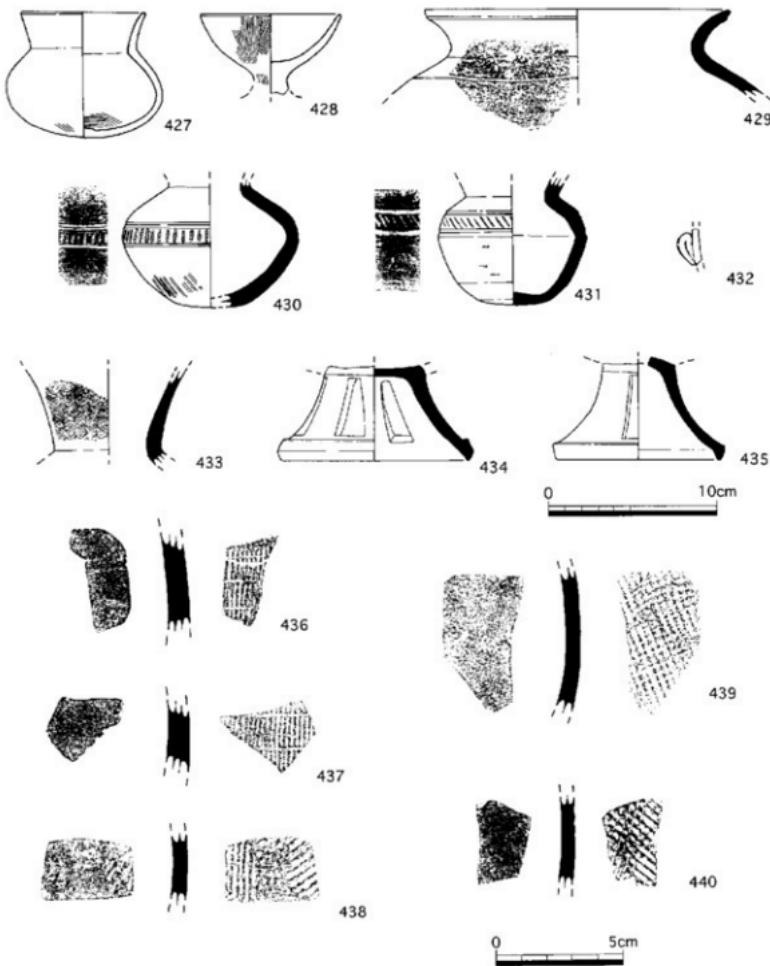
第90図 SD 031出土遺物実測図② (1/3)



第91図 SD 031出土遺物実測図③ (1/3)



第92図 SD 031出土遺物実測図④ (415~419は1/3、420は1/4、421~425は1/2、426は1/1)



第93図 SD 031上面包含層出土遺物実測図(427~435は1/3、436~440は1/2)

式系の小型丸底壺である。ほぼ完存し、口径7.3cm、器高7.5cmを測る。内底に縦状刷毛を施す。428は庄内系楕形高壺の壺部である。口径8.4cmを測る。427・428は庄内式併行期の古式土師器である。429・436・437は陶質土器である。429は壺の口縁部である。口縁部は緩く外反し、端面との境に明瞭な稜をつくる。内外面とも平滑に横ナアし、外面の肩に1条の沈線をめぐらす。内面の肩に不明瞭ながら面があり、無文の當て具痕の可能性もある。436・437は壺の破片で、同一個体であろう。外面に繩席文を施文後、横位の沈線を数条めぐらす。焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。断面を見ると、表

裏の器面付近は還元焼成で須恵質に焼けているが、内部は土師質の焼成で、3層に見える。430～435・438～440は5世紀代の須恵器で、初期須恵器が含まれる。430・431は頭である。430は体部中位に上下2本の沈線で囲まれた刺突文の文様帯があり、外面底部付近は叩きの後ナデを施す。431は頭部の基部が広く、体部上半に上下2本の沈線で囲まれた刺突文の文様帯をもつ。下半は回転ヘラ削りを施す。432は高杯の装飾耳である。433は頭の頭部か。外面に波状文を施す。434・435は高杯の脚である。434は4つ、435は3つの透かし窓を有する。438～440は壺の小片であろう。438・439は外面に擬格子文の叩きを施す。440は外面に格子文の叩きを施す。焼成不良でやや軟質、灰白色を呈する。

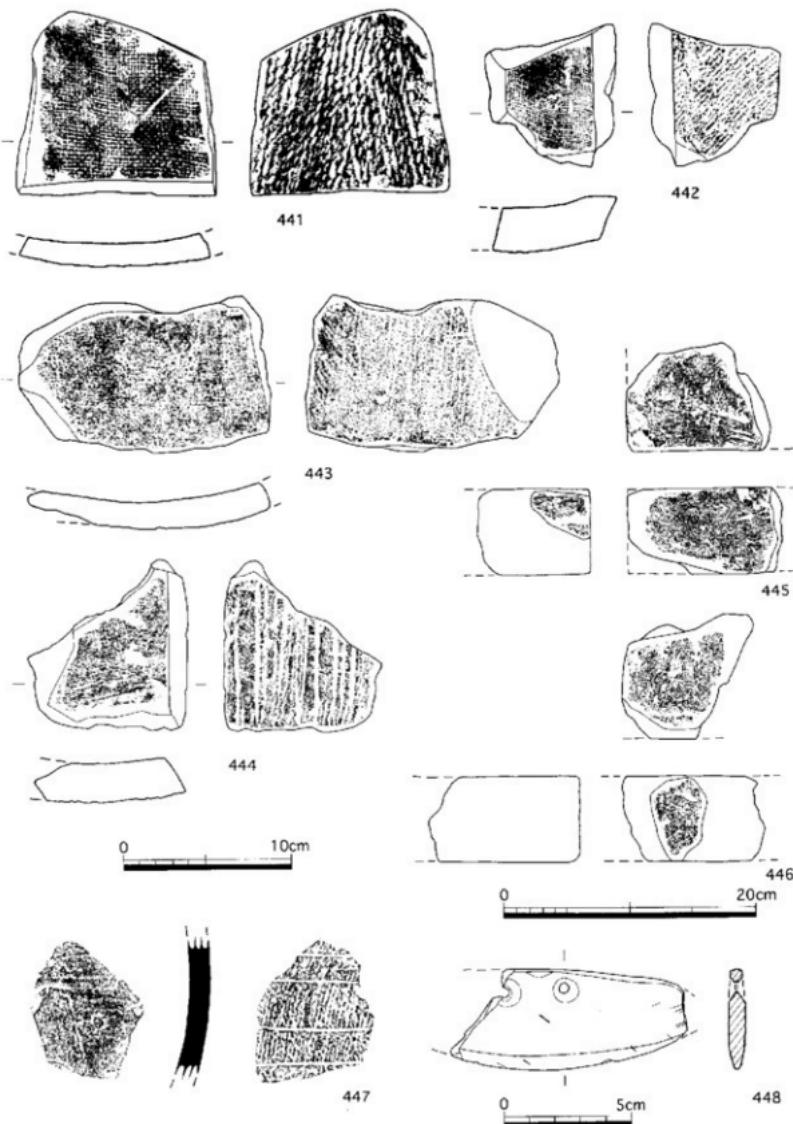
6) 古墳時代から古代にかけての遺物包含層

調査区西側のSD031号溝周辺を中心に、遺構検出面上に暗黒褐色粘土の遺物包含層が堆積していた。調査期間の割約から精査は行わず、重機で表土を剥ぐ段階で包含層の土を他の排土とは別にして集め、その中から遺物を探集した。包含層埋土からは弥生土器、古墳時代から古代にかけての上師器、須恵器、平瓦、埠などが出土した。遺物総量はコンテナ13箱におよぶ。須恵器がコンテナ4箱出土しているが、古代にくだるものではなく、5世紀代の古いものが多い。初期須恵器、陶質土器も出土している。包含層の遺物は古墳時代中期～後期にかけての上器が主体をなしている。本調査区の北東の丘陵上に古代に高烟庵寺が存在したと推測されている。この関係で述べておくと、II・III区では平瓦約50点、埠2点が出土した。また、前述のSD031上面においても該期の包含層遺物の堆積を認め、陶質土器、初期須恵器が出土している。

この包含層の堆積の時期についてすこし検討を加えてみたい。調査区中央の段差形成に関わる大規模な地形変化の時期を特定する手がかりとするためである。また、このことを問題にする背景には、高烟遺跡周辺の比恵遺跡群、那珂遺跡群の調査例で、中世に削平された地形の直上に古墳時代や古代の遺物ばかりで中世の遺物を全く含まない包含層がある事例が時々あるということを付言しておく。今回の調査では、古墳時代中期のSE037、040、041の各井戸において、埋土上面に包含層がレンズ状に沈み込んでいるのを確認した。井戸の検出面上には包含層は堆積していなかった。したがって、井戸の埋没とそこへの包含層の堆積は連続している。また、地形の削平が包含層の堆積より後の出来事であることも分かる。さらに、本調査区では古墳時代後期の遺構がほとんど存在しないのでこの集落の廃絶が古墳時代後期頃に起こったと考えられる。以上の点を考え合わせて、包含層の形成時期は、古墳時代後期に集落の廃絶と連動して始まり、古代にかけて堆積したと考える。

出土遺物（第94図）

441～444は平瓦である。凹面には布目痕が、凸面には441・442は縦目叩き、443・444は平行叩きの痕跡が残る。圓化していない平瓦も凸面の文様はほとんどがこの2種類で、ほかに格子目文のものが1点だけ存在する。焼成があまく軟質、灰白色を呈するものが多く、概して磨滅が激しい。445・446は埠である。素文で、いずれも厚さが6.8cmと厚い。焼成は良好で灰色を呈するが、欠損および磨滅が著しく、その規格については明らかでない。447は陶質土器である。壺の胴部片であろうか。外面は縄摩文を施し後、残存部だけでも横位の沈線を4条めぐらす。内面は平滑になで、胎土は精緻、焼成良好で青灰色を呈する。448は石包丁である。紐通し穴の部分で半分近くが欠損、残存側の先端部も欠損する。



第94図 包含層出土遺物実測図

(441~444は1/3、445~446は1/4、447~448は1/2)

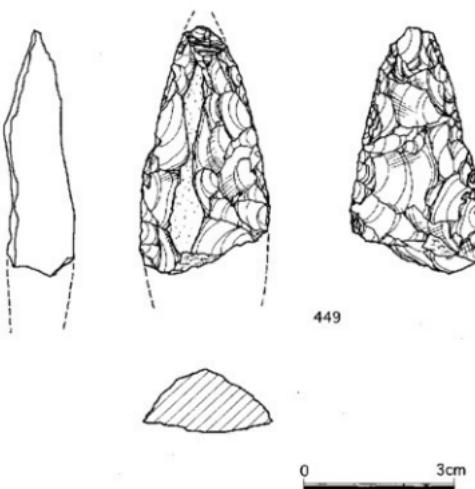
7) 旧石器

SD 031号溝の下層埋

土中から旧石器が1点出土した。第95図449は槍先形尖頭器である。石材は良質の漆黒色黒曜石であり、脈状の流理が認められ、バティナが進んでいる。背面と破断面に自然面があり、前者はやや平滑であり、後者は凹凸がある。産地は不明であるが、肉眼観察では腰岳産黒曜石に類似する。本石器が剣片素材であるのか、礫核素材であるのかは表裏両面の二次調整が入念なために明らかではない。

石器形態は木葉形に近く、両側縁は緩い曲線を描く。

先端は尖らず、丸くおさま



第95図 SD 031出土旧石器実測図 (1/1)

る。先端部裏面に先端方向からの階段状剥離を認めるが、これが衝撃剥離であるのかは判断し難い。横断面は低三角形であり、二次調整は両側からのみで、稜上剥離はない。背面の調整剥離は稜線を越えず、やや急角となっている。裏面の調整は平坦剥離であり、一部は三分の二幅まで達している。側部幅最大値のやや基部側で欠損している。欠損面は裏面側の部分的自然面（ホール）から発する単一剥離面で折断される。折断面からの二次調整はない。現存値で長さ4.9cm、幅2.5cm、厚さ1.3cmを測る。

本石器は弥生時代後期の溝に混入した单一の出土品である。本来の遺物包含層を避離しており関連遺物もない。なお同様の形態、特徴を有する尖頭器は近くでは諸岡遺跡F区、那珂遺跡23次、春日市駿河遺跡などで出土している。この種石器を集成、検討した杉原(1997)によると、本資料は筑紫野市宗原遺跡遺跡に典型例があり、氏のいうA型調整を有する槍先形尖頭器に含まれる。筑紫平野から周辺部に分布し、後期旧石器時代後半期のナイフ形石器文化終末期以前の石器群に含まれる。

杉原敏之1997「九州の尖頭器石器群 [二] 一筑紫平野の「槍先形尖頭器」—」『九州歴史資料館研究論集』
22 九州歴史資料館

4. 小結

II・III区の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落を検出するなど、多くの成果が得られた。まず、その成果を時代ごとに順を追って整理することにしたい。

本調査で出土した最古の遺物は、後期旧石器時代の槍先形尖頭器である。弥生時代後期～終末の溝SD031から出土した。混入品であり、旧石器の出土はこの1点のみである。

縄文時代に属する遺構・遺物ではなく、次にあらわるのが弥生時代後期から古墳時代後期にかけての生活遺構であり、本地区の遺構のほとんどがこの時期に属する。該期の主な検出遺構は、堅穴住居跡13軒、掘立柱建物6棟、井戸13基、土壙15基、溝1条である。古墳時代中期の滑石製白玉の製作工房1軒が含まれる。

この集落は古墳時代後期のうちに廃絶するようであり、その上に古墳時代中後期から古代にかけての遺物包含層が薄く堆積する。古代の遺物としては平瓦50点程度、埠2点が出土し、本調査区の北東側の丘陵上に存在したとされる高畠庵寺ないし官衙的施設との関連をうかがわせる。古代の遺物量は多くなく、他地点から土砂に混じて流入したものであろう。

集落および古代の包含層は調査区中央の80cm程度の段差を伴う大規模な地形の削平を受けており、遺存状況は悪い。地形の削平は直上に耕作土がのことから、水田あるいは畑の開墾によるものと推測する。耕作土からの遺物の出土は非常に少なく、土地造成の時期を正確に知る手がかりはありませんが、包含層内に中世以降の遺物が皆無であることから、古代のうちに耕作地化が行われたものと考えている。以後、本地点は永らく水田あるいは畑として利用されていたようだ、該期の遺構はなく、土層の堆積はうすく細かな分層もできない。高畠という当地の字名も、耕作地としての土地利用を裏付けている。

1) 集落について

本項では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡についてやや詳しく検討してみたい。調査区の西端部を除く、旧地形の台地上にあたる部分全域にわたって生活遺構が分布していた。古代の耕作地化に伴う地形削平や擾乱を受け、住居等の浅い遺構は遺存状態が良好ではない。主要な検出遺構は、堅穴住居跡13軒、掘立柱建物6棟、井戸13基、土壙15基、溝1条である。

過去の調査の成果から、台地上に弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在することは確認されていた。例えば、台地北から東側にかけての縁辺部で検出された溝から大量の古式土師器と木製品が出土している。また、台地上における第11次調査は幅1mのトレンチ調査ではあったが、夜白式～板付II式期の貯蔵穴6、弥生時代後期～古墳時代中期の堅穴住居跡14などが検出された。しかし、台地上における2750m²におよぶ面的な発掘調査は今回が初めてであり、該期集落の様相をさらに明確にすることができた。

第3表に遺構の時期的分布を示す。集落の主たる構成要素である堅穴住居跡、掘立柱建物に詳細な時期が特定できないものが多い点が残念である。これは削平による遺存状態の悪さと出土遺物の少なさに起因するが、時期の細分が困難な遺構についても、弥生土器、土師器、須恵器の出土によって分類し示している。全体的な集落の動向を把握する上で参考にしていただきたい。

集落は弥生時代後期後半に形成され、当初からかなりの規模であったようだ。確實にこの時期と判定できる住居はないが、切り合ひ関係からSC063・065・054あたりはこの時期の住居である可能性が高い。井戸が4基存在することも相当な規模の集落だったことを裏付けている。調査区西側に位置するSD031は弥生時代後期後半～終末にかけての短期間だけ存続した。台地縁辺部との

第3表 時期別遺構分布表

	弥生時代後期	弥生終末・古墳初頭	古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期
竪穴住居跡		SC057 SC059	SC053	SC052 SC058 SC066	
溝	SD031				
井戸	SE039 SE043 SE046 SE070	SE060 SE081		SE037 SE040 SE041	SE076
土壌	SK075 SK083	SK035	SK038	SK036 SK044 SK061 SK072 SK079	
	弥生土器出土	土師器出土	須恵器出土		
	SC063 SB047 SB050 SE074	SC065 SB048 SB051 SK084	SC056 SE073	SB049 SK045	

境界に位置することから、集落を周囲と画するための区画溝ではなかったか。ちなみに、遺物だけでは、弥生時代中期の大型精製壺・壺棺片がSE077から出土、後期初頭の袋状口縁壺の形状を残す複合口縁壺1点がSD031から出土している。しかし、前者は明らかに2次的な投棄によるものであり、集落の形成時期をさらに遡らせるだけの積極的な証拠は見出せない。

集落は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけても引き続き一定の規模を保って続いている。在地系土器とともに、外来系の古式土師器も多く出土しており、畿内文化との接触・受容という大きな社会の変動にも柔軟に適応したようである。

古墳時代前期の遺構は非常に少なく、SC053とSK038の2つしかない。この時期の指標となる布留甕についてもほとんど出土していない。集落はこの時期に画期を迎え、非常に小規模となってしまった。台地内で集落のセンターが移動したのか、住民がこの台地に見切りをつけ集団で出ていったのか、疫病で多くの人が死んだのか。この静的現象の背景として、いかなる動態を想定するのが妥当なのは分からぬ。ただ、高烟遺跡がその台地全面の調査が実施されているわけではないので、台地上の別地点に古墳時代前期の集落がある可能性も高い。現時点では、この地点に限っての現象として、古墳時代前期における集落の衰退を指摘しておく。

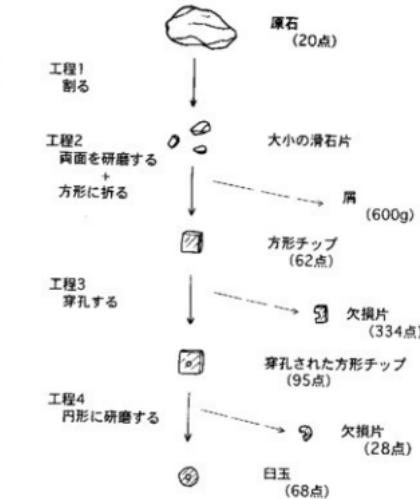
古墳時代中期には、一転して遺構が爆発的に増加する。SC058では、滑石製白玉、木製品、滑石原石がまとめて出土し、滑石製品の製作工房であることが確認できた。また、陶質土器、初期須恵器が20点程度出土したことでも注目される。質・量ともに高烟集落は最盛期を迎えたと言える。

古墳時代後期に集落は突然廃絶してしまう。検出された遺構は後期前半のSE076のみである。出土した須恵器を見ても5世紀代のものが多く、6世紀にくだるものは少ない。遺構面上への古墳時代中・後期から古代の遺物包含層の堆積、それに統いて古代のうちには行われた耕地化。これら土地利用形態の変化も、後期の早い段階で集落が廃絶されることを前提にして起こり得ることである。

2. 滑石製臼玉の製作工程

古墳時代中期末、5世紀末の住居SC058から、滑石製臼玉、未製品、滑石原石、大量のチップがまとまって出土し、滑石製品の製作工房であることを確認した。資料の採集にあたっては、遺構の精査中に滑石粉末が埋土中に含まれるのを確認した時点から、埋土をすべてコンテナ箱に集めた。その後、埋土を丹念に水洗して滑石類を採集したが、このとき、ふるいの代わりにビニール製の網戸を2枚重ねて使用した。その網目は1~2mm四方である。これら一連の遺物は滑石製臼玉の製作工程を知る上で貴重な資料である。本項では、出土資料をもとにその製作過程を復元してみたい。

滑石製臼玉の製作工程については、すでに福岡県糟屋郡須恵町牛ガ熊遺跡を調査した中間研志氏による復元案がある（中間研志編1993『牛ガ熊遺跡』、須恵町教育委員会）。仲間氏の復元案を参考に作成したものが第96図である。本遺跡で出土した各段階の資料数を、参考のため



第96図 滑石製臼玉の製作工程復元図

() 内に示してある。

滑石製臼玉の製作工程

工程1：滑石原石を割って、大小の不整形滑石片をとる。

工程2：砥石を使って滑石片をうすく研磨する。その後、金属利器を使って筋目を入れ方形に折る。
この作業によって7mm四方程度の方形チップが完成する。

工程3：方形チップに穿孔する。

工程4：穿孔チップの側面を円形に研磨して、臼玉が完成する。

工程1に関して、滑石原石20点が一ヶ所にまとめて置かれた状態で出土している。長さ20cm弱、重さ720gの板状の原石1点が含まれるが、大多数は長さ10cmに満たず、重さ100~200gの小さいものである。原石は福岡市香椎周辺や須恵町等で採集できるそうである。

工程2に関して、チップを適当な大きさに揃えるために筋目を入れて折っている。仲間氏は格子目状に筋目を入れた板チョコ状の未製品を想定されているが、本遺跡では出土していない。タテの筋目を表面に、ヨコの筋目を裏面に入れたチップもあり興味深い。

工程3に関して、穿孔作業は一連の工程中最も難しい作業である。穿孔時の欠損片334点に比べて工程4での失敗は28点にとどまる。また、側面を研磨していない不整形チップに穿孔した例が2点認められる（第56図150・151）。原石が小さいことも考えると、滑石の産地から離れているため、その入手が困難であり、このような屑も可能な限り利用したと言えるかもしれない。

工程4に関して、断面形が算盤玉形にならず、側面が平坦なものが多い。研磨の擦痕は斜め方向についている。このことから複数のチップを糸に通して、一度に多くの臼玉を仕上げたことが分かる。

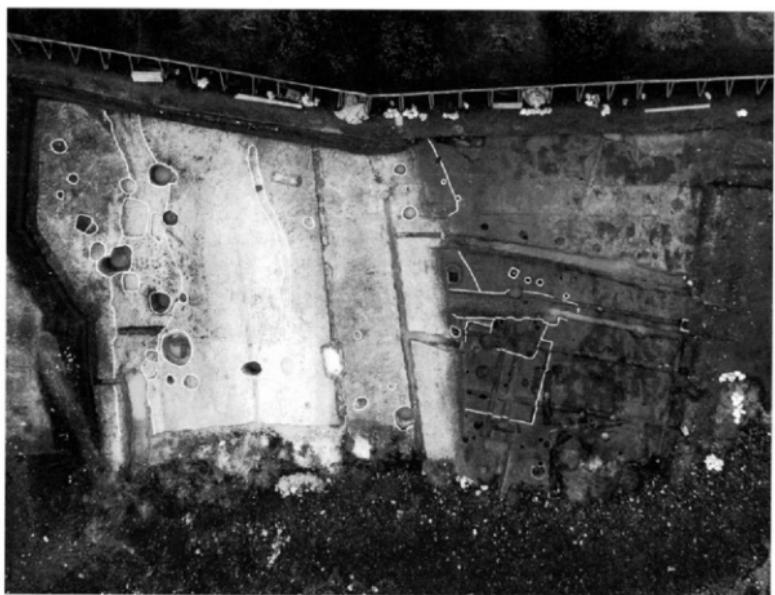


写真37 III区全景（南東から）



写真38 II区全景（南東から）



写真39 堪穴住居群（南西から）



写真40 堀立柱建物群（南西から）



写真41 SC052（南西から）



写真42 SC053（南西から）



写真43 SC057（西から）



写真44 SC058（北西から）



写真45 SC058滑石原石
出土状況

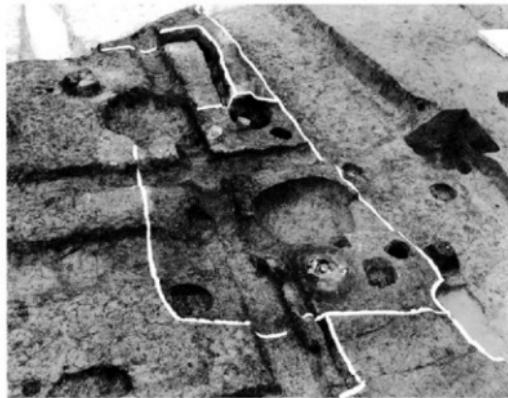


写真46 SC066（東から）



写真47 SE040（西から）



写真48 SE046（北から）



写真49 SE060 ねずみ返し状
木製品出土状況

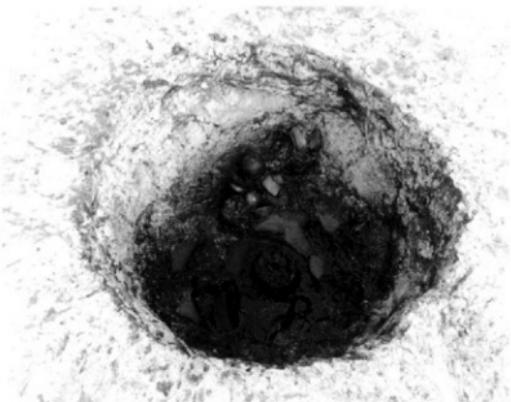


写真50 SK038（東から）

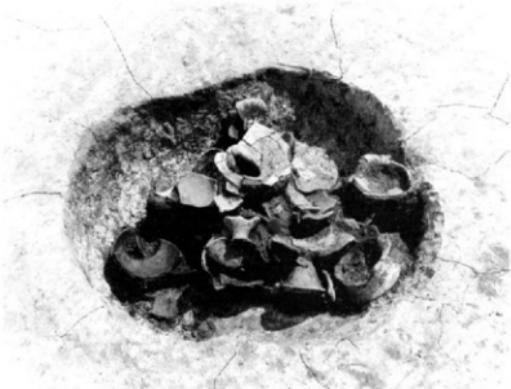


写真51 SK044（北から）



写真52 SC057（西から）



224



225



220



316



64

写真53 出土土器

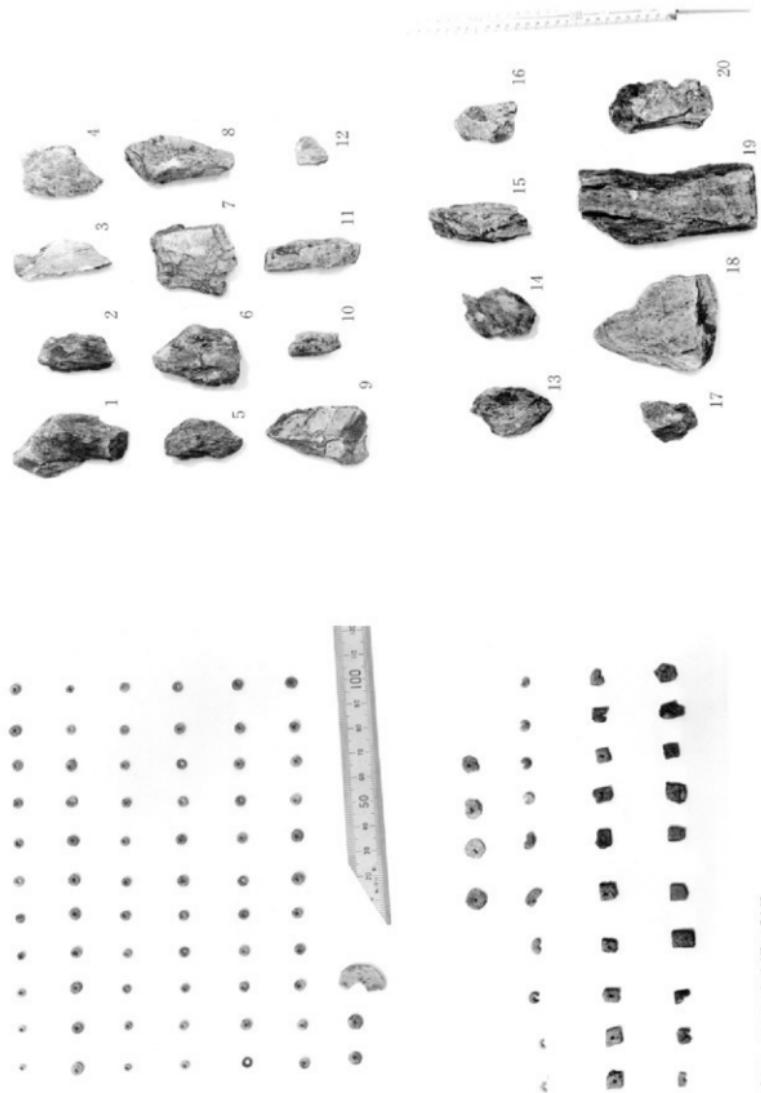


写真54 SC058出土滑石製品

外環状道路関係文化財発掘調査報告書13

高 畑 遺 跡

—第18次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集

2002年（平成14）年3月5日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

☎ (092) 771-4667

印 刷 正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺三丁目28-1

☎ (092) 806-5708